

政黨本部は雑談多し。自肅せんせば本部の規律より初めよ。例、圍碁、將棋盤を本部より取り上げよ。

突如大命を拜す國策の準備ありや無し、大努力

凝視の力尙大努力を要す

再び怒るな

六禁斷嚴重

選舉苦杯と二人の病苦忘るゝな

心境微動なし

イ、早起早寢に勤めよ（効果上がる）

ロ、火に親しむものは弱し

ハ、普通の持業を廢し精神力を薬とす

ニ、起居態度を端正にせよ且つ悠々應揚たれ

一、言葉を慎み且つ少くし丁重なるは偉人の面目なり

二、一点すぎなき人は笑談を言はず且つ大聲笑ふ勿れ

三、自分の事は自分で辨ぜよ

四、行終はる迄汝雲水、一切の尊稱を辭せよ（時を嚴守せよ、能はざる時は約束するなかれ）

節約主義に徹底せよ、徳積まざれば光なし

汽車三等となる、特に衆と共にあれ

甲、亞細亞の光とは何ぞ、我

乙、黙して一点凝視せよ光輝かん（徳は守ることを云ふ）

一劍飛來

心自ら八方に配せよ（少し進む）

祖先と親戚を考へよ

呼吸を調節せよ

可成早く英語に着手せよ

黙の定力發揮せよ

謙抑人に聞け

自ら其智を用ひず

垂直にして語れ丹田を以て

黄檗ニ弟子臨濟。作務のこき臨濟の空手なるを見黄檗鋤をいかにせしかと問ふ。臨濟答へて有、一人一將去也。之れ大見識を發表せし語なり。凡て言句は心境の顯はれ。自信に満ちて常に物語れ。堂々として卑屈なるなかれ。我一步進む。

賊は是れ小人、智

過三君子……黄檗の全身代を取り上げやうとする臨濟は

之れ大賊、智は亦尋常のものにあらず

當分宴會謝絶

拇指を藏せよ（惡魔拇指より入る）

徒歩主義

淺草。深川不動。水天宮。十七日、二十一日、五日、老若男女を以て埋む。各人の願千差萬別。而かも佛天の御利益歴々たり。此の利益、此の願。疑ふ所ろなし。佛教は日本に於て大飛躍。初めて意義を發揮せり。深甚微妙の理含む

一切事修行の餘暇、妥協するなかれ

明々々後日の確信加はる、相當將來の確信加はる、更に眞勇を作れ

眠について考へよ、忍は苦にあらず、樂境なり、持續せよ

天我に書を與へよ、食を考へよ、靈界に通するの途ありや

我清淨病を治せん、諸神諸佛の命を俟つ

新なる行を與へよ、人を猜疑するなかれ

神佛に謝す（自利、利他二百日目。正しき姿勢にて眠れ）

第九十八日目附録

政黨は自肅せんとすと。積極的に努力することは暫く言はず。政黨本部にて一刻千金の白晝圍碁、將棋に耽ること。夜は待合、料理亭に行きたがること。用もなきに自動車を飛ばすこと。選舉區にをも

ねりて金を無理して振りまくこと。心あるもの私かに眉をひそむ。之等を打破するを得ずして何の自
肅ぞや。之等は矯正不可能なりと言ふか。よし然らば寧ろ大功細き人を顧みず。大積極大飛躍、不惜
身命の突撃か而して此の勇もなくば。暫く天下の侮を受くるに甘するに若かざるなし。決意すれば一
擧にして兩端を得ん、只勇のみ

徒歩して疲勞せざるに達せよ、精神の力のみ
法難除、病難除、觀音行、一歩々々進む

昨日 十句經 千卷 (一萬八千四百卷) 第四十二
心經 二十卷 (三七〇) 一枚外二枚
呪 一〇八 (一四〇四) 九十九枚

怒を抑ゆる名藥なきや

自分を戒め且つ青年に告ぐ

一日飢ゆるときあるものは幸福なり、飢いて飽かざるものは明日幸福なり

書狀は名筆を尊ばず、明確なれ

刻々反省せよ、反省より積極の修行なし、反省は日に自由にして且つ日に自在なり

雑談を戒めよ 年年會各所に敬老會を起せ

病者修養法

第一則 一切を忘れよ

第二則 最上の責任者落ちつけ

第三則 看護者は凡て病者の心持ち

第四則 信念は信仰によれ

第五則 讀書徹底せよ

第六則 責任者は凡て病者之苦樂を共にせよ

第七則 科學を信じ且つ尊重せよ

第八則 病者に自立の確信を與へよ

第九則 病者の前には常に端正

第十則 快復と見れば更に緊張

政界刷新法則

第一則 八百長を廢せよ

第二則 分に應じ身を慎め

自肅は青年より初むべし、青年憤起せよ

第九十九日

昭和十一年五月三十日

富山宅

平常時は平常。參禪入室を眞劍と言ふ。否參禪は師に教を受け、面、小手を着けての稽古に過ぎず。
平時却て之れ眞劍。「隋氣滿々徒らに長命を求むるなかれ」平常眞劍。一句萬世に残れば夕死して佳。
緊張せよ。

突如大命を拜す國策の準備ありや無し、大努力

再び怒るな

一劍飛來

六禁斷嚴重

心自ら八方に配せよ(少し進む)

選舉苦杯と二人の病苦忘るゝな

祖先と親戚を考へよ

心境微動なし

呼吸を調節せよ

イ、早起早寢に勤めよ(効果上る)

可成早く英語に着手せよ

ロ、火に親しむものは弱し

默の定力發揮せよ

ハ、普通の持藥を廢し精神力を棄さず

ニ、起居態度を端正にせよ且つ悠々應揚たれ

一、言葉を慎み且つ少くし丁寧なるは偉人の面目なり

二、一点すきな人は笑談を言はず且つ大聲笑ふなかれ

3、自分の事は自分にて辨ぜよ
 4、行終はる迄汝雲水一切の尊稱を辭せよ（時を嚴守せよ、能はざる時は約束するなかれ）
 節約主義に徹底せよ、徳積まざれば光なし

汽車三等となる、特に衆と共にあれ

甲、亞細亞の光さは何ぞ、我

乙、黙して一点凝視せよ光輝かん（徳さは守ることを云ふ）

謙抑人に聞け
 自ら其智を用ひず
 垂直にして語れ丹田を以て

人曰く釋尊晚年不幸。若くは後世の爲めに示さんが爲なりと。釋尊は最上の幸福者。身如堅鐵。入滅のとき戶外抄羅樹下に眠らる。地は病床、天は病衾。暖にして輕。悠々たる涅槃最上の幸福者。蓋し健康は最大の強者にして幸福なるを以てなり。思は飛ぶ万里南方クシナガラ城。

臨濟の補佐者普化和尙有頭無尾、有始無終。仰山

之を臨濟の爲めに豫言す

當分宴會一切謝絶
 拇指を藏せよ（惡覺拇指より入る）
 徒歩主義（光は五年効果十年）

九十九日修行す。病魔其他の障害重積したれども。修行一點崩れず今日に至る。郷黨の人同憂の士の同情による。感謝す。今尙修行は山の麓なり。愈々前途嶮。益々發奮努力。水火の苦陣を突破せん

一切事修行餘暇、丹協するなかれ

明々々後日の確信加はる、相當將來の確信加はる、更に眞勇を作れ

眠について考へよ、忍は苦にあらず、樂境なり、持續せよ

天我に書を與へよ、食を考へよ、靈界に通ずるの途ありや

我清淨病を治せん、諸神諸佛の命を俟つ

新なる行を與へよ、人を猜疑するなかれ

神佛に謝す（自利、利他二百日目。正しき姿勢にて眠れ）

第九十九日附録

願みて九十九日慚愧骨に徹す。より眞劍の境致あり。より莊嚴の天地あり。修行一點の狂ひなし。雖も。尙逸樂隋氣の風脱せず。如此尙一箇の青年を教ふるに足らず。更に第二段に入りて猛修行を繼續増加せん。只天我に修行の項目を與へ給はざれば如何せん。只平常時眞劍の境致に入る様修行徹底致したし、夫には諸惡魔の來襲愈々猛烈ならん事を。來れ。

徒歩して疲勞せざるに達せよ、精神の力のみ

法難除、病難除、觀音行、一歩々々進む

昨日 十句經 千卷

（一萬九千四百卷） 第四十三

心經 二十卷

（三九〇） 一枚外三枚

呪 一〇八（十四日）

（一五一一） 百〇三枚

怒を抑ふる名藥なきや

自分を戒め且つ青年に告ぐ

一日飢ゆるときあるものは幸福なり、飢いて飽かざるものは明日幸福なり

書狀は名筆を尊ばず、明確なれ

刻々反省せよ、反省より積極の修行なし、反省は日に自由にして日に自在なり

雑談を廢せよ 青年會各所に敬老會を起せ

病者修養法

第一則 一切を忘れよ

第二則 最上の責任者落ちつけ

第三則 看護者は凡て病者の心持ち

第四則 信念は信仰によれ

- 第五則 讀經徹底せよ
- 第七則 科學を信じ且つ尊重せよ
- 第九則 病者の前には常に端正
政界刷新法則
- 第一則 八百長を廢せよ
政界刷新を志すものは青年と共にせよ、青年を迎へよ、而も純なるものを
- 第六則 責任者は凡て病者と苦樂を共にせよ
- 第八則 病者に自立の確信を與へよ
- 第十則 快復を見れば更に緊張
- 第二則 分に應じ身を慎め

第百日 昭和十一年五月三十一日 富山宅

修行百日に達す。爲せし處何。反省し卒れば慚愧のみ。我缺點餘り大。其萬一を矯めんとして能はず。曲れる老幹を直にせんとするが如し。薪を以て火中に投ずるに苦かざるなり。修行漸く入口。來るべき百日必ず嶮。欣然として攀ぢんのみ。

突如大命を拜す國策の準備ありや無し、大努力

- 再び怒るな
- 六禁斷嚴重
- 選舉苦杯と二人の病苦忘るゝな
- 心境微動なし
- イ、早起早寝に勤めよ（効果上る）
- ロ、火に親しむものは弱し
- ハ、普通の持藥を廢し精神力を藥とす
- ニ、起居態度を端正にせよ且つ悠々應揚たれ
- 一劍飛來
- 心自ら八方に配せよ
- 祖先と親戚を考へよ
- 呼吸を調節せよ
- 可成早く英語に着手せよ
- 默の定力發揮せよ

- 1、言葉を慎み且つ少くし丁重なるは偉人の面目なり
- 2、一点すぎなき人は笑談を言はず且つ大聲笑ふなけれ
- 3、自分の事は自分で辨せよ
- 4、行終はる迄汝雲水一切の尊稱を辭せよ（時を嚴守せよ、能はざる時は約束するなけれ）
節約主義に徹底せよ、徳積まざれば光なし

- 甲、亞細亞の光とは何ぞ、我
謙抑人に聞け
自ら其智を用ひず
- 乙、黙して一点凝視せよ光輝かん（徳は守る、こを云ふ）
垂直にして語れ丹田を以て
- 別の懷中日誌に我一度死、あと餘生と書す、丁度第十六日に當る。五月十六日病魔最後の突撃、漸次好轉。諸神諸佛の御加護。有りがたし、有りがたし。何をか言はん。何をか求めん。
當分宴會一切謝絶
（惡覺拇指より入る）
（光は五年効果十年）
- 黄檗、臨濟に法をつぐとき、證として禪版を渡さんとす、
拇指を藏せよ
（光は五年効果十年）
- す、臨曰く火を持ち來れ焼かんぞ、山を動かさし海を干す。此の力、此の力
徒歩主義

百日修行終はる。立てし誓は崩れず。一生最後の修行大道。此の道を歩いて今夜死すも恨む所なし。我安心せり。凡て是れ諸神諸佛の御加護なり。謹而御禮申し上げ。只御禮申し上げ。

- 一切事修行の餘暇、妥協するなけれ
- 明々々後日の確信加はる、相當將來の確信加はる、更に眞勇を作れ
- 眠について考へよ、忍は苦にあらず、樂境なり、持續せよ
- 天我に書を與へよ、食を考へよ、靈界に通ずるの途ありや
- 我清淨病を治せん、諸神佛の命を俟つ

新なる行を興へよ、人を猜疑するなかれ
神佛に謝す(自利、利他二百日目。正しき姿勢にて眠れ)

第百日目附録

病魔、家庭に来る、之を悪魔の所爲と言ふか。選舉失落之を大なる障害と言ふか。二月以來外出不能之を大なる束縛と言ふか。之の因縁によつて偉行録百日進む。多年希望の一生最後の修行に入る。障害こそ之れ神佛の慈悲。悪魔と見せて實は修道の門に導かせ給へしもの。束縛と見せて修行の時を與へ給へしもの。凡ては御慈悲の神意佛命。感謝の外辭なし。明日よりは第二段の修行。此の身寸裂さるゝも御慈悲の爲めなり。顧みて百日唯感謝あるのみ

徒歩して疲勞せざるに達せよ、精神力のみ
法難除、病難除、觀音行、一步々々進む

昨日 十句經 千卷 (二萬四百卷) 第四十四
心經 二〇〇 (四一〇) 一枚外二枚
呪 一〇八(十五日) (一六二〇) 百〇六枚

怒を抑ふる名藥なきや

自分を戒め且つ青年に告ぐ

一日飢ゆるときあるものは幸福なり、飢いて飽かざるものは明日幸福なり
書狀は名筆を尊ばず、明確なれ

刻々反省せよ、反省より積極の修行なし、反省は日に自由にして日に自在なり
雑談を戒めよ 青年會各所に敬老會を起せ

病者修養法

第一則 一切を忘れよ

第三則 看護者は凡て病者の心持ち

第五則 讀經徹底せよ

第七則 科學を信じ且つ尊重せよ

第九則 病者の前では常に端正

政界刷新法則

第一則 八百長を廢せよ

第二則 最上の責任者落ちつけ

第四則 信念は信仰によれ

第六則 責任者は凡て病者之苦樂を共にせよ

第八則 病者に自立の確信を興へよ

第十則 快復と見れば更に緊張

第二則 分に應じ身を慎め

第百一日

昭和十一年六月一日

富山宅 晴

本朝午前二時暗室内を歩し確く自ら信す百日以前に比し一階上れりと。更に百日修行清淨一點の崩れなくんば更に一階向上せん。如何なる困難も神佛の御慈悲として欣然として受け努力せん。命の儘

突如大命を拜す國策の準備ありや無し、大努力

再び怒るな

一劍飛來

六禁斷嚴重

心自ら八方に配せよ(少し進む)

選舉苦杯と二人の病苦忘るな

祖先と親戚を考へよ

心境微動なし

呼吸を調節せよ

イ、早起早寢に勤めよ

可成早く英語に着手せよ

ロ、火に親しむものは弱し

默の定力發揮せよ

ハ、普通の持藥を廢し精神力を棄とす

偉行録

- ニ、起居態度を端正にせよ且つ悠々應揚たれ
- 1、言葉を慎み且つ少くし丁寧なるは偉人の面目なり
- 2、一点すぎなき人は笑談を言はず且つ大聲笑ふなけれ
- 3、自分の事は自分で辨ぜよ
- 4、行終る迄汝雲水一切の尊稱を辭せよ(時を嚴守せよ、能はざる時は約束するなけれ)

節約主義に徹底せよ、徳積まざれば光なし

汽車三等となる、特に衆と共にあれ

甲、亞細亞の光とは何ぞ、我

乙、黙して一点凝視せよ光輝かん(徳さは守ることを云ふ)

法を繼ぐまは何ぞ力。定力。丹田。正を把つて絶対に屈せず。其の否に對して斷乎拒絶。大法を提げ

ては權勢、金力凡て是れ土塊。我れ一足之に立つに至る。百日を省みて甚大の差。更に進んで春風裏

桃花微笑の境に達せんことを。

不展三鋒鏑一如何得勝……臨濟之に對して一句加へざ

りしを遺憾とす

當分宴會一切謝絶
拇指を藏せよ(惡覺拇指より入る)
徒歩主義

昨日偉行録を書きし後、病氣悪化。病者冷然、我亦不動。本朝好轉百日以前に比して差甚大。病者に

一切事修行の餘暇、妥協するなけれ

明々明後日の確信加はる、相當將來の確信加はる、更に眞勇を作れ

眠について考へよ、忍は苦にあらす、樂境なり、持續せよ

天我に書を與へよ、食を考へよ、靈界に通するの途ありや

我清淨病を治せん、諸神諸佛の命を俟つ

新なる行を與へよ、人を猜疑するなけれ

神佛に謝す(自利、利他は二百日目。正しき姿勢にて眠れ)

第一百一日目附録

過ぎし百日を顧れば。行動を束縛されし障あり、然ども之れ修行の縁却て喜ぶべし。病者好轉。小供等の病氣大好轉。東京及富山子女心を合はせて生活の方針成る。我亦健康にして修行進む。之れを幸福云はすして何ぞ。來る百日を豫想すれば。苦行難路險を加へん。然ども誓へし行の崩れざる限り諸神諸佛の御加護確實。加ふるに修行の師及書に乏しからざるに於てをや。憂ふる所ろなし。淡々向上。

臨濟録により刻々定力の血を吸いつゝあり。刻々骨となり肉ミ化しつゝあり。地下に彼を喚び其の喉を扼し。兩眼を抽出して更に我が眼睛を以て更へんとす、來れ凡僧。

徒歩して疲勞せざるに達せよ、精神の力のみ

法難除、病難除、觀音行、一歩々々進む

昨日 十句經 千卷

心經 二〇〇

呪 一〇八(十六日)

十句經、謹誦、二萬千四百卷に達す、愈々世上に流布し以て病苦を救ふに努力せん、佛の御利益、疑ふ所なし。

怒を抑ゆる名藥ありや

(二萬千四百卷) 第四十五
四三〇 一枚外四枚
一七二八 百十一枚

自分を戒め且つ青年に告ぐ
 一日飢ゆるとききるものは幸福なり、飢いて飽かざるものは明日幸福なり
 書状は名筆を尊ばず、明確なれ
 刻々反省せよ、反省より積極の修行なし、反省は日に自由にして日に自在なり
 雑談を戒めよ 青年各所に敬老會を起せ

病者修養法

- 第一則 一切を忘れよ
- 第二則 最上の責任者落ちつけ
- 第三則 看護者は凡て病者の心持ち
- 第四則 信念は信仰によれ
- 第五則 讀經徹底せよ
- 第六則 責任者は凡て病者と苦樂を共にせよ
- 第七則 科學を信じ且つ尊重せよ
- 第八則 病者に自立の確信を與へよ
- 第九則 病者の前には常に端正
- 第十則 快復を見れば更に緊張
- 政界刷新法則
- 第一則 八百長を廢せよ
- 第二則 分に應じ身を慎め

(青年と語る道別に考ふること)

第二百二日

昭和十一年六月二日

富山宅 晴、暖

百日の後郷黨の青年に我が修行を少しく知らしめ鼓舞せんことを。陣容如何。更に整備せよ。我れ百日以前演説四時間。向後如是底のものに非ず。徹底人格の光幾個の青年發憤蹶起底のものにあらずんばあらず。努力々々

突如大命を拜す國策の準備ありや無し、大努力

再び怒るな

一劍飛來

六禁斷嚴重

心自ら八方に配せよ(少し進む)

選舉苦杯と二人の病苦忘るゝな

祖先と親戚を考へよ

心境微動なし

呼吸を調節せよ

イ、早起早寢に勤めよ(効果上る)

可成早く英語に着手せよ

ロ、火に親しむものは弱し

黙の定力發揮せよ

ハ、普通の持業を廢し精神力を薬とす

ニ、起居態度を端正且つ悠々應揚たれ

一、言葉を慎み且つ少くし丁寧なるは偉人の面目なり

二、一点すぎなき人は笑談を言はず且つ大聲笑ふなかれ

三、自分の事は自分にて辨ぜよ

四、行終るまで汝雲水一切の尊稱を辭せよ(時を嚴守せよ、能はざる時は約束するなかれ)

節約主義に徹底せよ、徳つまざれば光なし

甲、亞墨亞の光さは何ぞ、我

謙抑人に聞け

乙、黙して一点凝視せよ光輝かん(徳さは守ることを云ふ)

自ら其智を用ひず

家庭の病氣に心根を注ぎ努力す人道の極致なり。然ども又私事なり。國難遭遇、任に赴く時大義固より親を減すべし。天下の青年よ「上」御一人御命の前には欣然として全家族犠牲みなれ。

「野老拈花萬國春」若し臨濟此の句あり、我をして

繼がしめば別に見所あり

當分宴會一切謝絶

拇指を藏せよ(惡覺拇指より入る)

徒歩主義

昨日偉行録を書きし後、病氣悪化なし。雖も病者勞る。又俗務集まる。決然として日過ぐ。一政黨自肅の時來る。本部より初めよ。雜誌の府とするなかれ。主力を青年に注げ。

一切事修行の餘暇、妥協するなかれ

明々々後日の確信加はる、相當將來の確信加はる、更に眞勇を作れ

眠について考へよ、忍は苦にあらず、樂境なり、持續せよ

天我に書を與へよ、食を考へよ、靈界に通ずるの途ありや

我清淨病を治せん、諸神諸佛の命を俟つ

新なる行を與へよ、人を猜疑するなかれ

神佛に謝す(自利、利他は二百日目。正しき姿勢にて眠れ)

第二百二日附録

人あり東都の政情を傳ふ。異とするに足らず。心眼を以て見れば千里を隔つとも掌を指すが如し。原理は修行者之を立つ。

地上五寸若くは三寸、知らず或は一寸將五分。脱出向上せる我。馬觸るれば馬を切り、鐵觸るれば鐵を切らん。黙々として更らに百日を苦行せよ、諸神諸佛の御加護を待つ。

臨濟云箭過西天……我今如是、我出發の時、日、西山に没せん。只明日曉天の先驅者たらんのみ、邁進せん。

徒歩して疲勞せざるに達せよ、精神の力のみ

法難除、病難除、觀音行、一步々々進む

昨日 十句經 千卷

心經 二十卷

祝 一〇八(十七日)

(二萬二千四百卷) 第四十六

四五〇 一枚 三枚

一八三六 百十五枚

二萬二千四百卷に達し、之より御禮讀誦をなし日に百卷づゝ減じ行かん、世上流布の爲には別なり。怒を抑ゆる名藥ありや

自分を戒め且つ青年に告ぐ

一日飢ゆるときあるものは幸福なり、飢いて飽かざるものは明日幸禮なり

書狀は名筆を尊ばず、明確なれ

刻々反省せよ、反省より積極の修行なし、反省は日に自由にして且つ日に自在なり

雜誌を戒めよ 青年會各所に敬老會を起せ

病者修養法

第一則 一切を忘れよ

第三則 看護者の心持ち

第五則 讀經徹底せよ

第七則 科學を信じ且つ尊重せよ

第九則 病者の前には常に端正

政界刷新法

第一則 八百長を廢せよ

第三則 自肅は本部より。雜誌の府とするなかれ

第九則 病者の前には常に端正

第二百三日

昭和十一年六月三日

富山宅 曇

私事、私情を即時滅却して公事に殉ずるの態度を徹底せざる可らず。されど公事と功名利慾達成の念を混合するなかれ。之又私事なり。公事には君國に殉ずるの意にして利害に超絶す。天下の青

年よ君國の爲めに一切の私事を抛棄すべく。「廻れ右」の準備を常に整へよ。我亦然かり。

突如大命を拜す國策の準備ありや無し、大努力

再び怒るな

一劍飛來

六禁斷嚴重

心自ら八方に配せよ(少し進む)

選舉苦杯と二人の病苦忘るゝな

祖先と親戚を考へよ

心境微動なし

呼吸を調節せよ

イ、早起早寝に勤めよ(効果上る)

可成早く英語に着手せよ

ロ、火に親しむものは弱し

黙の定力發揮せよ

ハ、普通の持薬を廢し精神力を薬とす

ニ、起居態度を端正且つ悠々應揚たれ

一、言葉を慎み且つ少くし、丁重なるは偉人の面目なり

二、一点すぎなき人は笑談を言はず且つ大聲笑ふなけれ

三、自分の事は自分で辨せよ

四、行終はる迄汝雲水一切の尊稱を辭せよ

節約主義に徹底せよ、徳積まざれば光なし

汽車三等となる、特に衆と共にあれ

甲、亞細亞の光とは何ぞ、我

謙抑人に聞け

乙、黙して一点凝視せよ光輝かん(徳さを守ることを云ふ)

自ら其智を用ひず
垂直にして語れ丹田を以て

日滿博本願寺館に入り親鸞上人の苦行目うるむ。我等何の修行ぞや。慚愧々々。今や未曾有の非常時
天よ更に大修行を命ぜられよ。欣然受けん。向上の境致の儘一步前進足を上げんこす。

自笑一聲天地驚……石火も及ぶ莫く電光も通ずる事なし、天空に向つて駈けよ一切を尻目にかけて、力空を踏んで天に向つて駈けよ

當分宴會一切謝絶
拇指を藏せよ(惡覺拇指より入る)
光は五年効果十年
徒歩主義

我れ過去三十年東西奔走。信念抑も如何。救國濟民の理想如何。慚愧。家庭徒らに我の犠牲となり疲勞極なし。之を慰め勞はるは當然の事。向後理想なくんば斷じて動くな。

一切事修行の餘暇、妥協するなけれ

明々々後日の確信加はる、相當將來の確信加はる、更に眞勇を作れ

眠について考へよ、忍は苦にあらず、樂境なり、持續せよ

天我に書を與へよ、食を考へよ、靈界に通ずるの途ありや

我清淨病を治せん、諸神諸佛の命を俟つ

新なる行を與へよ、人を猜疑するなけれ

神佛に謝す(自利利他は二百日目。正しき姿勢にて眠れ)

第三百二日目附録

六月三日は私の記念日なり、布哇病院手術の日、松島事件起訴の當日、松事島事件は四十七才六月三日病者の日に當る、何等かを豫想せり、果然本朝六時、襖倒れ、我顔二寸の所に落つ、五分間以前枕を轉ずる迄其處にありき、若し當らば、鼻、目を挫くこと必せり、我思はず神佛の御加護と申しき、有りがたし、悪しき記念日其れにて去り他は平安、我清淨無垢、神佛を欺かず、依而佛天の御加護ありき、世の人疑ふなけれ、神佛を信仰せよ。

徒歩して疲勞せざるに達せよ、精神の力のみ

法難除、病難除、觀音行、一歩々々進む

昨日 十句經 九百卷 (二萬三千三百卷) 第四十七
 心經 十八卷 (四六八) 一枚 四枚
 呪 一〇八 十八 (一九四四) 百二十枚

我終日多忙、修行の爲すら時間不足。

利他の事不進。されど我只修行にのみ猛進。只因縁によつてのみ他を救はん。絶対虚榮をさく。

怒を抑ゆる名藥ありや

自分を戒め且つ青年に告ぐ

一日飢ゆるさきあるものは幸福なり、飢いて飽かざるものは明日幸福なり

書狀は名筆を尊ばず、明確なれ

刻々反省せよ、反省より積種の修行なし、反省は日に自由にして且つ日に自在なり

雑談を戒めよ、青年會各所に敬老會を起せ

病者 修養法

- 第一則 一切を忘れよ
- 第二則 最上の責任者落ちつけ
- 第三則 看護者は凡て病者の心持ち
- 第四則 信念は信仰によれ
- 第五則 讀經徹底せよ
- 第六則 責任者は凡て病者之苦樂を共にせよ
- 第七則 科學を信じ且つ尊重せよ
- 第八則 病者に自立の確信を與へよ
- 第九則 病者の前には常に端正
- 第十則 快復ミ見れば更に緊張
- 政界刷新法則
- 第一則 八百長を廢せよ
- 第二則 忿に應じて身を慎め
- 第三則 自肅は本部より。雑談の府さするなかれ
- 第四則 主力を青年に注げ

「自肅は反省に初まる、何を先づ以て反省するや」

第四百四日

昭和十一年六月四日

富山宅 曇

廣田氏議會にて青年の自殺を歎す。之に類するの青年又甚大なり。青年端的信念を植付けよ。青年信念を得れば衣食の如き自ら餘あり。何ぞ憂へん。況んや世界最大幸福の日本に於てをや。

突如大命を拜す國策の準備ありや無し、大努力

再び怒るな

一劍飛來

六禁斷嚴重

心自ら八方に配せよ

選舉苦杯と二人の病苦忘るゝな

祖先と親戚を考へよ

心境微動なし

呼吸を調節せよ

イ、早寝早起に勤めよ

可成早く英語に着手せよ

ロ、火に親しむものは弱し

默の定力發揮せよ

ハ、普通の持藥を廢し精神力を棄さず

ニ、起居態度を端正にせよ且つ悠々應揚たれ

一、言葉を慎み且つ少くし丁寧なるは偉人の面目なり

二、一点すぎなき人は笑談を言はず且つ大聲笑ふなかれ

三、自分の事は自分にて辨せよ

四、行成るまで汝雲水一切の尊稱を辭せよ(時を嚴守せよ、能はざる時は約束するなかれ)

節約主義に徹底せよ、徳積まされば光なし

汽車三等となる、特に衆と共にあれ

甲、亞細亞の光とは何ぞ、我
 乙、黙して一点凝視せよ光輝かん（徳とは守ることを云ふ）
 謙抑人に聞け
 自ら其智を用ひず
 垂直にして語れ丹田を以て
 今朝偶然我鼻梁を物にあて卒然として得る處あり。心自ら八方に配するに當り澤庵禪師の柳生に教へたる應無所住の端的。更に翻つて進むべきに常に退け。一氣に進むべき一步退け。判然として八方映せん。

言ひ訖つて端然として寂を示す、臨濟の修行徒事に
 あらず「端然寂」之ぞ人生最難事苦練々々

當分宴會一切謝絶
 拇指を藏せよ（惡魔拇指より入る）
 （光は五年効果十年）
 徒歩主義

軍部、政黨の自肅を要求せり。要求豈に軍部のみならんや。政黨眞劍に自肅せよ。自肅にあたり他を顧みるなかれ。軍人、官僚嚙牙にかへるなかれ。眞劍にまつしぐら反省自肅せよ。他は自ら倣はん依て國は救はれん。

一切事修行の餘暇、妥協するなかれ

明々々後日の確信加はる、相當將來の確信加はる、更に眞勇を作れ
 眠について考へよ、忍は苦にあらず、樂境なり、持續せよ

天我に書を與へよ、食を考へよ、靈界に通ずるの途ありや

我清淨病を治せん、諸神諸佛の命を俟つ

新なる行を與へよ、人を猜疑するなかれ

神佛に謝す（自利、利他二百日目。正しき姿勢にて眠れ）

第四百日目附録

曰く人心不安なりと然かり。不安は外、對外關係、内、百般の諸政方針不確立の爲めなり。然かり

故に對外方針の確立に内省百般の一新により不安は除かれん。然かり。偕て内外方針の確立は激化せる今日の情勢至難中至難。智者總動員尙不及。然らば不安は遂に永遠に去らずや。否信念確立せば不安去る、而て信念の確立は別箇獨立底のものなり。信念の確立は内外の情勢と別なり。例、川氾濫するにあたり水勢を明かにせざれば不安なり、然れども誰れか明年の水勢を豫期せん、茲に堤防を築けば氾濫の恐れなく、不安去る、しかも堤に水勢とは別箇なるが如し、故に時流に超越して信念を確立せよ。殊に青年の信念を確立せよ。
 病氣愈々調子順なり。本朝我れ鼻梁に物あたり少しく傷く昨日も鼻梁を打たれん。惡魔今や最後我顔面に通る。病者却て愈々宜ろし。我満足。來れ、惡魔。愈々修行純眞無垢清淨一掃せざれば止まず。

徒歩して疲勞せざるに達せよ、精神の力のみ

法難除、病難除、觀音行、一步々々進む

昨日 十句經 八百卷 (二萬四千百卷) 第四十八
 心經 十六卷 (四八四) 一枚 三枚
 呪 一〇八十九 (二〇五二) 百二十四枚

修行先決。餘時利他。絶對虚飾不許。只佛縁耳。

怒を抑ゆる名藥ありや

自分を戒め且つ青年に告ぐ

一日飢ゆるときあるものは幸福なり、飢いて飽かざるものは明日幸福なり
 書狀は名筆を尊はず、明確なれ

刻々反省せよ、反省より積極の修行なし、反省は日に自由にして且つ日に自在なり

雑談を戒めよ 青年會各所に敬老會を起せ

病者修養法

- 第一則 一切を忘れよ
 - 第二則 最上の責任者落ちつけ
 - 第三則 看護者は凡て病者の心持ち
 - 第四則 信念は信仰によれ
 - 第五則 讀經徹底せよ
 - 第六則 責任者は凡て病者之苦樂を共にせよ
 - 第七則 科學を信じ且つ尊重せよ
 - 第八則 病者に自立の確信を與へよ
 - 第九則 病者の前には常に端正
 - 第十則 快復を見れば更に緊張
- 政界刷新法則
- 第一則 八百長を廢せよ
 - 第二則 分に應じ身を慎め
 - 第三則 自肅は本部より。雑談の府にすくなかれ
 - 第四則 主力を青年に注げ
 - 第五則 青年に信念を與へよ

第五百五日

昭和十一年六月五日

富山宅 暖

政界刷新の自肅方針は枝葉を後にして根本的に考察し着手實行せよ。一時の功にあせつて大極を誤り天下の笑を招くなかれ。自肅は根幹より初めよ。急がば廻れ。

- 突如大命を拜す國策の準備ありや無し、大努力
- 再び怒るな
- 一劍飛來
- 六禁斷嚴重
- 心自ら八方に配せよ(少し進む、大に所得あり、更に苦慮)
- 祖先と親戚を考へよ
- 選舉苦杯と二人の痛苦忘るゝな

心境微動なし

- イ、早起早寢に勤めよ(効果上る)
- ロ、火に親しむものは弱し

- 呼吸を調節せよ
- 可成早く英語に着手せよ
- 黙の定力發揮せよ

- ハ、普通の持藥を廢し精神力を藥とす
- ニ、起居態度を端正にせよ且つ悠々應揚たれ
- 一、言葉を慎み且つ少くし丁寧なるは偉人の面目なり
- 二、一点すぎなき人は笑談を言はず且つ大聲笑ふなかれ
- 三、自分の事は自分にて辨ぜよ
- 四、行成る迄汝雲水一切の尊稱を辭せよ(時を嚴守せよ、能はざる時は約束するなかれ)

節約主義に徹底せよ、徳積まざれば光なし

汽車三等となる、特に衆と共にあれ

- 甲、亞細亞の光とは何ぞ、我
- 乙、黙して一点凝視せよ光輝かん(徳とは守ることを云ふ)
- 丙、一氣に進むさき一步退け、判然として八方映ぜん

- 謙抑人に聞け
- 自ら其智を用ひず
- 垂直にして語れ丹田を以て

病者衰弱の身を以て新鮮の氣を求め戸を開いて寢。我健康にして戸を閉づ。病者緊張、我却て恥づ。我亦別に抵抗養生法を初め別に附録を作り戦はん。以て青年向上の資とせん。

師無し疾、忽一日攝し衣據坐與三聖二問答、畢寂然而逝
と此の境致あつて初めて偉行録終了せん。

當分宴會一切謝絶
拇指を藏せよ(惡覺拇指より入る)
徒歩主義
(光は五年効果十年)

我本朝末末女と語る、菩薩自利利他の行を説く、我今向上夢亦清。目さめて我知る修行不退轉なる

を……一氣に進むとき一步退け。常に暗中を行くが如く心得よ、八方に映ぜん。……我利他の行動に出づるとき軍部の青年に呼びかけん、看よ。

一切事修行の餘暇、妥協するなかれ

明々々後日の確信加はる、相當將來の確信加はる、更に眞勇を作れ

眠について考へよ、忍は苦にあらず、樂境なり、持續せよ

天我に書を興へよ、食を考へよ、靈界に通ずるの途ありや

我清淨病を治せん、諸神諸佛の命を俟つ

新なる行を興へよ、人を猜疑するなかれ

神佛に謝す(自利、利他二百日目。正しき姿勢にて眠れ)

第二百五日目附録

我昨朝鼻梁を物にあて、長さ横一分、幅五厘の小創を受け、血にじむ。悪魔の試み、我如是辱を感受せしことなし。今後五十日間の修行小期中之を以て最上の失敗とすべきものならん。然さも之により卒然として得る處あり。初めて八方に配するの境に稍入る。又神佛の慈悲も申すべき乎。我一步向上せり、更苦慮一劍飛來に對する自由境致について努力せん。悪魔來れ且つ襲へ前後左右より打ちか

病氣順調。更によろし喜ぶ。一步一步公的の街道に轉するの餘裕を得たり、只功名の念を捨て一意修行に邁進。諸神諸佛の命の儘。疑はずして行く。

徒歩して疲勞せざるに達せよ、精神の力のみ

法難除、病難除、觀音行、一步々々進む

昨日

十句經 七百卷

(二萬四千九百卷) 第四十九

心經

十四

四九八

一枚 三枚

呪 一〇八 二十

二一六〇

百二十八枚

修行先決、餘事利他、虚飾不許、只佛縁

怒を抑ゆる名藥ありや

自分を戒め且つ青年に告ぐ

一日飢ゆるときあるものは幸福なり、飢いて飽かざるものは明日幸確なり

書狀は名筆を尊ばず、明確なれ

刻々反省せよ、反省より積極の修行なし、反省は日に自由にして且つ日に自在なり

雑談を戒めよ 青年會各所に敬老會を起せ

病者修養法

第一則 一切を忘れよ 第二則 最上の責任者落ちつけ

第三則 看護者は凡て病者の心持ち 第四則 信念は信仰によれ

第五則 讀經徹底せよ 第六則 責任者は凡て病者と苦樂を共にせよ

第七則 科學を信じ且つ尊重せよ 第八則 病者に自立の確信を興へよ

第九則 病者の前には常に端正 第十則 快復を見れば更に緊張

政界刷新法則

第一則 八百長を廢せよ 第二則 分に應じ身を慎め

第三則 自肅は本部より。雑談の府さするなかれ 第四則 主力を青年に注げ

第五則 青年に信念を興へよ 第六則 自肅は根幹より初めよ。急がば廻れ

大正十五年迄は我餘りに皮膚弱く、病氣の間屋と云はる。十五年秋以來修行道に入りてより漸次健康昭和二年より水かぶり木刀振、今日に至る。而して昭和四、五年頃、寒中セル單衣一枚、木綿肌衣短かきもの二枚、袴のみ、外出のとき單衣の羽織を着し雪中を突破して淡々、又東京の寒風を往來して平然たりき、マントを持たず、帽子なし、足袋はかす、洋傘一本のみ。昭和五年歐洲旅行に終始洋服を着してより、又東京にをける用務複雑の爲め洋服を用ふるに至りてより足袋、帽子を必要とするに到り、今日は帽子、足袋は勿論衣服も綿入。下着、木綿肌衣等なり。又夜は敷蒲團二枚、毛布二枚ツギの内に入り掛蒲團二枚を着す、昨夜より蚊帳を吊る、而して八疊の間を密閉し眠れり。妻病床、永らく横臥衰弱甚だし而かも尙新鮮の空氣の爲めに殆ど室を開き眠る、風邪にかされず。看護婦徹夜看視すも雖も尙ほ病者緊張の爲めなりと云ふべし。然るに我何ぞや室を密閉するとは。故に我室廣くして却て室内寢息の臭あり、病室は却て一點の臭氣なし。我かつて昭和四年の頃冬蚊帳をつりて雨戸を明け放てり又敷蒲團一枚を原則とせり、今や破れて如是、而かも他歩嚴重なる修行を厳行しつゝあるなり。於是斷乎として抵抗養生法の一項目を開き。漸次向上。天地自然と一枚になり暑に和し、寒に和し、雨に和し、雪に和し、土に眠り、水に隠れ、霞を吸い、霧にかくれる底の境致に向つて進まざる可らざるなり。

昭和十一年五月十五日我等夫婦死し餘世今日第二十一日、既に餘れり、何をか言はん、非常時青年訓練の犠牲とならば幸榮何に加へん。

- (1) 昨夜寢室八疊間、庭に向ふ障子五寸開き寝つた。室内今朝臭氣少なし。
- (2) 綿入は裕さなる。

第一百六日

昭和十一年六月六日

富山宅 晴

臨濟師無_レ疾忽一日攝_レ衣據坐與三聖問答畢寂然而逝……無_レ疾、寂然逝く、修養の極致なり。天地と一枚の境にあらずんば能はず。四時の自然に代る如し淡々。

突如大命を拜す國策の準備ありや無し、大努力

再び怒るな

一 劍飛來

六禁斷嚴重

心自ら八方に配せよ (少し進む、大いに所得あり)

選舉苦杯と二人の病苦忘るゝな

祖先と親戚を考へよ (注意を初む)

心境微動なし

呼吸を調節せよ

イ、早寢早起に勤めよ (効果上る)

可成早く英語に着手せよ

ロ、火に親しむものは弱し

黙の定力發揮せよ

ハ、普通の持業を廢し精神力を薬とす

ニ、起居態度を端正にせよ且つ悠々應揚たれ

一、言葉を慎み且つ少くし丁重なるは偉人の面目なり

二、一点すぎなき人は笑談を言はず且つ大聲笑ふなかれ

三、自分の事は自分にて辨ぜよ

四、行終はる迄汝雲水一切の尊稱を辭せよ (時を嚴守せよ、能はざる時は約束をするなかれ)

節約主義に徹底せよ、徳積まざれば光なし

甲、亞細亞の光とは何ぞ、我

謙抑人に聞け

乙、黙して一点凝視せよ光輝かん (徳さは守るゝを云ふ)

自ら其智を用ひず
垂直にして語れ丹田を以て

丙、一氣に進むとき一步退け、判然として八方映せん
内田良平氏著武道極意を讀む。宮本武藏の言、朝鍛夕鍊して磨きをほせて後、獨り自由を得、自ら奇特を得、通力不思議有る所、是れ兵として法を行ふの息なり云々。鍛鍊の後、知らずく其の境に至る。只鍛、只鍊、修行邁進。

僧問如何是佛法大意師便喝……臨濟まるだし。但し禪
是常に死活眞劍勝負。我是の境致に向つて進む

當分宴會一切謝絶
拇指を藏せよ（惡覺拇指より入る）
光は五年効果十年
徒歩主義

政界革新を志すもの、直ちに軍人に向つて自肅、自強研究會を提議すべし。但し自ら顧みて無垢清淨天地に恥ぢざる底の人に限る。此の如きもの今日無し。青年自憤世を救ふの大願を起こし、決然として現はるゝものなきや。我亦共に行かん。

一切事修行の餘暇、妥協するなかれ

明々々後日の確信加はる、相當將來の確信加はる、更に眞勇を作れ

眠について考へよ、忍は苦にあらず、樂境なり、持續せよ

天我に書を與へよ、食を考へよ、靈界に通ずるの途ありや

我清淨病を治せん、諸神諸佛の命を俟つ

新なる行を我に與へよ、人を猜疑するなかれ

神佛に謝す（自利、利他は二百日目。正しき姿勢にて眠れ）

第百六日目附録

昨夕君子（娘）を介して出入商人の妻に逢ふ、彼十數年以前家に女中たりしもの、嫁して家道思はしからず、神經甚だ衰弱。我れ神佛の尊きを教ふ。親戚のもの家業につき嘲り疑ふ事甚しき云ふ。之に

對抗するは弱き婦の及ぶ所にあらず。只神佛に頼み神佛の力によりて解決すべきことを教ふ。世の疑を受け又家政に苦しむ婦女子に告ぐ。如是き時自分の力によつて打開すべきことを思い立つなかれ。却つて神經を害する底の結果を招くに了らん。只至心に神佛に祈り神佛の御加護により解決することにせよ。靈驗著しく効果必ず顯はれん。
我れ觀音尊像の揮毫病者の爲めに除々こ行ふ。信念の泉は無盡無量なり。力の限り盡し世を救はんとす。

徒歩して疲勞せざるに達せよ、精神の力のみ

法難除、病難除、觀音行、一步々々進む

昨日 十句經 六百卷

心經 十二卷

呪 一〇八二二

（二萬五千五百卷） 第五十
五二〇 一枚 一枚
二二六八 百三十枚

修行先決、餘事利他、虚飾不許、只佛縁

怒を抑ゆる名藥ありや

自分を戒め且つ青年に告ぐ

一日飢ゆるときあるものは幸福なり、飢いて飽かざるものは明日幸福なり

書狀は名筆を尊ばず、明確なれ

刻々反省せよ、反省より積極の修行なし、反省は日に自由にして且つ日に自在なり

雑談を戒めよ 青年會各所に敬老會を起せ

病者修養法

第一則 一切を忘れよ

第二則 最上の責任者落ちつけ

- 第三則 看護者は凡て病者の心持ち
- 第五則 讀經徹底せよ
- 第七則 科學を信じ且つ尊重せよ
- 第九則 病者の前には常に端正
政界刷新法則
- 第一則 八百長を廢せよ
- 第三則 自肅は本部より。雜誌の府さするなかれ
- 第五則 青年に信念を與へよ
- 第四則 信念は信仰によれ
- 第六則 責任者は凡て病者と苦樂を共にせよ
- 第八則 病者に自立の確信を與へよ
- 第十則 快復み見れば更に緊張
- 第二則 分に應じ身を慎め
- 第四則 主力を青年に注げ
- 第六則 自肅は根幹より初めよ。急がば廻れ

附録ノ二

武道極意庄林藤原道一天眞流傳書の内、前は陽、後は陰、進は陽、退は陰、柔なるは陽、剛は陰云々人の身に病を生ずるも、皆陰陽の氣一偏に成りて鈞合を失ふによりて成る云々。陰の過たるを陽を以て之を救へ陽越へたるを陰を以て之を押へて互に相和す云々。柔は陽なり、陽の体は陰なり、陽は萬物の始めにして、氣現はるゝ所。柔なる様なれども其の發生の力の強き事金石の堅きも是に敵するこゝ能はず、是れ柔は陽にして剛きは其体なり云々。然り病に對抗し且つ健康増進の道程は柔を以て方針とすべし、柔以て寒を挫き暑を倒すを得。

八疊間外に向つて五寸開き寝る、昨日は前日と同斷、急ぐなかれ

病は魔なり、剛を以て對すれば魔怒り威を揮ひ病治せず、魔の氣づかざる間に柔以て魔を欺き健康地帯に脱出すべきなり。

第一百七日

昭和十一年六月七日

富山宅 曇

修養極致は死を恐れざるにあり。此の境致に立つて更に修養を重ねんか眞の自由を得。戦時軍人多く死を恐れず。凱旋して稀れに人格悪化するものあり。惜しむべし。故に平常修養によりて恐怖なき地に達するを得せしめん乎最も佳。努力せよ。

突如大命を拜す國策の準備ありや無し、大努力

再び怒るな

一劍飛來

六禁斷嚴重

心自ら八方に配せよ

(少く進む、大に所得あり)
(苦慮更に)

選舉苦杯と二人の病苦忘るゝな

祖先と親戚を考へよ

心境微動なし

呼吸を調節せよ

イ、早起早寝に勤めよ(効果上る)

可成早く英語に着手せよ

ロ、火に親しむものは弱し

默の定力發揮せよ

ハ、普通の特藥を廢し精神力を藥とす

ニ、起居態度を端正にせよ且つ悠々應揚たれ

一、言葉慎み且つ少くし丁重なるは偉人の面目なり

二、一点すぎなき人は笑談を言はず且つ大聲笑ふなかれ

三、自分の事は自分にて辨ぜよ

四、行成るまで汝雲水一切の尊稱を辭せよ(時を嚴守せよ、能はざる時は約束するなかれ)

節約主義に徹底せよ、徳積まざれば光なし

汽車三等となる、特に衆と共にあれ

甲、亞細亞の光とは何ぞ、我

乙、黙して一点凝視せよ光輝かん（徳とは守ることを云ふ）
丙、一氣に進むとき一步退け判然として八方映ぜん

謙抑人に聞け
自ら其智を用ひず
垂直にして語れ丹田を以て

萬事に心を配る之を氣構へと言ふ。身構は術の上の形にあらず、精神上の身構を云ふ。武道極意云ふ。鍛錬により氣構へに寸隙なきに至る。進退動作凡て如法。終に隙なきに至る。苦練々々。

汝力信不及なる爲めに今日葛藤すと臨濟言ふ。信念確立すれば葛藤なし、萬里透徹……喝一喝、臨濟全露出

當分宴會一切謝絶
拇指を藏せよ（惡覺拇指より入る）
徒歩主義（光は五年効果十年）

農村を振興し、中小商工業を發展すれば生活安定すと思ふは誤れり。時局重大不安去らず。別に精神安定の大策を講じ相俟ち初めて達成す。精神安定は獨立せる一箇の題目として取扱ふ可し、而かも可能なり。識者大に考慮せよ。

一切事修行の餘暇、妥協するなかれ

明々後日の確信加はる、相當將來の確信加はる、更に眞勇を作れ

眠について考へよ、忍は苦にあらず、樂境なり、持續せよ

天我に書を與へよ、食を考へよ、靈界に通ずるの途ありや

我清淨病を治せん、諸神諸佛の命を俟つ

新なる行を與へよ、人を猜疑するなかれ

神佛に謝す（自利、利他は二百日目。正しき姿勢にて眠れ）

第七日附録

劍道極意小野忠明の妙技につき、柳生門下生三人一時にかゝり尙ほ小供を相手にするが如し。門生評して曰く「忠明の致し方、唯だ水を切り雲を掴むが如し、偶ま木刀に當れば彈ね返へされて持ちこた

へられず、名人と云ふにやあらん。世に云ふ魔法使にあらん、云々」自由の極地は如是。我を切つて我水の如し、我を掴んで我雲の如し。修必ず茲に至る、我疑はず。更に苦慮せよ。只平常時坐作進退の内に修練せよ。

徒歩して疲勞せざるに達せよ、精神の力のみ

法難除、病難除、觀音行、一步々々進む

昨日 十句經 五百卷 (二萬六千卷) 第五十一

心經 十卷 五二〇 一枚 三枚

呪 一〇八三三 二三七六 百三十四枚

修行先決、餘時利他、虛飾不許、只佛縁

怒を抑ゆる名藥ありや

自分を戒め且つ青年に告ぐ

一日飢ゆるときあるものは幸福なり、飢いて飽かざるものは明日幸福なり

書狀は名筆を尊ばず、明確なれ

刻々反省せよ、反省より積極の修行なし、反省は日に自由にして且つ自在なり

雑談を戒めよ 青年會各所に敬老會を起せ

病者修養法

第一則 一切を忘れよ

第二則 最上の責任者落ちつけ

第三則 看護者は凡て病者の心持ち

第四則 信念は信仰によれ

第五則 讀經徹底せよ

第六則 責任者は凡て病者ニ苦樂を共にせよ

第七則 科學を信じ且つ尊重せよ

第八則 病者に自立の確信を與へよ

- 第九則 病者の前には常に端正
- 第十則 快復ミ見れば更に緊張
- 政界刷新法則
- 第一則 八百長を廢せよ
- 第二則 分に應じ身を慎め
- 第三則 自肅は本部より。雜誌の府ミするなけれ
- 第四則 主力を青年に注け
- 第五則 青年に信念を與へよ
- 第六則 自肅は根幹より初めよ。急がば廻れ

附録ノ二

抵抗養生法

武道極意、庄林藤原道一天眞傳書の内。孟子勿忘勿助長を引用す。(助長ミは功を急ぐことなり) 唯地道にして靜かに歩み、少しも緩み無ければ遠く行く者也、是れ忘るゝ事もなく助長することもなき爲めなり、捕合の義も此の理を肝要とす、強いて勝たんことを求めて、ゆかぬ所を爲んとし、其氣一偏になれば、片々は自ら虚に成つて非が出来るなり、又うかと構へて龜忽に心を用ひ、氣を配らずしては猶ほ勝つことを得難し、此の二つの的を除て、上手の地位に至るべし、八疊間五寸開き寝る、一昨日ミ同斷、急がず 今日より足袋はかす。

第百八日

昭和十一年六月八日

富山宅 曇

且つ戦へ、且つ進む、修道、苦行。刻一刻勇氣加はり、日一日意氣天を衝く。我亞細亞の光たらん。我にあらすして誰れか亞細亞の光たらん。邁進々々。

突如大命を拜す國策の準備ありや無し、大努力

再び怒るな

一劍飛來

六禁斷嚴重

心自ら八方に配せよ

選舉苦杯と二人の病苦忘るゝな

祖先と親戚を考へよ

(少し進む、大に所得あり) 苦慮更に

心境微動なし

呼吸を調節せよ

イ、早起早寝に勤めよ(効果上る)

可成早く英語に着手せよ

ロ、火に親しむものは弱し

黙の定力發揮せよ

ハ、普通の持薬を廢し精神力を棄さず

ニ、起居態度を端正にせよ且つ悠々應揚たれ

一、言葉を慎み且つ少くし丁寧なるは偉人の面目なり

二、一点すきな人は笑談を言はず且つ大聲笑ふなけれ

三、自分の事は自分にて辨ぜよ

四、行終はる迄汝雲水一切の尊稱を辭せよ(時を嚴守せよ、能はざる時は約束するなけれ)

節約主義に徹底せよ、徳積まざれば光なし

汽車三等となる、特に衆と共にあれ

甲、亞細亞の光とは何ぞ、我

謙抑人に聞け

乙、黙して一点凝視せよ光輝かん(徳とは守ることを云ふ)

自ら其智を用ひず

丙、一氣に進むさき一步退け、判然として八方映ぜん

垂直にして語れ丹田を以て

禪は日本に入り初めて意義をなす。臨濟、短刀直入の眞理に人を入らしめんが爲め、眞劍の勝負を以て終始せり、日本に入りて初めて意義をなせり。而り今や又衰ふ。武士劍を帶ぶ路に邁ふて常に果し合ひ。男子國を荷ふ、一進一退常に吾國の爲めなり。眞劍なれ、眞劍なれ。

無位の真人、道へ道へは真にすさまじ、我今此の境致を解す、昭和三年此の公案を看今より想ふ夢の如し

當分宴會一切謝絶
拇指を藏せよ (惡覺拇指より入る)
徒歩主義 (光は五年効果十年)

阿附迎合を排し國民一度信念に生きれば、天下の事直ちに解決す。軍事、外交、財政、産業、教育、信念確立せんか直ちに解決す。先づ以て不撓不屈の信念確立の爲めに努力せよ

一切事修行の餘暇、妥協するなかれ

明々々後日の確信加はる、相當將來の確信加はる、更に眞勇を作れ

眠について考へよ、忍は苦にあらず、樂境なり、持續せよ

天我に書を與へよ、食を考へよ、靈界に通するの途ありや

我清淨病を治せん、諸神諸佛の命を俟つ

新なる行を我に與へよ、人を猜疑するなかれ

神佛に謝す (自利、利他は二百日目。正しき姿勢にて眠れ)

第百八日目附録

今に至つて山崎大耕老師の恩忘るべからずと感更に新なり。臨濟錄無位の真人の公案著語につき參禪老師は威雄震十方聲價動寰宇と與へらる、其の時、味、分からざりき。今に至つて初めて解す。昭和三年十二月一日より今日、八年に到る、臨濟の面目初めて徹す。遅いかな。さもあらばあれ、我帝國人心一新の爲め天下の青年の意氣を双肩に荷ふて起つの勇氣益々加はる諸神諸佛の命を俟つ。命あらば與へよ。命なくんば慾せず。我神佛に哀願せず以て天下を欺くを欲せず。只命の儘、我、倒るゝ迄邁進せん

徒歩して疲勞せざるに達せよ、精神の力のみ

法難除、病難除、觀音行、一步々々進む

昨日 十句經 四百卷

心經 八卷

呪 一〇八二十三

(二萬六千四百卷) 第五十二

五二八

二四八四

一枚 三枚

百三十八枚

修行先決、餘事利他、虛飾不許、只佛緣
怒を抑ゆる名藥ありや

自分を戒め且つ青年に告ぐ

一日飢ゆるときあるものは幸福なり、飢いて飽かざるものは明日幸福なり

書狀は名筆を尊ばず、明確なれ

刻々反省せよ、反省より積極の修行なし、反省は日に自由にして且つ日に自在なり

雑談を戒めよ 青年會各所に敬老會を起せ

病者修養法

第一則 一切を忘れよ

第三則 看護者は凡て病者の心持ち

第五則 讀經徹底せよ

第七則 科學を信じ且つ尊重せよ

第九則 病者の前には常に端正

政界刷新法則

第一則 八百長を廢せよ

第三則 自肅は本部より。雑談の府にするなかれ

第二則 最上の責任者落ちつけ

第四則 信念は信仰によれ

第六則 責任者は凡て病者之苦樂を共にせよ

第八則 病者に自立の確信を與へよ

第十則 快復を見れば更に緊張

第二則 分に應じ身を慎め

第四則 主力を青年に注け

第五則 青年に信念を興へよ

第六則 自肅は根幹より初めよ。急がは廻れ

附録ノ二

看護婦、一月二十三日より引き続き今日に及べり、我彼に曰く、吾が一舉一動、一進一退、衣食の事凡て能く知る、而して我今抵抗養生に入る、明年の今日如何の變化を呈し居るや明年一度來り能く觀られたしと、彼れ唯々たり
千里善行法武道極意にあり、能く解せず、然ども精神を以て歩るとき疲勞せざる理なり、何ぞや、空を歩するを以てなり。更に苦慮せよ。
八疊間五寸、昨日同斷
足袋はかす。昨日一日、物足らぬ心地あり、哀むべし何ぞ弱きや
然るに夜に入り本朝目さむるこき足特に暖なるを知る、之れ効果なり。邁進

第九日

昭和十一年六月九日

富山宅 曇

人云く、二三子傳ふ、先生俗に離れ何處に行くか。一誤解するものあり。如何に。我云く、謝す、我今國家の爲根本人格の基石を打ち込みつゝあり。亞細亞の光豈に二三子の解する處ならんや。我語る所は諸神諸佛のみと。人襟を正し去る。我唯猛進。

突如大命を拜す國策の準備ありや無し、大努力

再び怒るな

一劍飛來

六禁斷嚴重

心自ら八方に配せよ

選舉苦杯と二人の病苦忘るゝな

祖先と親戚を考へよ

(少し進む、大に所得あり)
(苦慮更に)

心境微動なし

イ、早起早寢に勤めよ(効果上る)

ロ、火に親しむものは弱し

ハ、普通の持薬を廢し精神力を薬とす

ニ、起居態度を端正にせよ且つ悠々應揚たれ

一、言葉な慎み且つ少くし丁寧なるは偉人の面目なり

二、一点すぎなき人は笑談を言はず且つ大聲笑ふなかれ

三、自分の事は自分にて辨ぜよ

四、行終はる迄汝雲水一切の尊稱を辭せよ(時を嚴守せよ、能はざるときは時を約束するなかれ)

節約主義に徹底せよ、徳積まざれば光なし

汽車三等となる、特に衆と共にあれ

甲、亞細亞の光とは何ぞ、我

謙抑人に聞け

乙、黙して一点凝視せよ光輝かん(徳さは守ることを云ふ)

自ら其智を用ひず

丙、一氣に進むとき一步退け、判然として八方映ぜん

垂直にして語れ丹田を以て

千里善行法に云く疾行せんとせば自己の臍下丹田に氣を置いて性を急にせず、内を出るこき却て靜なれ。足無くして行、翼無くして飛ぶ如しとは、精神を以て飛ぶ故なり。而して丹田を以て歩すに初まる。

如何是佛法大意、師便喝。是の喝天地を貫く。真理全

當分宴會一切謝絶

露出。我体得せり

拇指を藏せよ(惡魔拇指より入る)
徒歩主義(光は五年効果十年)

我今全身全露出、火の一團となつて戦ふの眞面目を体得す、炎ゆるが如し。鐵を截り磐を貫く。我信

念を以て全國民に呼びかけ不安を一掃せん。修行只時を俟つのみ

一切事修行の餘暇、妥協するなかれ

明々々後日の確信加はる、相當將來の確信加はる、更に眞勇を作れ

眠について考へよ、忍は苦にあらず、樂境なり、持續せよ

天我に書を興へよ、食を考へよ、靈界に通ずる途ありや

我清淨病を治せん、諸神諸佛の命を俟つ

新なる行を興へよ、人を猜疑するなかれ

神佛に謝す(自利、利他二百日目。正しき姿勢にて眠れ)

第百九日目附録

千里善行歩。眞、行、艸の三種の歩行方法あり、五分、五分に歩行六分、四分の歩行、漫歩歩行、を組合はす、要は四分、六分、即ち左六分、右四分、又は右六分、左四分の歩調は要點ならん、之に加ふるに丹田にて歩行すと、丹田にて歩行し、片方心持ち引さがる氣持ちにて歩行すれば恐らく疲勞なからん、我昨夏富山縣大長谷村に行き四里半の坂道を歩し後三時間講演して疲勞せざりし事を思ふに、歩調を控い目にせし故なり。丹田にて歩する訓練達せんか、遂に空を行くが如くあらん。努力せよ、天下の青年。此の頃青年短距離通學尙電車に乗る之れ恥辱なり、反省せよ、

徒歩して疲勞せざるに達せよ、精神のみ(丹田で歩け)

法難除、病難除、觀音行、一步々々進む

昨日 十句經 三百卷 (二萬六千七百卷) 第五十三

心經 六卷 (五三四) 一枚 四枚

呪 一〇八二十四 (二五九二) 百四十三枚

修行先決、餘事利他、虚飾不許、只佛縁怒を抑ゆる名藥ありや

自分を戒め且つ青年に告ぐ

一日飢ゆるさきあるものは幸福なり、飢いて飽かざるものは明日幸福なり

書狀は名筆を尊ばず、明確なれ

刻々反省せよ、反省より積極の修行なし、反省は日に自由にして且つ日に自在なり

雜談を戒めよ 青年會各所に敬老會を起せ

病者修養法

第一則 一切を忘れよ 第二則 最上の責任者落ちつけ

第三則 看護者は凡て病者の心持 第四則 信念は信仰によれ

第五則 讀經徹底せよ 第六則 責任者は凡て病者之苦樂を共にせよ

第七則 科學を信じ且つ尊重せよ 第八則 病者に自立の確信を興へよ

第九則 病者の前には常に端正 第十則 快復と見れば更に緊張

政界刷新法則

第一則 八百長を廢せよ 第二則 分に應じ身を慎め

第三則 自肅は本部より。雜談の府とするなかれ 第四則 主力を青年に注け

第五則 青年に信念を興へよ 第六則 自肅は根幹より初めよ。急がば廻れ

附録ノ二

急がば廻はれなり。除々に進め。されども眞劍なれ。徹頭徹尾眞劍なれ。五十七才の老人が健康上幾

何の進境を見るかは獨り吾が爲にあらす。天下後人の爲めなり。真劍なれ。大犠牲的信念の上に立ち上られ。

八畳間五寸明け、庭に面する障子雨戸は全部明けあり、足袋穿かず

我嘗て神経痛、咽喉等梅雨に入りて悪しかりき、今や絶對に悪しき所ろなし、養生の爲めなり

第一百十日

昭和十一年六月十日

富山宅 晴

此の頃屢「寒山唯白雪」を揮毫す。寒山、修行の爲め白雲裏にあることを諷す。本朝天の啓示あり。亞細亞の光を口にするなかれ。更に百日黙に修行せよ。謹承。白雲又寒山を包む。

突如大命を拜す國策の準備ありや無し、大努力

再び怒るな

一劍飛來

六斷禁嚴重

心自ら八方に配せよ

(少し進む、大に所得あり)

選舉苦杯と二人の病苦忘る、な

祖先と親戚を考へよ

心境微動なし

呼吸を調節せよ

イ、早起早寝に勤めよ(効果上る)

可成早く英語に着手せよ

ロ、火に親しむ者は弱し

黙の定力發揮せよ

ハ、普通の持薬を廢し精神力を棄さす

ニ、起居態度を端正にせよ且つ悠々應揚たれ

一、言葉を慎み且つ少くし丁寧なるは偉人の面目なり

二、一点すきなき人は笑談を言はず且つ大聲笑ふ勿れ

三、自分の事は自分で辨ぜよ

4、行終はる迄汝雲水一切の尊稱を辭せよ(時を嚴守せよ、能はざる時は約束するなかれ)

節約主義に徹底せよ、徳積まざれば光なし

汽車三等となる、特に衆と共にあれ

甲、亞細亞の光とは何ぞ、我

乙、黙して一点凝視せよ光輝かん(徳さは守ることを云ふ)

謙抑人に聞け
自ら其智を用ひず

丙、一氣に進むとき一步退け、判然として八方映ぜん

昔は劍の修行をなし他流試合せん乎、眞の果合に終はる。故に平常の修行又真劍なりき。我れ真劍の修行に入るにつき先づ以て黙に初まらざる可らず。更に眞黙、淵黙。丹田を練れ。

夫爲^レ法者不^レ避^レ喪身失命^一臨濟杖を蒙りしが蒿枝に

て撫でられしやうであつたと。是あるかな、真劍勝負

當分宴會一切謝絶
拇指を藏せよ(惡魔拇指より入る)

徒歩主義
(光は五年効果十年)

鐵を截り盤を貫く底の勇を以て更らに反省、猛修行せよ。今日遅れしことを恐るゝなかれ明日に先立てばよろし。今世に遅るゝことを悲しむなかれ。來世に先覺たるを期せ。更に努力せよ

一切事修行の餘暇、妥協するなかれ

明々々後日の確信加はる、相當將來の確信加はる、更に眞勇を作れ

眠について考へよ、忍は苦にあらず、樂境なり、持續せよ

天我に書を與へよ、食を考へよ、靈界に通するの途ありや

我清淨病を治せん、諸神諸佛の命を俟つ

新なる行を我に與へよ、人を猜疑するなかれ

神佛に謝す(自利、利他は二百日目。正しき姿勢にて眠れ)

第一百十日附録

臨濟云く我黄檗の下に三度棒にて打たれ蒿の枝の如かりき、誰れか打つや。僧出でて進み之に當らん云ふ。臨濟棒を與ふ。僧受け取らん云ふ。臨濟打す。此の僧力あれば受け止めて臨濟を壁に押しつくべかりし。力足らず此の僧法を繼ぐを得ざりき。而かも我亦此の力につき自信なし。過般參禪の際打を受く蒿の如き感ありき、しかも受止めて押ふるの力なかりき。何の故ぞ喪身失命の氣なきを以てなり。老師の棒は即ち棒。之を真劍と思はざるを以てなり。更に丹田を養へ、劍鍊せよ。

徒歩して疲勞せざるに達せよ、精神の力のみ(丹田で歩け)
法難除、病難除、觀音行、一步々々進む

昨日 十句經 二百卷 (二萬六千九百卷) 第五十四
心經 四卷 五三八 一枚
呪 一〇八二十五 二七〇〇 百四十四枚

修行先決、餘事利他、虛飾不許、只佛縁
怒を抑ゆる名藥ありや

自分を戒め且つ青年に告ぐ
一日飢ゆるさきあるものは幸福なり、飢いて飽かざるものは明日幸福なり

書狀は名筆を尊ばず、明確なれ
刻々反省せよ、反省より積極の修行なし反省は日に自由にして且つ日に自在なり
雑談を戒めよ 青年會各所に敬老會を起せ

病者修養法

第一則 一切を忘れよ

第二則 最上の責任者落ちつけ

第三則 看護者は凡て病者の心持ち

第四則 信念は信仰によれ

第五則 讀經徹底せよ

第六則 責任者は凡て病者に苦樂を共にせよ

第七則 科學を信じ且つ尊重せよ

第八則 病者に自立の確信を與へよ

第九則 病者の前に常に端正

第十則 快復を見れば更に緊張

政界刷新法則

第一則 八百長を廢せよ

第二則 分に應じ身を慎め

第三則 自肅は本部より。雑談の府とするなけれ

第四則 主力を青年に注げ

第五則 青年に信念を與へよ

第六則 自肅は根幹より初めよ。急がば廻れ

附録ノ二

抵抗養生法

昭和三年の頃、夏、富山に歸るや、朝神通川の水をあびたり、尙一ヶ月一回斷食沈黙日ありて、猛修行せり。然ども小なる問題の爲め終に沈滞頓頓せり。我今此の境致を脱出す。自由自在の境にありて猛修行に入る。斷乎として不退轉なり。何れにせよ、修行は今入口なり。立山に登山せんとして藤橋にかゝりし如し。猛反省、猛修行邁進せよ
八疊間五寸明け、更らに他に一隅五寸明けたり、二ヶ所明けたり、足袋穿かず
室内清淨。庭に而して雨戸明け放あるを以て臭氣更になし。冷風室内を吹く、氣分上乘なり。

第一百十一日

昭和十一年六月十一日

富山宅

雨(梅雨)

更に一轉深反省すれば、我淵黙足らず。故に迂濶に語る。眞劍修行の境致顯はれず。黙々深淵に入つ

て潜龍の玉を奪はざる可らず。より真剣により深刻に。不惜身命突進せよ

突如大命を拜す國策の準備ありや無し、大努力

再び怒るな

一 劍飛來

六 禁斷嚴重

選舉と苦杯二人の病苦忘るゝな

心自ら八方に配せよ (少し進む、大に所得あり)
祖先と親戚を考へよ (苦慮更に)

心境微動なし

呼吸を調節せよ

イ、早寝早起に勤めよ

可成早く英語に着手せよ

ロ、火に親しむ者は弱し

黙の定力發揮せよ

ハ、普通の持業を廢し精神力を薬とす

ニ、起居態度を端正にせよ且つ悠々應揚たれ

一、言葉を慎み且つ少くし丁重なるは偉人の面目なり

二、一点すぎなき人は笑談を言はず且つ大聲笑ふなけれ

三、自分の事は自分で辨ぜよ

四、行終はる迄汝雲水一切の尊稱を辭せよ(時を嚴守せよ、能はざる時は約束するなけれ)

節約主義に徹底せよ、徳積まされば光なし

汽車三等となる、特に衆と共にあれ

甲、亞細亞の光とは何ぞ、我

謙抑人に聞け

乙、黙して一点凝視せよ光輝かん(徳とは守ることを云ふ)

自ら其智を用ひず

丙、一氣に進むとき一步退け、判然として八方映ぜん

垂直にして語れ丹田を以て

百日以前に比較して態度端正なれり。然ども更に一段端正を要す。垂直にして丹田にて語るは神佛

この事なりき。今や一切事丹田を以て語るべきなり。自由自在の真境茲に發す。

無繩自縛。一切事中莫^リ亂^ル斟酌^一

當分宴會一切謝絶

一 任天下人貶削。公平無私なるものは

拇指を藏せよ

(惡覺拇指より入る)
(光は五年効果十年)

天下の毀譽を省みず只信念

徒歩主義

當局庶政一新。政黨自肅自彊。日に隋氣加はり行之に協はず萎縮し去らんこす。惠まれたる日東帝國、御稜威により日に繁榮。されども非常時を忘れ徒然空過。天誅あらん。肅然として反省努力せよ。

一切事、修行の餘暇、妥協するなけれ

明々々後日の確信加はる、相當將來の確信加はる、更に眞勇ま作れ

眠について考へよ、忍は苦にあらず、樂境なり、持續せよ

天我に書を與へよ、食を考へよ、靈界に通ずるの途ありや

我清淨病を治せん、諸神諸佛の命を俟つ

新なる行を與へよ、人を猜疑するなけれ

神佛に謝す(自利、利他は二百日目。正しき姿勢にて眠れ)

第一百十一日附録

僧臨濟に問ふ劍刃上の事如何と臨濟ソナナ危ない事は御免ミ。僧奇答に狼狽した。臨之を打つ。「打」が主眼である。間隙生じたるを以てなり。一點の間隙を容さざる所に修行あり。——又僧問ふ石室行者云ふ行者、碓を踏みながら修行に専念し、足を移すを忘れたが之の如き人は何處へ行くミ、臨曰く其れは泥へはまつて溺れるだらうミ、一句明快天地を貫く一切萬事此の調子。無繩自縛限りなし。端的に真相を掴んで、天空に抛り出せ。……丹田中心に視、聞き、語れ、歩め、

徒歩して疲勞せざるに達せよ、精神の力のみ(丹田で歩け)
法難除、病難除、觀音行、一步々々進む

昨日	十句經	二百卷	二萬七千卷	第五十五
心經	四卷	二十六	五四二	一枚
呪	一〇八	二八〇八	四枚	百四十九枚

修行先決、餘事利他、虚飾不許、只佛縁
怒を抑ゆる名業ありや

自分を戒め且つ青年に告ぐ

一日飢ゆるときあるものは幸福なり、飢いて飽かざるものは明日幸福なり

書狀は名筆を尊ばず、明確なれ

刻々反省せよ、反省より積極の修行なし、反省は日に自由にして且つ日に自在なり

雑談を戒めよ、青年會各所に敬者會を起こせ

病者修養法

- 第一則 一切を忘れよ
 - 第二則 最上の責任者落ちつけ
 - 第三則 看護者は凡て病者の心持ち
 - 第四則 信念は信仰によれ
 - 第五則 讀經徹底せよ
 - 第六則 責任者は凡て病者と苦樂を共にせよ
 - 第七則 科學を信じ且つ尊重せよ
 - 第八則 病者に自立の確信を與へよ
 - 第九則 病者の前には常に端正
 - 第十則 快復と見れば更に緊張
- 政界刷新法則

- 第一則 八百長を廢せよ
- 第二則 分に應じ身を慎め
- 第三則 自肅は本部より。雑談の府とするなかれ
- 第四則 主力を青年に注け
- 第五則 青年に信念を與へよ
- 第六則 自肅は根幹より初めよ。急がば廻れ

附録ノ二

抵抗養生法

東水橋醫師石川玄知氏曰く某肺重患者快復せり、其の人死生は命なりと悟つた、其の時より快氣に向つて一轉せり。精神の働らきは血行に影響し、血行は肺患に影響す。故に肺病は精神の安定に最重の關係あり。而して肺患は減少せず、増加の傾向あり。精神安定の原則は醫學の及ばざる所多し。我更に苦行之等の原則を確立せん。精神安定。法則を研究せよ

八疊間五寸あけ 二ヶ所、
足袋穿かず

我れ嘗て梅雨の候苦しむ、今健康なり、養生の爲めなり、胃腸の健康は梅雨に對する最上の對策。胃腸は間食をさくれば健康なり。我間食せず。天下の胃腸病者間食を絶對にさけよ。

第一百十二日

昭和十一年六月十二日

富山宅

晴

本朝病氣惡化、凡ては運命。何をか言はん。我れ俗念死滅。何ぞ寂々たる。庭上花色を失ない鳥聲却て悲し。偉行録之れ果た我等夫婦の遺言狀。我死せり我亦生を欲せず。凡て運命。

突如大命を拜す國策の準備ありや無し、大努力

再び怒るな
六禁斷嚴重
選舉苦杯と二人の病苦忘るゝな
心境微動なし
イ、早寝早起に勤めよ(効果上る)
ロ、火に親しむ者は弱し
ハ、普通の持業を廢し精神力を築こす
ニ、起居を端正にせよ且つ悠々應揚たれ
一、言葉を慎み且つ少くし丁重なるは偉人の面目なり
二、一点すぎなき人は笑談を言はず且つ大聲笑ふなかれ
三、自分の事は自分で辨ぜよ
四、行終はるまで汝雲水一切の尊稱を辭せよ

一級飛來
心自ら八方に配せよ(少し進む大に所得あり 苦慮更に)
祖先と親戚を考へよ
呼吸を調節せよ
可成早く英語に着手せよ
默の定力發揮せよ

如此書くは之れ後の子孫の爲めなり、後の青年の爲めなり、乞くは我意志を繼げ
節約主義に徹底せよ、徳積まざれば光なし
汽車三等となる、特に衆共にあれ
甲、亞細亞の光とは何ぞ、我
乙、黙して一点凝視せよ、光輝かん
丙、一氣に進むさき、一步退け判然として八方映せん
謙抑人に聞け
自ら其智を用ひず
垂直にして語れ丹田を以て

我れ本朝、病妻よりも一足先きに死せり、是非善惡一切言はず、我死せり、言ふ所ろなし、只アリダケの整理をなしをか、我只黙。我只淵黙、

孤峰頂上の公案、我昭和三年通過、
而して今一人は我妻。一人は我
我等は行く所なし。唯天

當分宴會一切謝絶
拇指を藏せよ
徒歩主義
(惡魔拇指より入る)
(光は五年効果十年)

幸いなる哉、此の偉行録、此れ我が唯一の遺言狀のみ。子等は自力必ず運命を開かん。一死者言はず、黙々として過ごせ。

一切事修行の餘暇、妥協するなかれ

明々々後日の確信加はる、相當將來の確信加はる、更に眞勇を作れ
眠について考へよ、忍は苦にあらず、樂境なり、持續せよ

天我に書を與へよ、食を考へよ、靈界に通ずるの途ありや

我清淨病を治せん、諸神諸佛の命を俟つ

新なる行を與へよ、人を猜疑するなかれ

神佛に謝す(自利、利他二百日目。正しき姿にて眠れ)

第百十二日附録

偉行録火中に投じて天空に歸らん乎。我之を繼續しをけば必ず後世志を繼ぐ青年あらん、又子弟奮起の資たらん。凡ては天の聲として我天に代はつて是の偉行録を残し。五体のあるかぎり天の命する儘に記して残さん。一我れに人世俗念の趣味なく、死者として靈のみ存す。書くものは天に代つて書くのみ。

我此の世に永く留るを欲せず、今夕にても現世を去りたし、
徒歩して疲勞せざるに達せよ、精神の力のみ(丹田で歩け)

法難除、病難除、観音行、一步々々進む

昨日 十句經 二百卷 (二萬七千三百卷)

第五十六

心經 四卷

五四六

一枚

呪 一〇八

二七

二九一六

百五十五枚

修行先決、餘事利他、虚飾不許、只佛縁

怒を抑ゆる名薬ありや

自分を戒め且つ青年に告ぐ

一日飢ゆるときあるものは幸福なり、飢いて飽よざるものは明日幸福なり

書状は名筆を尊ばず、明確なれ

刻々反省せよ、反省より積極の修行なし、反省は日に自由にして且つ日に自在なり

雑談を戒めよ、青年會各所に敬老會を起せ

病者修養法

- 第一則 一切を忘れよ
- 第二則 最上の責任者落ちつけ
- 第三則 看護者は凡て病者の心持ち
- 第四則 信念は信仰によれ
- 第五則 讀經徹底せる
- 第六則 責任者は凡て病者之苦樂を共にせよ
- 第七則 科學を信じ且つ尊重せよ
- 第八則 病者に自立の確信を與へよ
- 第九則 病者の前には常に端正
- 第十則 快復と見れば更に緊張
- 第一則 八百長を廢せよ
- 第二則 分に應じ身を慎め
- 政界刷新法則

- 第三則 自肅は本部より。雑談の府とするなけれ
- 第四則 主力を青年に注げ
- 第五則 青年に信念を與へよ
- 第六則 自肅は根幹より初めよ。急がは廻れ

附録ノ二

抵抗養生法

病妻死せり、我亦死せり。多情冷血。靈ミ靈ミの語らへとなれり。病者に對しては多情冷血。名残を惜しむ所ろ一點もなし。我等は二人は別々に蓮華の上に坐せり。我等は夫婦にあらず、共に共に佛けなり。個性は全部去れり、只「眞理」の体のみ残る。相語るべきもの更に無し。

我言ふ所ろ絶對になし

八疊間八寸二ヶ所あく

足袋はかず

夜具の中の毛布半分取る

以上昨夜の事なり、今夕より如何なる事あるを知らず、我改て健を求めず。

唯命の儘に行かんのみ。生も求めず況んや健もをや。

凡ては私の体にあらず、天の儘に行かんのみ。

第一百十三日

昭和十一年六月十三日

富山宅

晴

奇なる哉本朝我等二人又天日を拜せんまは。欲を言へば限りなし。我郷里にあり、吾郷里の人東京を知らぬもの多し。況んや日本全土に於てをや。況んや支那滿洲に於てをや。況んや世界に於てをや。五十七年餘りに多幸。我死せり欲念なし。我死せり至公至平なり。

突如大命を拜す國策の準備ありや無し、大努力
再び怒るな

一 劍飛來

六 禁斷嚴重

選舉苦杯と二人の病苦忘るゝな

心自ら八方に配せよ (少し進む
大に所得あり)
祖先と親戚を考へよ (苦慮更に)

心境微動なし

呼吸を調節せよ

イ、早起早寝に勤めよ (効果上る)

可成早く英語に着手せよ

ロ、火に親しむものは弱し

黙の定力發揮せよ

ハ、普通の持薬を廢し精神力を薬とす

ニ、起居を端正にせよ且つ悠々應揚たれ

一、言葉を慎み且つ少くし丁重なるは偉人の面目なり

二、一点すぎなき人は笑談を言はず且つ大聲笑ふなけれ

三、自分の事は自分で辨ぜよ

四、行終はるまで汝雲水一切の尊稱を辭せよ (時を嚴守せよ、能はざ
る時は約束するなけれ)

(如此事を書す只後人の爲めなり)

節約主義に徹底せよ、徳積まざれば光なし

汽車三等となる、特に衆と共にあれ

甲、亞細亞の光とは何ぞ、我

乙、黙して一点凝視せよ光輝かん

丙、一氣に進むとき一步退け判然として八方映ぜん

謙抑人に聞け
自ら其智を用ひず
垂直にして語れ丹田を以て

遺行録凡て火中に投ぜん乎。否な。我に自暴自棄なし。病者又然かり。

愈々冷靜病魔と戦ふ。我亦淵黙を養へ。百千鍊磨後世に残さん。

家舍を離れて途中にあらず。

當分宴會一切謝絶

我等二人の境致なり

拇指を藏せよ

(惡覺拇指より入る
光は五年効果十年)

我々の覺悟人之を解せず。只天命を俟つて一點の悔ゆるところなきのみ。一點の惜しむ所なきのみ。
一勤めて速かに整理し後人の道を拓かんのみ。一自殺は天命に反す、最後の一秒迄戦へ、之を青年に
告ぐ。

一切事修行の餘暇、妥協するなけれ

明々々後日の確信加はる、相當將來の確信加はる、更に眞勇を作れ

眠について考へよ、忍は苦にあらず、樂境なり、持續せよ

天我に書を與へよ、食を考へよ、靈界に通するの途ありや

我清淨病を治せん、諸神諸佛の命を俟つ

新なる行を與へよ、人を猜疑するなけれ

神佛に謝す (自利、利他二百日目。正しき姿勢にて眠れ)

第百十三日目附録

三密の修行は口に眞言を誦すれども心に觀念が統一せざれば効果なしと言ふ。我れ讀經の際心未だ純
一無垢統一せず。故に効果顯はれざるならん。更に一段の苦慮を重ね統一に努力せん、
修行は疑慮せず、退轉せざれば所願成就と言ふ。我死せり、我只一日を生きる限り修行を續けん。
昨日黙足らず、今朝亦然かり。更らに黙せよ。黙々として淵黙に入れ。

徒歩して疲勞せざるに達せよ、精神のみ（丹田で歩け）
法難除、病難除、觀音行、一歩々々進む

昨日	十句經	三百卷	（二萬七千五百卷）	第五十七
	心經	四卷	（五五〇）	一枚
		二十八		五枚
呪		一〇八	（三〇二四）	百六十一枚

修行先決、餘事利他、虚飾不許、只佛縁
怒を抑ふる名薬ありや

自分を戒め且つ青年に告ぐ

一日飢ゆるさきあるものは幸福なり、飢いて飽かざるものは明日幸福なり
書狀は名筆を尊ばず、明確なれ
刻々反省せよ、反省より積極の修行なし、反省は日に自由にして且つ日に自在なり
雑談を戒めよ、青年會各所に敬老會を起せ

病者修養法

- 第一則 一切を忘れよ
 - 第二則 最上の責任者落ちつけ
 - 第三則 看護者は凡て病者の心持ち
 - 第四則 信念は信仰によれ
 - 第五則 讀經徹底せよ
 - 第六則 任者は凡て病者と苦樂を共にせよ
 - 第七則 科學を信じ且つ尊重せよ
 - 第八則 病者に自立の確信を與へよ
 - 第九則 病者の前には常に端正
 - 第十則 快復と見れば更に緊張
- 政界刷新法則

- 第一則 八百長を廢せよ
- 第二則 分に應じて身を慎め
- 第三則 自肅は本部より。雑談の府ミなるなかれ
- 第四則 主力を青年に注げよ
- 第五則 青年に信念を與へよ
- 第六則 自肅は根幹より初めよ。急がば廻れ。

附録ノ二

抵抗養生法

我三十年回顧すれば、妻に對して餘りに苦勞をかけた。縁あつて我に來れりと雖も餘りに酷使した。只慚愧に堪へず。今我清算。只全力を上げ、心肝を碎きて盡す。我今恨む所ろなし。來世笑つて語るを得ん。茲に至つて胸寸裂。更に一轉して清風月下坐。無垢清淨言ふ所ろなし。

八疊間八寸二ヶ所あく
足袋はかす
毛布全部取る
死者健を求めず、唯命の儘のみ。

第一百十四日

昭和十一年六月十四日

富山宅

暖

人何れも我が深意を解するものなし。平常の如く我を見る。既に死せる我を見出すもの一人もなし。我は全力を上げて整理を急ぐ。後人をして苦しませしめざる底の努力をなさん。欲念なし。唯整理して後人に渡すのみ。

突如大命を拜す國策の準備ありや無し、大努力
再び怒るな

一劍飛來

六禁斷嚴重
選舉苦杯と二人の病苦忘るゝな
心境微動なし

祖心自ら八方に配せよ
祖先と親戚を考へよ
呼吸を調節せよ

(少し進む
大に所得あり
苦慮更に)

イ、早寝早起に勤めよ(効果上る)

可成早く英語に着手せよ

ロ、火に親しむものは弱し

黙の定力發揮せよ

ハ、普通の持薬を廢し精神力を薬さす

1、言葉を慎み且つ少くし丁重なるは偉人の面目なり

2、一点すぎなき人は笑談を言はず且つ大聲笑ふなかれ

3、自分の事は自分で辨せよ

4、行終はる迄汝雲水一切の尊稱を辭せよ
(時を嚴守せよ、能はざる時は約束するなかれ)

節約生活に徹底せよ、徳積まざれば光なし

汽車三等なる、特に衆と共にあれ

甲、亞細亞の光さは何ぞ、我

謙抑人に聞け

乙、黙して一点凝視せよ光輝かん

自ら其智を用ひす

丙、一氣に進むとき一步退け判然として八方映ぜん

垂直にして語れ丹田を以て

偉行録火中に投ぜざるも。後人必ず火中に投ぜん。天上天下今一人の知己なきを以てなり。故に我に天只一句を與へよ。口より口に。精神より精神に傳ふべき一句を與へよ。只淵黙以て其の影に接せん、

一句、二句、三句。臨濟として
の境致。更に以上の一句なきや

當分宴會一切謝絶
拇指を藏せよ
徒歩主義

(惡魔拇指より入る)
光は五年効果十年)

國策に關連し我は自ら調査考究しつゝあり。一二の遺策として後人を益するものあれば幸。信念を與ふる事之れ最上唯一の業。刻々具体化せよ。自肅の根本條件決定の爲に努力せよ。只青年の奮起を望む

一切事修行の餘暇、妥協するなかれ

明々々後日の確信加はる、相當將來の確信加はる、更に眞勇を作れ

眠について考へよ、忍は苦にあらず、樂境なり、持續せよ

天我に書を與へよ、食を考へよ、靈界に通ずるの途ありや

我清淨病を治せん、諸神諸佛の命を俟つ

新なる行を與へよ、人を猜疑するなかれ

神佛に謝す(自利、利他二百日目正しき姿にて眠れ)

第一百四日附録

我れ病者の隣室にあり、病者三六尺離るゝのみ。是に於て若し我れあるやなきか、病者にも分らざる程の靜寂を持して一切の用を辨ぜん。即ち、一、淵黙 二、心自ら八方に配 三、一氣に進むとき一步退の三修行同時にならん、我絕對に沈黙―我昨日黙足らず―默不足―更に更に黙せよ。此の默の修行の靜寂の境致。仕事は遅るゝも。百年の教ならば又何をか言はん。

徒歩して疲勞せざるに達せよ、精神の力のみ

法難除、病難除、觀音行、一步々々進む

昨日 十句經 三百卷 (二萬七千八百卷) 第五十八

心經 六卷 (五五六) 一枚

呪 二十九 (一〇八) 三三三二 百六十四枚

修行先決、餘事利他、虚飾不許、只佛縁
怒を抑ゆる名薬ありや

自分を戒め且つ青年に告ぐ
一日飢ゆるとあきるものは幸福なり、飢いて飽かざるものは明日幸福なり
書状は名筆を尊ばず、明確なれ
刻々反省せよ、反省より積極の修行なし、反省は日に自由にして且つ日に自在なり
雑談を戒めよ、青年會各所に敬老會を起せ

病者修養法

- 第一則 一切を忘れよ
- 第二則 最上の責任者落ちつけ
- 第三則 看護者は凡て病者の心持ち
- 第四則 信念は信仰によれ
- 第五則 讀經徹底せよ
- 第六則 責任者は凡て病者と苦薬を共にせよ
- 第七則 科學を信じ且つ尊重せよ
- 第八則 病者に自立の確信を與へよ
- 第九則 病者の前には常に端正
- 第十則 快復と見れば更に緊張

政界刷新法則

- 第一則 八百長を廢せよ
- 第二則 分に應じ身を慎め
- 第三則 自肅は本部より。雑談の府ミするなけれ
- 第四則 主力を青年に注げ
- 第五則 青年に信念を與へよ
- 第六則 自肅は根幹より初めよ。急がば廻れ。

附録ノ二

抵抗養生法

今朝病者恬淡たり。我黙して言はず。死せる吾境致之を語る人天天下一人もなし。唯我獨り往く。死境を往く。……全力を上げて整理せよ。後人に引渡せ。誰れにもあれ來り奪い行け。我黙々として與へん。奪ひ去る人もなし。與ふべき物もなし。黙々として行け。
八疊間三尺（一尺五寸二ヶ所）あけ。
足袋はかす。毛布とる。
和服の下着とる。寢衣の下着とる。
死者何をも求めず。況んや健をや。天速かに我をらつし去れ

第百十五日

昭和十一年六月十五日

富山宅 晴

さまよいる小羊の。後をしたふて遠く荒野を過ぎ越し來つる我なるかな。耳を澄まして絶対寂靜。呼び還へすもの更に無し。我又歸意なし。天語赫々。常闇を裂開して我を招くにあらざる限り。……整理進む。机上より家の隅々

突如大命を拜す國策の準備ありや無し、大努力

再び怒るな

一劍飛來

六禁斷嚴重

心自ら八方に配せよ

選舉苦杯と二人の病苦忘るゝな

祖先と親戚を考へよ

心境微動なし

呼吸を調節せよ

イ、早起早寢に勤めよ（効果上る）

可成早く英語に着手せよ

（少し進む、大に所得あり）
（苦慮更に）

ロ、火に親しむものは弱し

黙の定力發揮せよ

ハ、普通の持薬を廢し精神力を薬とす

ニ、起居を端正にせよ且つ悠々應揚たれ

一、言葉を慎み且つ少くし丁重なるは偉人の面目なり

二、一点すぎなき人は笑談を云はず且つ大聲笑ふなかれ

三、自分の事は自分で辨ぜよ

四、行終はる迄汝雲水一切の尊稱を辭せよ（時を嚴守せよ、能はざる時は約束するなかれ）

節約主義に徹底せよ、徳積まざれば光なし

汽車三等となる、特に衆と共にあれ

甲、亞細亞の光は何ぞ、我

謙抑人に聞け

乙、黙して一点凝視せよ光輝かん

自ら其智を用ひず

丙、一氣に進むとき一步退け判然として八方映ぜん

垂直にして語れ丹田を以て

死せる我、整理の爲め努力の外。現世的邪念なし。故に公平なり。公平は其の境の何にあるを論せず。家人ミして公平。町民ミして公平。市民として公平。黨人ミして公平。……黙、黙、黙……人の顔を見語り度く思ふな。

臨濟四料簡。哀むべし

當分宴會一切謝絶

我、其何れをも未だ徹底体得せざることを。漸次進む。

拇指を藏せよ（惡覺拇指より入る）

自由自在の境致に入らんさしつあり。

徒歩主義

英と握手し、露を抑へ、獨ミ相許して支那を抑ふ、米は樽組の間に禦すべし、廣田氏同感ならん。只一人なし。飛躍の偉人あらん乎百年平和の基礎確立せん。而して我國世界に冠たらん。

一切事修行の餘暇、妥協するなかれ

明々々後日の確信加はる、相當將來の確信加はる、更に眞勇を作れ

眠について考へよ、忍は苦にあらず、樂境なり、持續せよ

天我に書を與へよ、食を考へよ、靈界に通ずるの途ありや

我清淨病を治せん、諸神諸佛の命を俟つ

新なる行を與へよ、人を猜疑するなかれ

神佛に謝す（自利、利他二百日目。正しき姿勢にて眠れ）

第百十五日目附録

病者夢を見る屢々なり。精神平安を絶対條件とする病者として惡夢に雙はれさめて心臓の鼓動甚しければ病氣に影響する處大なり。夢清ければ心臓に影響なし。嘗て頭山翁の書を我に送るものあり心閑夢亦清ら然かり。目さめ居るさき心靜なれば夢亦靜なり。心を靜かにするは意を誠にするにあり。意を誠にするは念頭に於て一切を忘却するにあり。念頭に於て一切忘却に努力すれば自ら記憶薄らぎ氣靜になり夢亦靜なり。不可能にあらず可能なり。病者の夢を和けよ。是れ一大鐵則にして恐らく我を以て初めての語にして且つ前人未到の天地ならん、後人努力せよ。

徒歩して疲勞せざるに達せよ、精神のみ（丹田で歩け）

法難除、病難除、觀音行、一歩々々進む

昨日 十句經 三百卷 二萬八千百卷 第五十九

心經 六卷 五六二 一枚

呪 一〇八三十一 三二四〇 百六十五

修行先決、餘事利他、虛飾不許、只佛緣

怒を抑ふる名薬ありや

自分を戒め且つ青年に告ぐ

一日飢ゆるときあるものは幸福なり、飢いて飽かさるものは明日幸福なり

書状は名筆を尊ばず、明確なれ

刻々反省せよ、反省より積極の修行なし、反省は日に自由にしし且つ日に自在なり

雑談を戒めよ、青年會各所に敬老會を起せ

病者修養法

第一則 一切を忘れよ

第二則 最上の責任者落ちつけ

第三則 看護者は凡て病者の心持ち

第四則 信念は信仰によれ

第五則 讀經徹底せよ

第六則 責任者は凡て病者之苦樂を共にせよ

第七則 科學を信じ且つ尊重せよ

第八則 病者に自立の確信を與へよ

第九則 病者の前には常に端正

第十則 快復ミ見れば更に緊張

第十一則 病者の夢を和げよ

政界刷新法則

第一則 八百長を廢せよ

第二則 分に應じ身を慎め

第三則 自肅は本部より。雑談の府こするなかれ

第四則 主力を青年に注げ

第五則 青年に信念を與へよ

第六則 自肅は根幹より初めよ。急がば廻れ

第七則 日英提携對露抑壓、日獨握手對支調整、信念確立對米和樂

附録ノ二

抵抗養生法

病者に自信を與ふることに努力し、且つ持久戰にて三年を病床に戰ふの覺悟をすゝむ、

千日を忍んで強き「米」になり、愈々盡せ國と家とに

こ歌を書き與ふ、

人を見て話し度思ふな。人の話を頭で聞くな腹で聞け。黙を養へ、

八疊間六尺あけ。足袋はかず。

かけぶとん一枚取る。

和服及び寢衣の下着こる。

死者健を求めず、只天に任かして進むのみ、

第一百十六日

昭和十一年六月十六日

富山宅 晴

心頭滅却火亦涼。此の意味を病者に教ふ。病者唯々。暑氣に靜かなり。我十年夏扇を使はず無意味なるを以てなり。我れ境に隨うて自由なり。しかも尙黙足らず。更に深淵に入らざるべからざるものあり。天我に默の定力を與へよ。……整理進む。

突如大命を拜す、國策の準備ありや無し。大努力

再び怒るな

一劍飛來

六禁斷嚴重

心自ら八方に配せよ

選舉苦杯と二人の病苦忘るゝな

(少し進む。大に所得あり) 苦慮更にせよ

祖先と親戚を考へよ

心境微動なし

イ、早寝早起に勤めよ（効果上がる）

ロ、火に親しむものは弱し

ハ、普通の持薬を廢し精神力を薬さす

ニ、起居を端正にせよ且つ悠々應揚たれ

一、言葉を慎み且つ少くし丁重なるは偉人の面目なり

二、一点すきな人は笑談を言はず且つ大聲笑ふなけれ

三、自分の事は自分で辨ぜよ

四、行終はる迄汝雲水一切の尊稱を辭せよ（時を嚴守せよ、能はざる時は約束するなけれ）

節約主義に徹底せよ、徳積まざれば光なし

汽車三等となる、特に衆と共にあれ

甲、亞細亞の光とは何ぞ、我

乙、黙して一点凝視せよ光輝かん（徳さは永く守ることを云ふ）

丙、一氣に進むとき一步退け、判然として八方映ぜん

臨濟曰く若し眞正の見解を得ば生死に染まず去住自由なり、殊勝を求めんご要せざれども殊勝自ら至るこ。……天下の青年求むる處を後にせよ。人生最上の義務に向つて努力せよ。奉公の義務を先づ以て盡せ、我如何、黙、

櫻孩垂。髮自如絲一天

下の絶句。人生殘すもの

は天下の絶句のみ

當分宴會一切謝絶

拇指を藏せよ（惡覺拇指より入る）

徒歩主義

呼吸を調節せよ

可成早く英語に着手せよ

默の定力發揮せよ

謙抑人に聞け

自ら其智を用ひず

垂直にして語れ丹田を以て

日英必ず握手せん。シンガポールを中心に東は日本、西は英、此の大局必ず近き將來に顯はれん。識者努力せよ。飛躍の偉人出てよ。日本は勝利疑なし。

一切事修行の餘暇、妥協するなけれ

明々々後日の確信加はる、相當將來の確信加はる、更に眞勇を作れ

眠について考へよ、忍は苦にあらず、樂境あり、持續せよ

天我に書を與へよ、食を考へよ、靈界に通するの途ありや

我清淨病を治せん、諸神諸佛の命を俟つ

新なる行を與へよ、人を猜疑するなけれ

神佛に謝す（自利、利他二百日目正しき姿勢にて眠れ）

第一百十六日目附録

有時は奮人不奪境に小供の髪を垂れ、白きこゝ絲の如し之れ絶句なり人が居らぬか云へば居る、しかし白髪の小供は何處にもない、趣味津々。人は只能き句を殘せ。善き句家の外に出でずこも。子々孫々に傳ふるだけにても價萬金。只一句又は二句善き句を殘せ。之に増さる遺産なし。王登寶殿、野老謳謔。漁人棹を鼓す。常憶江南三月裡、鷓鴣啼處百花香。他郷舊知に遇。凡て之等は喜びの句。若得眞正見解、生死不染、去住自由、不要求殊勝、殊勝自至……此の頃官報を見、議會の論戰を讀む、記して殘すべき一句なきを悲しむ。堂々天下言論の花園、凡て雜草、一輪の紅なし、政客思を凝らして更に努力せよ、

徒歩して疲勞せざるに達せよ、精神のみ（丹田で歩け）

法難除、病難除。觀音行、一步々々進む

昨日 十句經 川百卷 (二萬八千四百卷) 五十
 心經 六卷 (五六八) 一枚
 呪 一〇八三十一 (三三四八) 百六十六

修行先決、餘事利他、虚飾不許、只佛縁
 怒を抑ふる名薬ありや

自分を戒め且つ青年に告ぐ

一日飢ゆるときあるものは幸福なり、飢いて飽かざるものは明日幸福なり

書状は名筆を尊ばず、明確なれ

刻々反省せよ、反省より積極の修行なし、反省は日に自由にして且つ日に自在なり

雑談を戒めよ、青年會各所に敬老會を起せ

病者 修養法

- 第一則 一切を忘れよ
 - 第二則 最上責任者落ちつけ
 - 第三則 看護者は凡て病者の心持ち
 - 第四則 信念は信仰によれ
 - 第五則 讀經徹底せよ
 - 第六則 責任者は凡て病者之苦樂を共にせよ
 - 第七則 科學を信じ且つ尊重せよ
 - 第八則 病者に自立の確信を與へよ
 - 第九則 病者の前には常に端正
 - 第十則 快復と見れば更に緊張
 - 第十一則 病者の夢を和げよ
- 政界刷新法則
- 第一則 八百長を廢せよ
 - 第二則 分に應じ身を慎め
 - 第三則 自肅は本部より。叢談の府とするなけれ
 - 第四則 主力を青年に注け

- 第五則 青年に信念を與へよ
- 第六則 自肅は根幹より初めよ。急がば廻れ
- 第七則 日英提携對露抑壓、日獨握手對支調整、信念確立對米和樂、

附録ノ二

抹抗養生法

「千日忍」の句を書き病室に張る、病者、心焦らず落ち付く。更に

ひと日過ぎぬ、九百九十九日さい、唯一時の夢を越すらん

を書き、「千日忍」を換ふ。病者喜ぶ。

病者悠々自信を加ふ、

昨、一昨、暑氣甚し、心靜かなれば暑さ忘る、永き病者は肌の神經却てにぶし、心靜かなれば、暑氣

忘る、心轉換の道を與へ、靜かなる心を持せしめよ、

人の顔を見て話し度く思ふな、黙、黙、黙、腹で答へよ、

八疊間六尺二ヶ所あく、戸外の氣を其儘接觸「室」清淨なり、

足袋はかず、寢衣の下着る、

死者健を求めず、天に任して進む。されど我れ健なり、我れ養生して一點の自暴自棄なし、心自由

なり、更に逸脱して天空を駈けらんとす。天の命するもの尙幾何かある。我識らず、只進む、

第一百十七日

昭和十一年六月十七日

富山宅 晴

病者依然たり。我亦依然たり。餘世と云へ。死後と云ふ。是れ妄心。本心既に生前にあり何の死後あ

らん。本心嘗て滅せず何の餘世ぞや。本心は妄心の外に自由なり。黙の力自由を徹底す。〓本心に利慾邪念なし且つ公平。黙の力徹底

突如大命を拜す、國策の準備ありや無し、大努力

再び怒るな

一劍飛來

六禁斷嚴重

選舉苦杯と二人の病苦忘るゝな

心自ら八方に配せよ (少し進む、大に所得あり) 更に考慮苦慮 祖先と親戚を考へよ

心境微動なし

呼吸を調節せよ

イ、早寝早起に勤めよ (効果上がる)

可成早く英語に着手せよ

ロ、火に親しむ者は弱し

黙の定力發揮せよ

ハ、普通の持藥を廢し精神力を藥とす

ニ、起居を端正にせよ且つ悠々應揚たれ

一、言葉を慎み且つ少くし丁重なるは偉人の面目なり

二、一言すきなき人は笑談を言はず且つ大聲笑ふなけれ

三、自分の事は自分で辨ぜよ

四、行終はる迄汝雲水一切の尊稱を辭せよ (時を嚴守せよ、能はざる時は約束するなけれ) 節約主義に徹底せよ、徳積まざれば光なし

汽車三等となる、特に衆と共におれ

甲、亞細亞の光とは何ぞ、我

乙、黙して一点凝視せよ光輝かん (徳さは守ることを云ふ)

丙、一民に進むとき一歩退け、判然として八方映せん

謙抑人に聞け 自ら其智を用ひず 垂直にして語れ丹田を以て

我黙を離るゝとき丹田にあらず。無關心、無緊張、下郎と同斷となる。然かも嘗て心自八方配を苦慮して頭を打ちあてしこ同斷。努力、努力、念々不忘。黙の定力徹底せん。其の時偉行録の階級第二段なり。努力々々。

要し用使用、更莫し遲疑。如今學者

當分宴會一切謝絶

不し得。病在二其處一病在二不自信處一

拇指を藏せよ (惡覺拇指より入る) 光は五年効果十年

然り。然り内に不自信なくば外に求めざるも自ら

徒歩主義

自由、不自信をなくせよ

印度征服無用論。英印の間に打ち捨てをけ。最も日本を慕ふもの印度。印度を突けば離間策行はれ排日ならん。放任すれば印度は世界最上の親友。之れ日英提携の眞意なり。識者猛省せよ。

一切事修行の餘暇、妥協するなけれ

明々々後日の確信加はる、相當將來の確信加はる、更に眞勇を作れ

眠について考へよ、忍は苦にあらず、樂境なり、持續せよ

天我に書を與へよ、鬪界に通ずるの途ありや

我清淨病覺を治せん、諸神諸佛の命を俟つ

新なる行を與へよ、人を猜疑するなけれ

神佛に謝す (自利、利他は二百日目。正しき姿にて眠れ)

第一百七日目附録

汝試に用え見よ、何の遲疑の要あらん、如何なる處にても出て、思い切つて活動せよ、直ちに行き詰る之れ何ぞや不自信の爲めなり。不自信の爲めに外に向つてのみ忙殺され、益々自由を得ざるに至る。

馳求心を捨てよ、即佛祖と同断。佛祖を見たいか汝の面前に今說話を聽いてをる其處に居る即ち汝本心之れ佛祖。臨濟至れり盡せり。……默の定力により更に判然、又確然。又徹底、徹底、徹底せよ、自肅自彊、恐らく空念佛、夢の如く半歳は過ぎん。我使命絶大なり。

徒歩して疲勞せざるに達せよ、精神の力のみ(丹田で歩け)
法難除、病難除、觀音行、一步々々進む

昨日 十句經 三百卷 (二萬八千七百卷) 第六十一
心經 六卷 (五七四) 一、二枚
呪 一〇八三十二 (三四五六) 百六十九
修行先決、餘事利他、虚飾不許、只佛縁

怒を抑ふる名藥ありや

自分を戒め且つ青年に告ぐ

一日飢ゆるときあるものは幸福なり、飢いて飽かざるものは明日幸福なり

書狀は名筆を尊ばず、明確なれ

刻々反省せよ、反省より積極の修行なし、反省は日に自由にして且つ日に自在なり

雑談を戒めよ、青年會各所に敬老會を起せ

病者修養法

- 第一則 一切を忘れよ
- 第二則 最上の責任者落ちつけ
- 第三則 看護者は凡て病者の心持ち
- 第四則 信念は信仰によれ
- 第五則 讀經徹底せよ
- 第六則 責任者は凡て病者と苦樂を共にせよ
- 第七則 科學を信じ且つ尊重せよ
- 第八則 病者に自立の確信を與へよ
- 第九則 病者の前には常に端正
- 第十則 快復を見れば更に緊張
- 第十一則 病者の夢を和げよ

政界刷新法則

- 第一則 八百長を廢せよ
- 第二則 分に應じ身を慎め
- 第三則 自肅は本部より。雑談の府とするなかれ
- 第四則 主力を青年に注げ
- 第五則 青年に信念を與へよ
- 第六則 自肅は根幹より初めよ。急がば廻れ
- 第七則 日英提携對露抑壓、日獨握手對支調整、信念確立對米和樂

附録ノ二

抗抵養生法

「千日忍」の次の句

二日過ぎぬあこは空々矢の如く見事健康の的をこそ射れ
と書き、下に觀音像。的中矢。病床を描き清風萬里と書す、病者喜ぶ。又昨日より金魚を求め枕頭に置く、動くものは氣を轉換すればなり。

昨日又暑氣強し、病者神經弱はし、暑氣轉換の道を講ずれば暑氣去る
人の顔を見て話し度思ふな、黙、黙、黙、抵抗養生法極意の一

八疊間六尺二ヶ所及び一ヶ所簾戸をなす

足袋はかず、寢衣の下着をる

馳求心なし、健をも求めず、天に任して進む

整理大に進む、家藏、着々片付く

第一百十八日

昭和十一年六月十八日

富山宅 晴

我既に死せり。我に五体なし。假に体あるも我にあらず。我は是れ靈のみ。假の体を維持する最小限度の必要事。寢、食、衣の最少限の外。我に邪欲なし。唯靈のみ。靈の働きは何ぞ。各人の魂に入るのみ。彼等一切の魂に信念を與へん。是唯一の使命のみ

突如大命を拜す、國策の準備ありや無し、大努力

再び怒るな

一 劍飛來

六 禁斷嚴重

選舉苦杯と二人の病苦忘るゝな

心自ら八方に配せよ (少し進む、大に所得あり) 更に考慮苦慮

心境微動なし

呼吸を調節せよ

イ、早起早寝に勤めよ (効果上がる)

可成早く英語に着手せよ

ロ、火に親しむものは弱し

默の定力發揮せよ

ハ、普通の持業を廢し精神力を藥さす

ニ、起居を端正にせよ且つ悠々應揚たれ

一、言葉を慎み且つ少くして丁重なるは偉人の面目なり

二、一言すきなき人は笑談を言はず且つ大聲笑ふなかれ

三、自分の事は自分で辨ぜよ

四、行終はるまで汝雲水一切の尊稱を辭せよ (時を嚴守せよ、能はざる時は約束するなかれ)

節約主義に徹底せよ、徳積まざれば光なし

汽車三等となる、特に衆と共にあれ

甲、亞細亞の光とは何ぞ、我

謙抑人に聞け

乙、默して一点凝視せよ光輝かん (徳とは守ること) を云ふ

自ら其の智を用ひず 垂直にして天と語れ丹田を以て

丙、一瀧に進むとき一步退け、判然として八方映ぜん

各人の魂に入つて信念を作る靈の働きは最重大事。臨濟曰佛祖と別ならざらんご欲すれば外に求むるなかれ。外に求めず内に求むるは默の力のみ。默して我に聞け。最もよく我を知るものは我なり。

更に默の力を養へよ。

約三山僧見處一與釋迦一不別。……爲し三向し外馳求一

當分宴會一切謝絶

有二三功用。百千萬の説法論議何の力ぞ。我に反省

拇指を藏せよ (惡覺拇指より入る) 光は五年効果十年

して努力の外なし

徒歩主義

對露問題は國民の信念確立によつて即事解決。信念は大和魂の体得にあり。大和魂は十年戦つて生活に餘裕あり。則ち戦つて敗れず。露人直に退却せん。國民反省せよ

一切事修行の餘暇、妥協するなかれ

明々々後日の確信加はる、相當將來の確信加はる、更に眞勇を作れ

眠について考へよ、忍は苦にあらず、樂境なり、並續せよ

天我に書を與へよ、食を考へよ、靈界に通ずるの途ありや

我清淨病を治せん、諸神諸佛の命を俟つ

新なる行を與へよ、人を猜疑するなかれ

神佛に謝す (自利、利他は二百日目。正しき姿勢にて眠れ)

第百十八日附録

(我既に死せり。覺悟極めしからは靈の働きの跡のみぞ残せ)

此の一句を居たり、五体の邪欲對稱に向つて毫厘の醜を残すな。

黙の修行について昨日を考へよ

我れ昨日黙の修行不足の點多々ありき。

今朝既に然かり。他人よりも何等かの長所ありと優越感を起すこゝは黙の修行の絶對禁物にして邪

欲對稱に對する大罪惡なり。天の使命の儘。黙々として行け。

徒歩して疲勞せざるに達せよ、精神の力のみ(丹田で歩け)

法難除、病難除、觀音行、一歩々々進む

昨日 十句經 三百卷 (二萬九千卷) 第六十二

心經 六卷 (五八〇) 一枚 四枚

呪 一〇八三三三 (三五六四) 百七十四

修行先決、餘事利他、虚飾不許、只佛縁

怒を抑ふる名藥ありや

自分を戒め且つ青年に告ぐ

一日飢ゆるときあるものは幸福なり、飢いて飽かざるものは明日幸福なり

書狀は名筆を尊ばず、明確なれ

刻々反省せよ、反省より積極の修行なし、反省は日に自由にして且つ日に自在なり

雑談を戒めよ、青年會各所に敬老會を起せ

病者 修養法

第一則 一切を忘れよ

第三則 看護者は凡て病者の心持ち

第五則 讀經徹底せよ

第七則 科學を信じ且つ尊重せよ

第九則 病者の前には常に端正

第十則 病者の夢を和げよ

政界刷新法則

第一則 八百長を廢せよ

第三則 自肅は本部より。雜談の府とするなかれ

第五則 青年に信念を與へよ

第七則 日英提携對露抑壓、日獨握手對支調整、信念確立對米和樂

附録ノ二

抵抗養生法

「千日忍」の次の句

三日過ぎぬ九九七日たてば苦々無し^{九九七}ししばし辛棒するぞ尊とき

と書き病室にはる。

昨日暑氣甚だし。心頭滅却すれば火亦涼し。と病者に聞かす病者ささる。靜なれば心頭靜なり。心頭靜なれば暑氣なし。黙は抵抗養生法の極意の一。黙、黙、一點にても自己を吹聴するこゝを考ふるな

かれ黙破る。
 八疊間全部解放、
 足袋はかず、寢衣の下着さる
 整理大に進む、整理せよ々々。死者整理せよ。今夕天に昇るも後人の爲め一點の疑なき迄に努力整理せよ。

第百十九日

昭和十一年六月十九日

富山宅 晴

今日日蝕ありと云ふ。五十年前硝子を通して眺めし記憶茫として浮ぶ。五十年の歴史を想起す。慚汗肌を濡す。凡て失敗の史。今や只靈のみ残り。形骸凡て無用無役。靈の働らきのみ最後に残る。

突如大命を拜す、國策の準備ありや無し、大努力

再び怒るな

一劍飛來

六禁斷嚴重

心自ら八方に配せよ (少し進む 更に一段の苦慮々々)

選舉苦杯と二人の病苦忘るゝな

祖先と親戚を考へよ

心境微動なし

呼吸を調節せよ

イ、早起早寝に勤めよ (効果上がる)

可成早く英語に着手せよ

ロ、火に親しむものは弱し

黙の定力發揮せよ

ハ、普通の持薬を廢し精神力を薬とす

ニ、起居を端正にせよ且つ悠々應揚たれ

2、一点すきなき人は笑談を言はず且つ大聲笑ふなけれ

3、自分の事は自分にて辨ぜよ

4、行終はる迄汝雲水一切の尊稱を辭せよ (時を嚴守せよ、能はざる時は約束するなけれ)

節約主義に徹底せよ、徳積まざれば光なし

汽車三等となる、特に衆と共にあれ

甲、亞細亞の光さは何ぞ、我

謙抑人に聞け

乙、黙して一点凝視せよ光輝かん (徳さは永く守ることを云ふ)

自ら其智を用ひず

丙、一氣に進むさき一步退け、判然として八方映ぜん

垂直にして語れ丹田を以て

全力を黙に盡して尙不足。丹田にて語る境致を得ず。黙一日反省録を項目ミして設け努力修養せよ。

一心既無。隨慮解脱……一切事に處して自由を

當分宴會一切謝絶

得ん爲めの修行なり。

拇指を藏せよ (惡覺拇指より入る 光は五年効果十年)

打込むすきなき之を解脱と言ふ

徒步主義

ナチスに關する報は今や相當通し。ナチス對日觀について未だ知るものなし。叩けよ答へん、且つ與へられん。ナチスを引き入れて對支策の調整に資すべし。識者に告ぐ

一切事修行の餘暇、妥協するなけれ

明々々後日の確信加はる、相當將來の確信加はる、更に眞勇を作れ

眠について考へよ、忍は苦にあらず、樂境なり、態續せよ

天我に書を與へよ、食を考へよ、靈界に通するの途ありや

我清淨病覺を治せん、諸神諸佛の命を俟つ

新なる行を與へよ、人を猜疑するなけれ

神佛に謝す（自利、利他は二百日目。正しき姿勢にて眠れ）

第一百九日附録

臨濟曰く無_レ甚深_ニ無_レ解脱_ニ一切事に接して人を解脱せしめ一切事に接して深甚微妙の働らきをなすを得_ニ。修行は隱退にあらず。一言一人を解脱に導かざる可らず。妻子奴僕女中凡て之れ修行の對稱なり。門を出て遠く出づるに及ばず。一身の修行と同時に一家を修行せよ。
默一日反省録……昨日は尙不足、調子に乗つて話しせり、更に淵默せよ、
家庭に窮屈の念を起さしむるなかれ。丹田にて語れ

徒歩して疲勞せざるに達せよ、精神の力のみ
法難除、病難除、觀音行、一歩々々進む

昨日 十句經 三百卷 二萬九千三百卷 第六十二
心經 六卷 五八六 一枚 二枚
呪 一〇八 三十四 三六七二 百七十七

修行先決、餘事利他、虚飾不許、只佛縁

怒を抑ふる名藥ありや

自分を戒め且つ青年に告ぐ

一日飢ゆるときあるものは幸誦なり、飢いて飽かざるものは明日幸福なり
書狀は名筆を尊ばず、明確なれ

刻々反省せよ、反省より、積極の修行なし、反省は日に自由にして且つ日に自在なり
雑談を戒めよ、青年會各所に敬老會を起せ

病者修養法

- 第一則 一切を忘れよ
- 第二則 最上の責任者落ちつけ
- 第三則 看護者は凡て病者の心持ち
- 第四則 信念は信仰によれ
- 第五則 讀經徹底せよ
- 第六則 責任者は凡て病者と苦樂を共にせよ
- 第七則 科學を信じ且つ尊重せよ
- 第八則 病者に自立の確信を與へよ
- 第九則 病者の前には常に端正
- 第十則 快復ミ見れば更に緊張
- 第十一則 病者の夢を和げよ

政界刷新法則

- 第一則 八百長を廢せよ
- 第二則 分に應じ身を慎め
- 第三則 自肅は本部より。雑談の府ミするなかれ
- 第四則 主力を青年に注げ
- 第五則 青年に信念を與へよ
- 第六則 自肅は根幹より初めよ。急がば廻れ
- 第七則 日英提携對露抑壓。日獨握手對支調整。信念確立對米和樂

附録ノ二

抵抗養生法

「千日句」の次

四日過ぎね、よくくむつるべ廻るごと月日經つなり笑ふてぞ行け

病室に張る

昨日暑氣に對し病者大に對抗の力出づ。靜なればなり。暑と云へ寒と云ふ、心靜かなれば對抗するを得。寒に對しては設備あるも暑に對しては方法なし、只心身の修練による。

黙は抵抗養生法の極意の一。黙、黙、一點に集注。自己を宣傳、吹聴せんとするとき黙破る。自己を考ふるなかれ。

八疊間解放、足袋はかず、寢衣の下衣を整理進む。小供等も手傳す。死者整理せよ。一點の醜を残すなかれ。清淨地として昇天せよ。過去の醜を全部洗へ去れ。

第二百二十日

昭和十一年六月二十日

富山宅 晴

此の修行。不知不識の間家庭に影響す。例へば食事に男兒等端正膳に向ふが如し。家甚だ古し。雖も整理進むると共に屋の内外清淨漂ふが如し。我が修行の内に家庭を取り入れ。修行と家庭の項目を設く。

突如大命を拜す、國策の準備ありや無し、大努力

再び怒るな

一級飛來

六禁斷嚴重

心自ら八方に配せよ(少し進む、更に苦慮)

選舉苦杯と二人の病苦忘る、な

祖先と親戚を考へよ

心境微動なし

呼吸を調節せよ

イ、早起早寝に勤めよ(効果上がる)

可成早く英語に着手せよ

ロ、火に親しむ者は弱し

黙の定力發揮せよ

ハ、普通の持薬を廢し精神力を棄す

ニ、起居態度を端正にせよ且つ悠々應揚たれ

1、言葉を慎み且つ少くし丁寧なるは偉人の面目なり

2、一点すぎなき人は笑談を言はず且つ大聲笑ふなかれ

3、自分の事は自分で辨ぜよ

4、行終はる迄汝雲水一切の尊稱を辭せよ(時を嚴守せよ、能はざる時は約束するなかれ)

節約主義に徹底せよ、徳積まざれば光なし

汽車三等となる、特に衆と共にあれ

甲、亞細亞の光さは何ぞ、我れ

謙抑人に聞け

乙、黙して一点凝視せよ光輝かん(徳さを守る、こを云ふ)

自ら其智を用ひず

丙、一氣に進むとき一步退け、判然として八方映ぜん

垂直にして語れ丹田を以て

吾、修行、猛烈の爲め家庭窮屈ならんと思ふ人あり。否、外出旅行せざること茲に五十日。毎夕食事を家庭と共にす彼等無上の満足なり。彼等全幅の信頼を父母にのみ懸くるを以てなり。絶えず外出して食事を家庭と共にせざる多忙の人、反省せよ。

隨緣消三舊業。任運著三衣裳。要行即行要坐即坐……墜落生 當分宴會一切謝絶

活を言ふにあらず

拇指を藏せよ(惡覺拇指より入る)

正しき行により舊業を消し而して坐行淡々、誤解するなかれ 徒歩主義

議會に於ける産業統制論に統制は却て大資本家を利するに過ぎずと論難。宜ろし。されど更に一步突つ込むべき處を攻防兩陣互に矛を納め顧みて他を言ふ。何の故ぞや。此の如くんば人心の安定せざる當然なり。信念にのみ生きる闘志十數名何の爲めに顯はれざるや。

一切事修行の餘暇、妥協するなかれ

明々々後日の確信加はる、相當將來の確信加はる、更に眞勇を作れ

眠について考へよ、忍は苦にあらず樂境なり、持續せよ
 天我に書を與へよ、食を考へよ、靈界に通ずるの途ありや
 我清淨病を治せん、諸神諸佛の命を俟つ
 新なる行を考へよ、人を猜疑するなかれ
 神佛に謝す(自利、利他は二百日目。正しき姿にて眠れ)

第二百二十日目附録

家に古き土藏三箇あり。内一箇疊しき、電燈の設備ありしが亂雜なりき、細野氏、高木氏の手傳を得て秩序整然たり。其他家各室整然たり、病者ありき雖も煩ひなし、修行は家庭に大影響を與ふ。家庭への影響は隣人への影響となるや必せり、然ども尙一人の隣人に影響なし、隣人何事をも知らざる故なり。斷じて知らしむるなかれ。我死せり、我要なし、靈としてのみ存す。何の求むる所あらんや。默一日反省録……昨日は尙大不足、依然調子に乗りて話しせり、更に淵默。
 今朝ふと口を突いて出でんごし止む、宜ろし。丹田にて語れ。

徒歩して疲勞せざるに達せよ、精神の力のみ。丹田で歩け
 法難除、病難除、觀音行、一歩々々進む

昨日 十句經 三百卷 (二萬九千六百卷) 第六十三
 心經 六卷 (五九二) 一枚 一枚
 呪 一〇八 (三五五) 三七八〇 百七十九

修行先決、餘事利他、虛飾不許、只佛緣
 怒を抑ふる名藥ありや
 自分を戒め且つ青年に告ぐ

一日飢ゆるときあるものは幸福なり、飢いて飽かざるものは明日幸福なり
 書狀は名筆を尊ばず、明確なれ
 刻々反省せよ、反省より積極の修行なし、反省は日に自由にして且つ自在なり
 雜談を戒めよ、青年會各所に敬老會を起せ

病者修養法

- 第一則 一切を忘れよ
- 第二則 最上の責任者落ちつけ
- 第三則 看護者は凡て病者の心持ち
- 第四則 信念は信仰によれ
- 第五則 讀經徹底せよ
- 第六則 責任者は凡て病者之苦樂を共にせよ
- 第七則 科學を信じ且つ尊重せよ
- 第八則 病者に自立の確信を與へよ
- 第九則 病者の前では常に端正
- 第十則 快復と見れば更に緊張
- 第十一則 病者の病を和けよ

政界刷新法則

- 第一則 八百長を廢せよ
- 第二則 分に應じ身を慎め
- 第三則 自肅は本部より。雜談の府にするなかれ
- 第四則 主力を青年に注げ
- 第五則 青年に信念を與へよ
- 第六則 自肅は根幹より初めよ。急がば廻れ
- 第七則 日英提携對露抑壓。日獨握手對支調整。信念確立對米和樂

附録ノ二

抵抗養生法

偉行録

「千日句」の次

五日過ぎぬよくくよく寝て知らぬ間に立ちつ笑いつするぞ嬉しき

病室に張る

修行と家庭……昨夜寝に先だち庭内一周凡て秩序あり。小供等の健康進む。整理進む。

黙は抵抗養生法の極意の一。黙、黙。自己を宣傳吹聴せんき黙破る。自己を考ふるなかれ

八畳間解放、足袋はかす、寝衣の下着とる

衣服セル着換ゆ

整理進む。死者整理せよ。一點の醜を残すなかれ。清淨の地として昇天せよ。過去の醜を全部洗へ去れ。

第二百二十一日

昭和十一年六月二十一日 富山宅 晴

我常に黙を忘れ失敗して氣附けり。今朝起きて出で、黙。庭上の草木面目を異にす。我一段踏上がれり。天地萬物一切皆黙の對稱。我が一舉一動凡て之れ原則。

突如大命を拜す國策の準備ありや無し、大努力

再び怒るな

六禁斷嚴重

選舉苦杯と二人の病苦忘る、な

心境微動なし

イ、早起早寢に勤めよ(効果上がる)

一劍飛來

心自ら八方に配せよ(少し進む、更に苦慮)

祖先と親戚を考へよ

呼吸を調節せよ

可成早く英語に着手せよ

黙の定力發安せよ

ロ、火に親しむものは弱し

ハ、普通の持業を廢し精神力を棄とす

ニ、起居を端正にせよ且つ悠々應揚たれ

1、言葉を慎み且つ少くし丁重なるは偉人の面目なり

2、一点すぎなき人は笑談を言はず且つ大聲笑ふなかれ

3、自分の事は自分で辨ぜよ

4、行終はる迄汝雲水一切の尊稱を辭せよ(時を嚴守せよ、能はざる時は約束するなかれ)

節約主義に徹底せよ、徳積まざれば光なし

汽車三等となる、特に衆と共にあれ

甲、亞細亞の光とは何ぞ、我

乙、黙して一点凝視せよ光輝かん(徳とは守ることを云ふ)

丙、一氣に進むとき一歩退け八方通せん

試みに一切の修飾を捨てたる境致に生きよ。凡ては直に解決されん。如何なる場合に於ても平和悠然たり。之を原則に生きる言ふ。阿ねる心と高ぶる心とを捨つれば大抵の男兒原則に近し。而して却て一切解決す。反省せよ。

求取真正見解一向天下横行。……無事は貴人。莫造作一是平常

心法無形、通貫十方、目前現用……號之爲三云旨

外不取三凡聖二内不住二根本一見徹更不疑謬

臨濟大見識、活躍縱橫、我亦一步前進

今日の情勢。立法府は法律を作る處にして、根本信念の養成所にあらず。政府は事務の場所にして根

本信念の道場ならざる事又然かり。而かも今や信念の確立最も大切なる時にあたる。信念の道場何處に求む。信念の闘志なきや、待つ。

一切事修行の餘暇、妥協するなかれ

明々々後日の確信加はる、相當將來の確信加はる、更に眞勇を作れ

眠について考へよ、忍は苦にあらず、樂境なり、持續せよ

天我に書を與へよ、食を考へよ、靈界に通するの途ありや

我清淨病を治せん、諸神諸佛の命を俟つ

新なる行を與へよ、人を猜疑するなかれ

神佛に謝す(自利、利他二百日目。正しき姿勢にて眠れ)

第二百一十一日録附

大學にある豁然貫通の句の外、臨濟錄に通貫十方の句出づ。我父之貫我之通。我は失敗徒らに家名を恥かしむ。而して父應揚、只自己を忘れて我の大成をのみ一生の念願として去る。感激只涙のみ。之の家は父の求めたるもの、我れ遠からず之をも處分せんとするに至つては何を以て地下に見えん。只一切事を超越し、難行苦行。後人青年發憤の極少にても資となり得れば乞くは父よ容るされよ。黙一日反省録、昨日は駝目、本願以來念々忘れず境界進む、淵黙は我修行の餘。

徒歩して疲勞せざるに達せよ、精神の力のみ(丹田歩け)

法難除、病難除、觀音行、一步々々進む

昨日 十句經 三百卷

心經 六卷

呪 一〇八三六

二萬九千九百卷

五六八

三八八八

六十四

一枚

一枚

百八十二

修行先決、餘事利他、虛飾不許、只佛緣

怒を抑ふる名藥ありや

自分を戒め且つ青年に告ぐ

一日飢ゆるときあるものは幸福なり、飢いて飽かざるものは明日幸福なり

書狀は名筆を尊ばず、明確なれ

刻々反省せよ、反省より積極の修行なし、反省は日に自由にして且つ日に自在なり

雜談を戒めよ、青年會各所に敬老會を起せ

病者修養法

- 第一則 一切を忘れよ
- 第三則 看護者は凡て病者の心持ち
- 第五則 讀經徹底せよ
- 第七則 科學を信じ且つ尊重せよ
- 第九則 病者の前には常に端正
- 第十一則 病者の病を和げよ

政界刷新法則

- 第一則 八百長を廢せよ
- 第三則 自肅は本部より。雜談の府にすななれ
- 第五則 青年に信念を與へよ
- 第七則 日英提携對露抑壓。日獨握手對支調整。

- 第二則 最上の責任者落ちつけ
- 第四則 信念は信仰によれ
- 第六則 責任者は病者之苦樂を共にせよ
- 第八則 病者に自立の確信を與へよ
- 第十則 快復を見れば更に緊張

- 第二則 分に應じ身を慎め
- 第四則 主力を青年に注け
- 第六則 自肅は根幹より初めよ。急がば廻れ

附録ノ二

抵抗養生法

「千日の句」の次

六日過ぎぬ、らく苦^{九九四}よを渡る習へなり病も樂の種にぞありける

病室に張る、病氣一進一過順路を辿る

修行ご家庭……食事小供等端正。小供等健康進む。

黙は抵抗養生極意の一。黙、黙。自己を宣傳吹聴せんごするごき黙破る。自己を考ふるなかれ。

八疊間解放、足袋はかす、寝まき下着とる

衣服セルに着換ゆ（之等ご他日冷氣に入るごきの關係甚深の注意）

整理進む。死者整理せよ。一點の醜を残すなかれ。清淨の地ごして昇天せよ。過去の醜を全部洗へ去れ。

百二十二日 昭和十一年六月二十二日 富山宅 晴 暑

本朝目さめて又黙。黙は天に對して謙讓なり。諸神諸佛の前に謙讓なれば原則現前す。青年心身鍛鍊の基礎現前せん。一舉一動基礎たらん。

再び怒るな 突如大命を拜す、國策の準備ありや無し、大努力

六禁斷嚴重

一劍飛來

心自ら八方に配せよ（少し進む、更に苦慮

選舉苦杯と二人の病苦忘るゝな
心境微動なし

祖先ご親戚を考へよ
呼吸を調節せよ

イ、早起早寝に勤めよ（効果上がる）

可成早く英語に着手せよ

ロ、火に親しむ者は弱し

黙の定力發揮せよ

ハ、普通の持薬を廢し精神力を棄さす

ニ、起居を端正にせよ且つ悠々應揚たれ

一、言葉を慎み且つ少くし丁寧なるは偉人の面目なり

二、一点すぎなき人は笑談を言はず且つ大聲笑ふなかれ

三、自分の事は自分で辨ぜよ

四、行終はるまで汝雲水一切の尊稱を辭せよ（時を嚴守せよ、能はざる時は約束するなかれ）

節約主義に徹底せよ、徳積まざれば光なし

汽車三等ごなる、特に衆ご共にあれ

甲、亞細亞の光ごは何ぞ、我

謙抑人に聞け

乙、黙して一点凝視せよ光輝かん（徳とは守るごきを云ふ）

自ら其智を用ひす

丙、一氣に進むとき一步退け八方映ぜん

垂直にして語れ丹田を以て

陸軍省は青年の体格弱く、性病、呼吸病、近眼増すに對し。心身鍛鍊を力説す。政府亦努力を初むご。心身鍛鍊ごは何を基ごするか。一切の修飾を捨て原則に生きるにより初まる。心と身ごの相俟つ鍛鍊による。青年心身鍛鍊法則を作れ

隨處作^{ナレバ}主立處皆眞なり

當分宴會一切謝絶

自爲^ニ解脱大海、一鵝王喫^レ乳。覺佛俱打……我が見所

拇指を藏せよ

（惡覺拇指より入る
光は五年効果十年）

遠し大努力を要す

徒歩主義

農村青年の健康、小學學童も凡て悪し、云ふ。依而心身の鍛錬を必要とするに共に体育増進、疾病豫防、疾病治療等に政府努力せんことを、善し。然ども更らに低下の根本に遡れ。生活の改善を必要とす。第一原則の生活をせしめよ。

一切事修行の餘暇、妥協するなかれ

明々々後日の確信加はる、相當將來の確信加はる、更に眞勇を作れ

眠について考へよ、忍は苦にあらず、樂境なり、持續せよ

天我に書を興へよ、食を考へよ、靈界に通ずるの途ありや

我清淨病を治せん、諸神諸佛の命を俟つ

新なる行を興へよ、人を猜疑するなかれ

神佛に謝す(自利利他二百日目。正しき姿勢にて眠れ)

第二百二十二日目附録

今日の小學生徒、登校服と平常服と別にする處あり。之等は打破して平常の儘に登校せしめよ。而して之等の費用を食物に投ぜよ。學校用具其他冗澤のものは全部追拂い。健康に向つて全力を振りよ青年心身鍛錬法則第一、原則に生きよ

我第一原則に生活しつゝあり、天下の青年乞くは努力せよ

黙一日反省録、昨日は稍宜ろし。本朝以來尙不足なり。阿ねる心、尊ぶる心を捨てよ。淵黙は修行の鍵。

徒歩して疲勞せざるに達せよ、精神の力のみ(丹田で歩け)

法難除、病難除、觀音行、一步々々進む

昨日 十句經 三百卷

三萬二百卷

六十五

心經 六卷

六〇四

一枚 三枚

呪 一〇八 三十七

三九九六

百八十六枚

修行先決、餘事利他、虛飾不許、只佛縁

怒を抑ふる名藥ありや

自分を戒め且つ青年に告ぐ

一日飢ゆるときあるものは幸福なり、飢いて飽かざるものは明日幸福なり

書狀は名筆を尊ばず、明確なれ

刻々反省せよ、反省より積極の修行なし、反省は日に自由にして日に自在なり

雑談を戒めよ、青年會各所に敬老會を起せ

病者修養法

第一則 一切を忘れよ

第二則 最上の責任者落ちつけ

第三則 看護者は凡て病者の心持ち

第四則 信念は信仰によれ

第五則 讀經徹底せよ

第六則 責任者は病者之苦樂を共にせよ

第七則 科學を信じ且つ尊重せよ

第八則 病者に自立の確信を興へよ

第九則 病者の前には常に端正

第十則 快復を見れば更に緊張

第十一則 病者の夢を和げよ

政界刷新法則

第一則 八百長を廢せよ

第二則 分に應じ身を慎め

- 第三則 自肅は本部より。雑談の府とするなかれ 第四則 主力を青年に注げ
- 第五則 青年に信念を與へよ 第六則 自肅は根幹より初めよ急がは廻れ
- 第七則 日英提携對露抑壓。日獨握手。對支調整。信念確立對米和樂

附録ノ二

抵抗養生法

「千日の句」の次

七日過ぎぬ苦くみ出せば限りなく樂の泉の湧きてこそ出で

病室に張る、病氣順調更に緊張の紙を貼る

修行に家庭……食事小供等端正、小供等健康進む

黙は抵抗養生極意の一。黙。自己を宣傳吹聴せんとするとき黙破る。自己を考ふるなかれ。

八疊間解放、足袋はかす、寢まき薄物に着かゆ

衣服セルに着代ゆ

整理進む。日に清淨。一點の醜を残すなかれ。清淨の地として昇天せよ。過去の醜を全部洗へ去れ

第二百二十三目

昭和十一年六月二十三日 富山宅 雨

今日の青年結核に冒さるゝもの多し。陸軍對策努力す。結核は不治にあらず難治なり。何ぞや對治療根本原則の精神安定に付いて未解決なる處多々あればなり。我既に死して靈のみ。されど精神安定の鐵則を残さん乎。

突如大命を拜す國策の準備ありや無し、大努力

再び怒るな

一劍飛來

六禁斷嚴重

心自ら八方に配せよ（少し進む、更に苦慮）

選舉苦杯と二人の病氣忘るゝな

祖先と親戚を考へよ

心境微動なし

呼吸を調節せよ

イ、早起早寢に勤めよ（効果上がる）

可成早く英語に着手せよ

ロ、火に親しむものは弱し

黙の定力發揮せよ

ハ、普通の持藥を廢し精神力を棄とす

1、言葉を慎み且つ少くし丁重なるは偉人の面目なり

2、一点すぎなき人は笑談を言はず且つ大聲笑ふなかれ

3、自分の事は自分で辨ぜよ

4、行終はる迄汝雲水一切の尊稱を辭せよ（時を嚴守せよ、能はざる時は約束するなかれ）

節約主義に徹底せよ、徳積まざれば光なし

汽車三等となる、特に衆と共にあれ

甲、亞細亞の光とは何ぞ、我

謙抑人に聞け

乙、黙して一点凝視せよ光輝かん（徳とは守ることを云ふ）

自ら其智を用ひず

丙、一氣に進むとき一步退け八方映ぜん

垂直にして天と語れ丹田を以て

新聞學つて青年体格弱しと報ず。徒らに慨歎するなかれ。脚元を見よ。我家庭如何。先づ以て家庭を
明朗にして病無きに到らしむるに若かず。我亦國家に對する責任者なり。我家庭健康復歸すれば社

會亦健康に復歸するなり。家庭は社會の基本なり。

一念心疑處是簡覺一處々清淨是佛一得者便得
不歷三時節(大悟一刹那也、我解す)

當分宴會一切謝絶
拇指を藏せよ (惡覺拇指より入る)
徒歩主義 (光は五年効果十年)

一家に一人の結核患者出づれば、一家責任を感じ擧つて努力せよ。少くも患者の家にあるもの禁酒禁煙せよ。來訪者も患者の家にては禁酒禁煙

一切事修行の餘暇、妥協するなかれ

明々明後日の確信加はる、相當將來の確信加はる、更に眞勇を作れ

眠について考へよ、忍は苦にあらず、樂境なり、持續せよ

天我に書を與へよ、食を考へよ、靈界に通ずるの途ありや

我清淨病を治せん、諸神諸佛の命を俟つ

新なる行を與へよ、人を猜疑するなかれ

神佛に謝す(自利、利他は二百日目。正しき姿勢にて眠れ)

第二百二十三目附録

肺病は必ず全治するの信念を全部持て、是れ對肺結核の根本原則の第一なり。我も信ず、全治するものなり。肺病は治る。

青年心身鍛鍊法則第一原則に生きよ

肺病精神安定對策 第一、肺病は治る 第二、患者の家にては禁酒禁煙

默一日反省録。昨日稍宜ろし。本朝然かり。阿ねる心、尊ふる心ミを捨てよ。淵默は修行の鍵

徒歩して疲勞せざるに達せよ、精神の力のみ(丹田で歩け)

法難除、病難除、觀音行、一步々々進む

昨日 十句經 四百卷 (三萬六百卷) 六十六

心經 八卷 (六一二) 一枚 七枚

呪 二一六 三十九 (四二二二) 百九十四枚

修行先決、餘事利他、虛飾不許、只佛緣

怒を抑ふる名藥なきや

自分を戒め且つ青年に告ぐ

一日飢ゆるときあるものは幸福なり、飢いて飽かざるものは明日幸福なり

書狀は名筆を尊ばず、明確なれ

刻々反省せよ、反省より積極の修行なし、反省は日に自由にして且つ日に自在なり

雜談を戒めよ、青年會各所に敬老會を起せ

病者修養法

第一則 一切を忘れよ

第三則 看護者は凡て病者の心持ち

第五則 讀經徹底せよ

第七則 科學を信じ且つ尊重せよ

第九則 病者の前には常に端正

第十一則 病者の夢を和げよ

政界刷新法則

第一則 八百長を廢せよ

第二則 最上の責任者落ちつけ

第四則 信念は信仰によれ

第六則 責任者は病者と苦樂を共にせよ

第八則 病者に自立の確信を與へよ

第十則 快復を見れば更に緊張

第二則 分に應じて身を慎め

- 第三則 自肅は本部より。雑談の府にすななれ 第四則 主力を青年に注げ
- 第五則 青年に信念を與へよ 第六則 自肅は根幹より初めよ。急がば廻れ
- 第七則 日英提携對露抑壓。日獨握手對支調整。信念確立對米和樂

附録ノ二

抵抗養生法

「千日の句」の次

八日過ぎぬ病^{びやう}苦^くにせぬ自信こそ神の賜へし力なりけれ
病室に張る 病氣順調更に緊張の紙はる
修行に家庭―食事―小供等端正、小供等健康進む

食事修養談をなす

從來普通の冗談をなせしを一步進む、三男休學せるを大健康者にせん爲めの努力初まる
黙は抵抗養生極意の一。黙、自己を宣傳吹聴せんとするとき黙破る。自己を考ふるななれ
八疊間解放寢、足袋はかす、寝まき薄物と着かゆ
衣服セル

整理益進、日に清淨を加ふ、一點の醜を残すな、清淨の地として昇天せよ、過去の醜を全部洗へ去れ

第二百二十四日

昭和十一年六月二十四日

富山宅 雨

五月五日歸省以來五十日殆ど門を出でず。二十年來の事なり。平常我れ多忙。即今一點の焦想なし。

煩悶なき故何ぞや、現境に超越すればなり。運命は人爲の左右する所にあらず。而も忍べば開く。天下の人逆境に處して如是觀ぜよ。

突如大命を拜す、國策の準備ありや無し、大努力

再び怒るな

一劍飛來

六禁斷嚴重

心自ら八方に配せよ（少し進む、更に苦慮）

選舉苦杯と二人の病苦忘るゝな

祖先と親戚を考へよ

心境微動なし

呼吸を調節せよ

イ、早起早寢に勤めよ（効果上がる）

可成早く英語に着手せよ

ロ、火に親しむ者は弱し

黙の定力發揮せよ

ハ、普通の持薬を廢し精神力を薬とす

ニ、起居を端正にせよ且つ悠々應揚たれ

一、言葉を慎み且つ少くし丁重なるは偉人の面目なり

二、一点すきな人は笑談を言はず且つ大聲笑ふななれ

三、自分の事は自分で辨ぜよ

四、行終はる迄汝雲水一切の尊稱を辭せよ（時を嚴守せよ、能はざる時は約束するななれ）

節約主義に徹底せよ、徳積まざれば光なし

汽車三等となる、特に衆と共にあれ

甲、亞細亞の光さは何ぞ、我

謙抑人に聞け

乙、黙して一点凝視せよ、光輝かん（徳とは守る事を云ふ）

自ら其智を用ひず

丙、一氣に進むとき一步退け八方映ぜん

垂直にして天と語れ丹田を以て

臨濟曰く通貫十方三界自在と人間本來正に然かり。足門外一步を出てざれども爲すこゝ山の如し。身病床にあれども心は三界に縦横に往來す。昨日暑氣八十八度。今日六十八度却て冷。病に克たんとするものは只是靜。

隨處清淨光透十方一萬法一如一正に是れ、我を疑ふなかれ、我を信ぜよ隨處に清淨にして十方に透る自を信ぜよ、自を信ぜよ

當分宴會一切謝絶
拇指を藏せよ(惡覺拇指より入る光は五年効果十年)
徒歩主義

痛室の側にあり一步も外出せず。牢獄の苦の如し。否我日日の修行は前生の罪障を消滅せんが爲めなり。今日の牢居は現世過去の罪障を滅せんが爲めなり。故に日々消滅刻々明朗なり。欣々然經過。

一切事修行の餘暇、妥協するなかれ

明々々の確信加はる、相當將來の確信加はる、更に眞勇を作れ

眠について考へよ、忍は苦にあらず、樂境なり、持續せよ

天我に書を與へよ、食を考へよ、靈界に通ずるの途あるや

我清淨病を治せん、諸神諸佛の命を俟つ

新なる行を與へよ、人を猜疑するなかれ

神佛に謝す(自利、利他は二百日目。正しき姿勢にて眠れ)

第二百二十四日目附録

肺病者は精神健全なり否な神經過敏なるなり。精神健全と神經過敏とは本質を異にす。神經過敏には晝音響夜電燈を和げざるべからず。音響は之を和ぐこゝ困難なれども。電燈を消すは簡單。夜電燈を消し視神經を和げよ。

青年心身鍛鍊法、第一原則に生きよ

小學校生徒洋服靴カバン凡て無用風呂敷包み一個握飯をウンと食べさせよ。

肺病精神安定對策

第一、肺病は治る

第二、患者の家にては禁酒禁煙

第三、夜電燈を消し視神經を和げよ

默一日反省録、昨日今朝尙大不足。我恥づ。更に徹底せよ。阿ねる心、尊ぶる心を捨てよ。淵默は修行の鍵

徒歩して疲勞せざるに達せよ、精神の力のみ(丹田で歩け)

昨日 十句經 三百卷 三萬九百卷 六十七

心經 六卷 六一八 一枚 一枚

呪 一〇八 四三三〇 百九十六枚

修行先決、餘事利他、虛飾不許、只佛緣

怒を押ふる名藥ありや

自分を戒め且つ青年に告ぐ
一日飢ゆるさきあるものは幸福なり、飢いて飽かざるものは明日幸福なり

書狀は名筆を尊ばず、明確なれ

刻々反省せよ、反省より積極の修行なし、反省は日に自由にして且つ日に自在なり

雜談を戒めよ、青年會各所に敬老會を起せ

病者修養法

第一則 一切を忘れよ

第二則 最上の責任者落ち付け

- 第三則 看護者は凡て病者の心持ち
- 第五則 讀經徹底せよ
- 第七則 科學を信じ且つ尊重せよ
- 第九則 病者の前には常に端正
- 第十一則 病者の夢を和げよ
- 第四則 信念は信仰によれ
- 第六則 責任者は病者ニ苦樂を共にせよ
- 第八則 病者に自立の確信を與へよ
- 第十則 快復と見れば更に緊張

政界刷新法則

- 第一則 八百長を廢せよ
- 第二則 分に應じて身を慎め
- 第三則 自肅は本部より。雜談の府とするなかれ
- 第四則 主力を青年に注げ
- 第五則 青年に信念を與へよ
- 第六則 自肅は根幹より初めよ。急がば廻れ
- 第七則 日英提携對露抑壓。日獨握手對支調整。信念確立對米和樂

附録ノ二

抵抗養生法

「千日の句」の次

九日過ぎぬ句句^{九九一}一時的の心配も樂しき庭の思出にせん
病室に張る、緊張々々

修行と家庭……食事小供等端正、食事修養談

三男健康増進努力

默は抵抗養生極意の一。默。自己を宣傳吹聴せんとするこそ默破る。自己を考ふるなかれ。

自利利他の境致より此の修行を天下の青年に知らしめ
青年勉學の資に供せんとの微意の發動は別。自ら高ぶるの心
單純なる自己吹聴は斷じて不可。此の點判然たる區別を要す

八疊間開放、足袋はかず。寢まき薄物

衣服セル

家の整理着々進む。日に清淨加はる。一點の醜を残すな。清淨の地こして昇天せよ。過去の醜を全然
洗へ去れ

汝は五体を有せず、靈のみ。汝に五体の快樂なし。汝は靈の満足のみ享有す。忘るゝな、忘るゝな。

第二百二十五日

昭和十一年六月二十五日 富山宅

家を整理し無用の書狀等破毀す。舊き日誌類を繕く。今日の修行項目は過去の修行項目を繰り返へし
たるに過ぎず。慚愧。向後堅持不退轉更らに第三階に入らざる可らず。堅忍支持第一。

突如大命を拜す國策の準備ありや無し、大努力

再び怒るな

六禁斷嚴重

選舉苦杯と二人の病苦忘るゝな

心境微動なし

イ、早起早寢に勤めよ(効果上がる)

ロ、火に親しむものは弱し

一劍飛來

心自ら八方に配せよ(少し進む、更に苦慮

祖先と親戚を考へよ

呼吸を調節せよ

可成早く英語に着手せよ

默の定力發揮せよ

- ハ、普通の持業を廢し精神力を養ふ
 - ニ、起居を端正にせよ且つ悠々應揚たれ
 - 一、言葉を慎み且つ少くし丁重なるは偉人の面目なり
 - 二、一点すぎなき人は笑談を言はず且つ大聲笑ふなかれ
 - 三、自分の事は自分で辨ぜよ
 - 四、行終はる迄汝雲水一切の尊稱を辭せよ(時を嚴守せよ、能はざる時は約束するなかれ)
- 節約主義に徹底せよ、徳積まざれば光なし
汽車三等となる、特に衆と共にあれ

甲、亞細亞の光とは何ぞ、我

謙抑人に聞け

乙、黙して一点凝視せよ光輝かん(徳さは守ることを云ふ)

自ら其を用ひす

丙、一氣に進むとき一步退け、八方映せん

垂直にして語れ丹田を以て

佛教の空は實空にして虚空にあらず。無は實無にして虚無にあらず。平常無事とは泥足に踏まれて平然たるにあらず。自由の境致は屈辱の鞭下に平服するにあらず。屈辱の鞭達せず泥足も及ばず。時に逆につけて敵を打つ底の平常無事で、自由の境致を言ふ。之れ苦行に依て達す。大和魂の眞髓なり。青年誤るなかれ。振つて勉めよ

大丈夫兒今方知本來無事一眞出家日消三萬兩

當分宴會一切謝絶毋

黃金一人間の心元來健康、本來無病之を覺

指を藏せよ (惡魔指より入る)

知するを悟言ふ。

徒歩主義

(光は五年効果十年)

選舉法の改正に種々の論あり。比例代表法我嘗て熱心に調査せり。實施困難ならん。法は運用の如何にあり。政治的良心を涵養することを忘れ。千百の改正も却て惡化の因たらん。自己を捨て、大局に

泰する犠牲的志士各所に立たんか。選舉は直ちに肅正されん。元來日本人は潔白なり。選舉界の汚物も一時の迷に過ぎざるを以てなり

一切事修行の餘暇、妥協するなかれ

明々々後日の確信加はる、相當將來の確信加はる、更に眞勇を作れ

眠について考へよ、忍は苦にあらず、樂境なり、持續せよ

天我に書を與へよ、食を考へよ、靈界に齒するの途ありや

我清淨病を治せん、諸神諸佛の命を俟つ

新なる行を與へよ、人を猜疑するなかれ

神佛に謝す(自利、利他二百日目。正しき姿勢にて眠れ)

第二百二十五日附録

梅雨の候病に油断すべからず言ふ。一昨日氣温八十八度。昨日六十八度。本日八十度。時に二十度又は十度を高下す。病弱者堪ゆる所ろにあらず。看護者深甚の注意を要す。病室に寒暖計を備ふることを必要とす

青年心身鍛鍊法則、第一原則に生きよ 小學生徒より改良すべし

肺病精神安定對策 第一、肺病は治る

第二、患者の家にては禁酒、禁煙

第三、夜電燈を消し視神經を和けよ

默一日反省録……昨日稍よろし、尙大不足。本朝以來大注意。一段緊張。更に徹底せよ。阿ねる心、尊ぶる心を捨てよ。淵默は修行の鍵

徒歩して疲勞せざるに達せよ、精神の力のみ(丹田で歩け)

昨日 十句經 三百卷

三萬千二百卷

六十八

心經 六卷

六二四

一枚 三枚

呪 一〇八

四四二八

二百枚

修行先決、餘事利他、虛飾不許、只佛縁

怒を抑ふる名薬ありや

自分を戒め且つ青年に告ぐ

一日飢ゆるときあるものは幸福なり、飢いて飽かざるものは明日幸福なり

書状は名筆を尊ばず、明確なれ

刻々反省せよ、反省より積極の修行なし、反省は日に自由にして且つ日に自在なり

雑談を戒めよ、青年會各所に敬老會を起せ

病者 修養法

- 第一則 一切を忘れよ
- 第二則 最上の責任者落ちつけ
- 第三則 看護者は凡て病者の心持ち
- 第四則 信念は信仰によれ
- 第五則 讀經徹底せよ
- 第六則 責任者は凡て病者と苦樂を共にせよ
- 第七則 科學を信じ且つ尊重せよ
- 第八則 病者に自立の確信を與へよ
- 第九則 病者の前には常に端正
- 第十則 快復を見れば更に緊張
- 第十二則 病者の夢を和げよ

政界刷新法則

- 第一則 八百長を廢せよ
- 第二則 分に應じ身を慎め

- 第三則 自肅は本部より。雜誌の府にするなかれ 第四則 主力を青年に注げ
- 第五則 青年に信念を與へよ
- 第六則 自肅は根幹より初めよ。急がば廻れ
- 第七則 日英提携對露抑壓、日獨握手對支調整、信念確立對米和樂

附録ノ二

「千日の句」の次

十日過ぎぬよくなれば尙しめのくくれ、態度慎重あとは上乘

病室に張る 緊張々々

修行に家庭……食事小供等端正、食事修養談。三男健康増進努力

黙は抵抗養生法極意の一。黙。自己を宣傳吹聴せんとするとき黙砂る。自己を考ふるなかれ。

黙は沈黙無爲を言ふにあらず、黙の定力我を反省し、鍛鍊又鍛鍊、名刀正宗の鍊出を云ふなり

八疊間開放、足袋はかず、寢まき薄物

衣服セル

家の整理日に進む。日に清淨加はる。一點の醜を残すな。清淨の地として昇天せよ。過去の醜を全然洗へ去れ。

汝は五体を有せず靈のみ。汝に五体の快樂なし。汝は靈の満足のみ享有す。汝の境致忘るゝな、忘るゝな。

第二百二十六日

昭和十一年六月二十六日 富山宅 曇

病氣今朝又退化す。我告ぐ命數天にあり。十日以前既に死し今日餘世あることを喜ぶべし。焦慮する

なかれ。悠々たれど。病者頓悟す。我安心す。我等二人完全に死畢れり。敢て問ふ今我等の居る所、極樂か地獄か、シヤバか

突如大命を拜す、國策の準備ありや無し、大努力

再び怒るな

一 劍飛來

六 禁斷嚴重

心自ら八方に配せよ（少し進む、更に苦慮）

選舉苦杯と二人の病苦忘るゝな

祖先と親戚を考へよ

心境微動なし

呼吸を調節せよ

イ、早起早寝に勤めよ（効果上る）

可成早く英語に着手せよ

ロ、火に親しむものは弱し

黙の定力發揮せよ

ハ、普通の特藥を廢し精神力を藥とす

ニ、起居態度を端正にせよ且つ悠々應揚たれ

一、言葉を慎み且つ少くし丁重なるは偉人の面目なり

二、一点すぎなき人は笑談を言はず且つ大聲笑ふなかれ

三、自分の事は自分にて辨ぜよ

四、行終はる迄汝雲水一切の尊稱を辭せよ（時を嚴守せよ、能はざる時は約束するなかれ）

節約主義に徹底せよ、徳積まざれば光なし

汽車三等となる、特に衆と共にあれ

甲、亞細亞の光さは何ぞ、我

乙、黙して一点凝視せよ光輝かん（徳とは守ることを云ふ）

丙、一氣に進むとき一歩退け、八方映ぜん

謙抑人に聞け

自ら其智を用ひず

垂直にして語れ丹田を以て

二十五日は殆ど十年天満宮に參拜す。昨夜太田神社に詣す。途次人之に付いて言を挾む。我靜かに説く。其人悟る。謝す。神佛は不可思議。殊に日本國に於て一層然かり。青年に告ぐ其意を誠にせんとするものは神佛に歸依せよ。

不_レ求_二世間過_一一切急要_レ求_二真正見解_一世間の批評

耳を傾くるな、然り邁進々々。

當分宴會一切謝絶

拇指を藏せよ（惡覺拇指より入る）

徒歩主義

新聞に曰く英大使吉田氏、日英親善を力説す。廣田氏の意思ならん。貿易問題の衝突の如きは大局に於て瑣事。シンガポール以東、我大局を確定せよ。埃及、亞ラビヤ、印度、ビルマ、我に於て野心なし。シンガポールを一轉すれば以東は日本、旭日旗。

一切事修行の餘暇、妥協するなかれ

明々々後日の確信加はる、相當將來の確信加はる、更に眞勇を作れ

眠について考へよ、忍は苦にあらず、樂境なり、持續せよ

天我に書を與へよ、食を考へよ、靈界に通するの途ありや

我清淨病を治せん、諸神諸佛の命を俟つ

新なる行を與へよ、人を猜疑するなかれ

神佛に謝す（自利、利他二百日目。正しき姿勢にて眠れ）一之を努力初む難事中之難

第二百二十六日附録

病者曰く病者葬式の夢を見未だ死せざるに葬式とは何ぞやと思ひしと。然かり「千日の句」は千日生きると思ふなかれ。一日一日死せし筈のものが延びしを思いよ。病者焦慮少くなり、解脱の途を辿る

青年心身鍛錬法則 第一原則に生きよ、小學生徒より改良すべし
肺病精神安定對策 第一、肺病は治る

第二、患者の家にては禁酒禁煙

第三、夜電燈を薄くし視神經を和けよ

第四、病室に寒暖計を備へよ

黙一日反省録……昨日稍よろし、尙大不足、本日大分進む。一段緊張。

阿ねる心、尊ぶる心を捨てよ。淵黙は修行の鍵。

徒歩して疲勞せざるに達せよ、精神の力のみ(丹田で歩け)

昨日 十句經 三百卷 (三萬千五百卷) 六十九

心經 六卷 (六三〇) 一枚 二枚

呪 一〇八 (四五三六) 二百三枚

修行先決、餘事利他、虚飾不許、只佛縁

怒を抑ふる名藥ありや

自分を戒め且つ青年に告ぐ

一日飢ゆるときあるものは幸福なり、飢いて飽かざるものは明日幸福なり

書狀は名筆を尊ばず、明確なれ

刻々反省せよ、反省より積極の修行なし、反省は日に自由にして且つ日に自在なり

雑談を戒めよ、青年會各所に敬老會を起せ

病者修養法

第一則 一切を忘れよ

第二則 最上の責任者落つつけ

第三則 看護者は凡て病者の心持ち

第四則 信念は信仰によれ

第五則 讀經徹底せよ

第六則 責任者は凡て病者之苦樂を共にせよ

第七則 科學を信じ且つ尊重せよ

第八則 病者に自立の確信を與へよ

第九則 病者の前には常に端正

第十則 快復を見れば更に緊張

第十二則 病者の夢を和けよ

政界刷新法則

第一則 八百長を廢せよ

第二則 忿に應じて身を慎め

第三則 自肅は本部より。難談の府にするなかれ

第四則 主力を青年に注げ

第五則 青年に信念を與へよ

第六則 自肅は根幹より初めよ。急がば廻れ

第七則 日英提携對露抑壓、日獨握手對支調整。

信念確立對米和樂

附録ノ二

抵抗養生法

「千日の句」の次

十一日過ぎぬ忘我安靜の人にして苦九八九やく拔けたる心地こそ知れ

病室に張る。病者一切忘我。

修行に家庭、食事……小供等端正 食事修養談

三男健康につき大に努力、其効顯はる

黙は抵抗養生法極意の一。黙。自己を喧傳せんことをき黙破る。自己を忘れよ、

八疊間開放、足袋はかず、寝まき薄物
衣服セル カケブトン薄くす

家の整理日に進む。日に清淨加はる。一點の醜を残すな。清淨の地ミして昇天せよ。過去の醜を全然
洗へ去れ

汝は五体を有せず。靈のみ。汝に五体の快樂なし。汝は靈の満足のみ享有す。汝の境致忘るなかれ。

第二百一十七日

昭和十一年六月二十七日 富山宅 晴

隣人福島氏、河合氏知らずしてラヂオ、蓄音機を樂しむ。我懇願す。直ちに承諾寂々たり。感激辭を
知らず拙なき揮毫を送る、此の惡筆名曲の趣味の幾百分の一ぞ、慚愧々々。病者の爲め音響について
隣人相扶けよ。

突如大命を拜す國策の準備ありや無し、大努力

再び怒るな

一級飛來

六禁斷嚴重

心自ら八方に配せよ(少し進む苦慮)

選舉苦杯と二人の病苦忘るゝな

祖先と親戚を考へよ

心境微動なし

呼吸を調節せよ

イ、早起早寢に勤めよ(効果上がる)

可成早く英語に着手せよ

ロ、火に親しむものは弱し

黙の定力發安せよ

ハ、普通の持藥を廢し精神力を藥とす
ニ、起居を端正にせよ且つ悠々應揚たれ

1、言葉を慎み且つ少くし丁寧なるは偉人の面目なり

2、一点すぎなき人は笑談を言はず且つ大聲笑ふなかれ

3、自分の事は自分にて辨ぜよ

4、行終はる迄汝雲水一切の尊稱を辭せよ(時を嚴重にせよ、能はざる時は約束するなかれ)

節約主義に徹底せよ、徳積まざれば光なし

汽車三等となる、特に衆と共にあれ

甲、亞細亞の光さは何ぞ、我

謙抑人に開け

乙、黙して一点凝視せよ、光輝かん(徳とは守ることを云ふ)

自ら其智を用ひす

丙、一氣に進むとき一步退け

垂直にして語れ丹田を以て

衛生省又は健康省を設くる意ありと喧傳す。剛健なる大和民族は如何なるものの上に立脚しあるかを
知らざれば無意味。大和民族は大和魂に立脚す。大和魂を認得すれば心身鍛鍊の基本直になる。先づ
基本より初めよ。大和魂は天地を貫き十方に廣がり三世に亘る眞理なり。

生死、去住脱著自由―無形無相無根無本無住所

當分宴會一切謝絶

活潑々地、退くにあらず、進むなり眞向上段よ

拇指を藏せよ

り打ちをろすなり。

徒歩主義

(惡覺拇指より入る)

(光は五年効果十年)

「獨」發起して伊英を誘い、對赤化を考ふも、日本に向つて眞直に申し來るべし、日本應すべし、病
根赤化より大なるはなし、全世界を動員して赤化を現世より消滅せしむべし、全世界擧げて起て
一切事修行餘暇、妥協するなかれ
明々々後日の確信加はる、相當將來の確信加はる、更に眞勇を作れ
眠について考へよ、忍は苦にあらず、樂境なり、持續せよ

天我に書を與へよ、食を考へよ、靈界に通ずるの途ありや
 我清淨病を治せん、諸神諸佛の命を俟つ
 新なる行を與へよ、人を猜疑するなかれ
 神佛に謝す(自利、利他は二百日目。正しき姿勢にて眠れ)―難中難

第二百二十七日目附録

五十日の看護にて我も疲勞せり。東京へ書狀を出し長、次男に歸省を求む。彼等の學期試験の爲め能はず。是に於て卒然として悟る看護者病氣に捕はるゝなかれ。超然たれ。一轉して平然疲勞去る。
 青年心身鍛鍊法則 第一、原則に生きよ、小學生徒より初むべし
 肺病精神安定對策 第一、肺病は治る

- 第二、患者の家にては禁酒、禁煙
- 第三、夜電燈を薄くし視神經を和げよ
- 第四、病室に寒暖計を備へよ
- 第五、音響について隣人相扶けよ

默一日反省録……昨日稍よろし、尙大不足、本日稍進む、一段緊張
 阿ねる心尊ぶる心を捨てよ。淵黙は修行の鍵

徒歩して疲勞せざるに達せよ、精神の力のみ(丹田で歩け)
 昨日 十句經 三百卷 三萬千八百卷 七十
 心經 六卷 六三六 一枚 一枚
 呪 一〇八 四六四四 三百五枚
 修行先決、餘事利他、虛飾不許、只佛緣

怒を抑ふる名藥ありや

自分を戒め且つ青年に告ぐ

一日飢ゆるときあるものは幸福なり、飢いて飽かざるものは明日幸福なり
 書狀は名筆を尊ばず、明確なれ
 刻々反省せよ、反省より、積極の修行なし、反省は日に自由にして且つ自在なり
 雑談を戒めよ、青年會各所に敬老會を起せ

病者修養法

- 第一則 一切を忘れよ
- 第二則 最上の責任者落ちつけ
- 第三則 看護者は凡て病者の心持ち
- 第四則 信念は信仰によれ
- 第五則 讀經徹底せよ
- 第六則 責任者は病者と苦樂を共にせよ
- 第七則 科學を信じ且つ尊重せよ
- 第八則 病者に自立の確信を與へよ
- 第九則 病者の前には常に端正
- 第十則 快復を見れば更に緊張
- 第十二則 病者の夢を和げよ

政界刷新法則

- 第一則 八百長を廢せよ
- 第二則 分に應じ身を慎め
- 第三則 自肅は本部より。雜談の府ミするなかれ
- 第四則 主力を青年に注げ
- 第五則 青年に信念を與へよ
- 第六則 自肅は根幹より初めよ。急がば廻れ
- 第七則 日英提携對露抑壓、日獨握手對支調整、信念確立對米和樂

附録ノ二

抵抗養生法

「千日の句」の次

十二日過ぎぬ病苦カハハややしき油断せず心ひきしめ敵に打ち克て
病室に張る、病者唯々たり

修行と家庭、食事小供等端正、食事修養談

三男健康につき大に努力 効驗著はる

黙は抵抗養生法の極意の一。黙。自己を宣傳せんとするとき黙破る。自己を忘れよ

八疊間開放、足袋はかす、寝まき薄物

衣服セル、カケブトン薄し

家の整理日に進む。日に清淨加はる。一點の醜を残すな。清淨の地にして昇天せよ。過去の醜を全部洗へ去れ

汝は五体を有せず。靈のみ。汝に五体の快樂なし。汝は靈の満足のみ享有す。汝の境致忘るゝなかれ

第二百二十八日

昭和十一年六月二十八日 富山 雨

朝來梅雨霏々。山鳩啼く。病者靜かなり。靈としてのみの存在は觸覺なし。人語、雨聲、鳥語共に靜寂。人曰く迷境と。答然かり。人曰く悟境と。答然かり。我意に介せず偏へに無依の眞人を見る。

突如大命を拜す、國策の準備ありや無し、大努力

一劍飛來

心自ら八方に配せよ(少し進む苦慮)

祖先と親戚を考へよ

呼吸を調節せよ

可成早く英語に着手せよ

黙の定力發揮せよ

再び怒るな

六禁斷嚴重

選舉苦杯と二人の病苦忘るゝな

心境微動なし

イ、早起早寢に勤めよ(効果上がる)

ロ、火に親しむものは弱し

ハ、普通の持薬を廢し精神力を棄さす

ニ、起居を端正にせよ且つ悠々應揚たれ

一、言葉を慎み且つ少くし丁重なるは偉人の面目なし

二、一点すぎなき人は笑談を言はず且つ大聲笑ふなかれ

三、自分の事は自分にて辨ぜよ

四、行終はる迄汝雲水一切の尊稱を辭せよ(時を嚴守せよ、能はざる時は約束するなかれ)

節約主義に徹底せよ、徳積まざれば光なし

汽車三等となる、特に衆と共にあれ

甲、亞細亞の光さは何ぞ、我

乙、黙して一点凝視せよ、光輝かん(徳さは守ることを云ふ)

丙、一氣に進むとき一步退け判然として八方映ぜん

帝國議會の速記録を熟讀す。熟讀の程度十有餘年初めてなり、眞に熟讀せり。批判せんが爲めにあらず。批判は他人に托す。國策研究の資に供せんが爲め。過去の我不勉強に反省を興へんが爲めなり。

謙抑人に聞け

自ら其智を用ひず

垂直にして語れ丹田を以て

莫三因循遂し樂光陰可惜……ひきしめ、
よ、念々悟り、念々迷ふ、念々墮落、念々向上

當分宴會一切謝絶
拇指を藏せよ (惡魔拇指より入る)
徒歩主義 (光は五年効果十年)

庶政一新の基本は國民生活の安定云ふ。先づ以て心的安定を得しめよ。そは大陸問題とも密接の關係あるを以てなり。世界の趨勢より見、大局を打開して速かに根本方針を確立すべし。廣田氏外交出身。對支三原則の如き抑も末。更に向上の一點に着眼せよ

一切事務修行餘暇、妥協するなかれ

明々々後日の確信加はる、相當將來の確信加はる、更に眞勇を作れ

眠について考へよ、忍は苦にあらず、樂境なり、持續せよ

天我に書を與へよ、食を考へよ、靈界に通ずるの途ありや

我清淨病を治せん、諸神諸佛の命を俟つ

新なる行を與へよ、人を猜疑するなかれ

神佛に謝す(自利、利他二百日目。正しき姿勢にて眠れ)―難中難行

第二百二十八日目附録

或る者達磨大師に問ふ、如何なるか是れ苦、大師答へ云、樂尤も苦也。然かり。人曰く汝の修行太だ難と。然ども顧みれば平凡樂境。苦尙不足なり。されば云へ即今節すべき一物もなし。依て淡々として經過す。仰て天に愧ぢず。

青年心身鍛鍊法則 第一原則に生きよ、小學生徒より初むべし

肺病精神安定對策 第一、肺病は治る

第二、患者の家にては禁酒、禁煙

第三、夜電燈を薄くし視神經を和けよ

第四、病室に寒暖計を備へよ

第五、音響について隣人相扶けよ

默一日反省……昨日稍よろし、尙不足、……本日看よ、緊張せん。

阿ねる心尊ぶる心を捨てよ。淵默は修行の鍵

徒歩して疲勞せざるに達せよ、精神の力のみ(丹田で歩け)

昨日 十句經 三百卷 三萬二千百卷 七十一

心經 六卷 六四二 一枚 五枚

呪 一〇八 四七五二 二百十一枚

修行先決、餘事利他、虚飾不許、只佛縁

怒を抑ゆる名藥ありや

自分を戒め且つ青年に告ぐ
一日飢ゆるときあるものは幸福なり、飢いて飽かざるものは明日幸福なり

書狀は名筆を尊ばず、明確なれ

刻々反省せよ、反省より積極の修行なし、反省は日に自由にして且つ日に自在なり

雜談を戒めよ、青年會各所に敬老會を起せ

病者修養法

第一則 一切を忘れよ

第二則 最上の責任者落ちつけ

第三則 看護者は凡て病者の心持ち

第四則 信念は信仰によれ

- 第五則 讀經徹底せよ
- 第七則 科學を信じ且つ尊重せよ
- 第九則 病者の前には常に端正
- 第十二則 病者の夢を和げよ

政界刷新法則

- 第一則 八百長を廢せよ
- 第三則 自肅は本部より。雜談の府にすするなかれ
- 第五則 青年に信念を與へよ
- 第七則 日英提携對露抑壓、日獨握手對支調整、信念確立對米和樂
- 第二則 分に應じ身を慎め
- 第四則 主力を青年に注げ
- 第六則 自肅は根幹より初めよ。急がば廻れ

附録ノ二

養生抵抗法

「千日の句」
 十三日過ぎぬ、深山の奥にさくはなの、ごと静なればよき實結はん
 病室に張る、病室又深山の奥の如く静なり
 修行と家庭、食事小供等端正、食事修養談（小供等と語る時は夕食の時のみ）
 三男健康につき大に努力、効果著はる
 黙は抵抗養生法極意の一。黙。自己を宣傳せんとするを黙破る。自己を忘れよ。……家庭に於ても謙讓なれ

八疊間開放、足袋はかす、寢まき薄物
 衣服セル、カケアトン薄し

家の整理日に進む。日に清淨加はる。一點の醜を残すな。清淨の地にして昇天せよ。過去の醜を洗へ去れ。
 汝は五体を有せず。靈のみ。汝に五体の快樂なし。汝は靈の満足のみを享有す。汝の境致忘るなかれ

第二百二十九日

昭和十一年六月二十九日 富山 雨

十句觀音經の頭書ある觀世音の吾揮毫を受け時に御利益あり三人言ふものあり。慚愧に堪へず。若し毫末の驗ありませば我神佛に誓へしこを破らざる所にあるならん。されば我れ世の爲めに我誓を嚴守せん。諸神諸佛の御加護を待つ。

突如大命を拜す國策の準備ありや無し、大努力

- 再び怒るな
- 六禁斷嚴重
- 選舉苦杯と二人の病苦忘るゝな
- 心境微動なし
- イ、早起早寢に勤めよ（効果上がる）
- ロ、火に親しむものは弱し
- ハ、普通の持薬を廢し精神力を薬さす
- ニ、起居を端正にせよ且つ悠々應揚たれ
- 一劍飛來
- 心自ら八方に配せよ（少し進む苦慮）
- 祖先と親戚を考へよ
- 呼吸を調節せよ
- 可成早く英語に着手せよ
- 黙の定力發揮せよ

- 1、言葉を慎み且つ少くし丁重なるは偉人の面目なり
- 2、一点すぎなき人は笑談を言はず且つ大聲笑ふなかれ
- 3、自分の事は自分で辨ぜよ
- 4、行終はる迄汝雲水一切の尊稱を辭せよ（時を嚴守せよ、能はざる時は約束するなかれ）
節約主義に徹底せよ、徳積まざれば光なし

汽車三等となる、特に衆と共にあれ

甲、亞細亞の光とは何ぞ、我

謙抑人に聞け

乙、黙して一点凝視せよ光輝かん（徳さは守ることを云ふ）

自ら其智を用ひず

丙、一氣に進むとき一步退け、判然として八方映ぜん

垂直にして語れ丹田を以て

陸相……病弱兒童に付き母体に迄論究す。自由主義は享樂を生み茲に至る。只信念を與へよ。信念は享樂主義に對抗し。心身を一轉す

一念心噴被^ニ火來燒^ニ處々用^レ境^一唯單に物に接するにあらず。縱横自在の境を用ふるを云ふ。

當分宴會一切謝絶
拇指を藏せよ（惡覺拇指より入る）
（光は五年効果十年）
徒歩主義

嘗てバンビーノ卿に逢へし時、氏は米は對日戦争の意毫もなし三言へり、米の關心は滿洲にありき、しかし今や夫もなからん。只日本間隙を見せぬ事必要なり。一糸亂れざる事必要なり。信念確立の外なし。信念は國体明徴の上に出發せよ。天の眞理なればなり。

一切事修行の餘暇、妥協するなかれ

明々々後日の確信加はる、相當將來の確信加はる、更に眞勇を作れ
眠について考へよ、忍は苦にあらず、樂境なり、持續せよ

天我に書を與へよ、食を考へよ、靈界に通ずるの途ありや

我清淨病を治せん、諸神諸佛の命を俟つ

新なる行を與へよ、人を猜疑するなかれ

神佛に謝す（自利、利他二百日目。正しき姿勢にて眠れ）^一難中難行

第二百二十九日目附録

看護婦交代午前三時。其の頃我も起き。又寢。朝六時七時の間に起き。木刀振、水行の後ち讀經。偉行録を書き。ヲートミル、パンの朝食。夕、和食。三女君子の料理に廣通、之威、慎子と共に食膳につく。晝食なく、間食なく。茶のまぬ我に夕食は極樂。晝讀書、時に來客、揮毫、夜讀書讀經十一時就寢。淡々水車の轉するが如し。

青年心身鍛鍊法則 第一原則に生きよ、小學生徒より初むべし

肺病精神安定對策 第一、肺病は治る

第二、患者の家にて禁酒、禁煙

第三、夜電燈を薄くし視神經を和けよ

第四、病室に寒暖計を備へよ

第五、音響について隣人相扶けよ

默一日反省……昨日やよろし、尙不足……本日更に緊張。阿ねる心、尊ぶる心を捨てよ。淵默は修行の鍵

徒歩して疲勞せざるに達せよ、精神の力のみ（丹田で歩け）

法難除、病難除、觀音行、一步々々

昨日 十句經 三百卷 (三萬二千四百卷) 七十二
 心經 六卷 (六四八) 一枚 二枚
 呪 一〇八 (四八六〇) 二百十四枚

修行先決、餘事利他、虚飾不許、只佛縁

怒を抑ゆる名薬ありや

自分を戒め且つ青年に告ぐ

一日飢ゆるときあるものは幸福なり、飢いて飽かざるものは明日幸福なり

書状は名筆を尊ばず、明確なれ

刻々反省せよ、反省より積極の修行なし、反省は日に自由にして且つ日に自在なり

雑談を戒めよ、青年會各所に敬老會を起せ

病者修養法

- 第一則 一切を忘れよ
- 第二則 最上の責任者落ちつけ
- 第三則 看護者は凡て病者の心持ち
- 第四則 信念は信仰によれ
- 第五則 讀經徹底せよ
- 第六則 責任者は凡て病者之苦樂を共にせよ
- 第七則 科學を信じ且つ尊重せよ
- 第八則 病者に自立の確信を與へよ
- 第九則 病者の前には常に端正
- 第十則 快復と見れば更に緊張
- 第十則 病者の夢を和げよ

政界刷新法則

- 第一則 八百長を廢せよ
- 第二則 分に應じ身を慎め

- 第三則 自肅は本部より。雑談の府とするなけれ
- 第四則 主力を青年に注け
- 第五則 青年に信念を與へよ
- 第六則 自肅は根幹より初めよ。急がば廻れ
- 第七則 日英提携對露抑壓、日獨握手對支調整、信念確立對米和樂

附録ノ二

抵抗養生法

「千日の句」

一四日過ぎぬ、一進一退、^{九ハハ}くやむなよ強き精神一路邁進

病室にはる。病者勇氣加はる

修行に家庭、食事小供等端正（小供等曰く端正習となり窮屈にあらずこ）

食事修養談、三男健康大努力効驗著はる

黙は抵抗養生法極意の一。黙。自己を宣傳せんこするこき默破る。

自己を忘れよ。……家庭に於て謙讓なれ

八疊間開放、足袋はかず、寢まき薄物

衣服セル カケアトシ薄し

家の整理日に進む。日に清淨加はる。一點の醜を残すな。清淨の地として昇天せよ。過去の醜を洗へ去れ

汝は五体を有せず。靈のみ。汝に五体の快樂なし。汝は靈の満足のみを有す。汝の境致忘るなけれ。

第三百三十日

昭和十一年六月三十日

富山 曇

信念なき人の欠陥は阿ねる心と尊ぶる心との何れかに属するを言ふ。信念は丹田の人なり。此の二心なし。至公至平なり。國民信念に生くれば肅軍、肅黨、庶政一新立どころに解決す。

突如大命を拜す國策の準備ありや無し、大努力

再び怒るな

一 劍飛來

六 禁斷嚴重

心自ら八方に配せよ（少し進む苦慮）

選舉苦杯と二人の病苦忘るゝな

祖先と親戚を考へよ

心境微動なし

呼吸を調節せよ

イ、早起早寝に勤めよ（効果上がる）

可成早く英語に着手せよ

ロ、火に親しむ者は弱し

黙の定力發揮せよ

ハ、普通の特薬を廢し精神力を薬とす

1、言葉を慎み且つ少くし丁重なるは偉人の面目なり

2、一点すぎなき人は笑談を言はず且つ大聲笑ふなかれ

3、自分の事は自分で辨せよ

4、行終はる迄汝雲水一切の尊稱を辭せよ（時を嚴守せよ、能はざる時は約束するなかれ）

節約主義に徹底せよ、徳積まざれば光なし

汽車三等となる、特に衆と共になれ

甲、亞細亞の光とは何ぞ、我

乙、黙して一点凝視せよ光輝かん（徳とは守ることを云ふ）

謙抑人に聞け

丙、一氣に進むとさき一步退け、判然として八方映ぜん

自ら其知を用ひず
垂直にして語れ丹田を以て

信念の人とは強き精神の人なり。強き精神とは我を捨て、公に殉ずるの精神を云ふ。劍鍊を要す。常に我を捨てしめよ

一念心自能解縛隨處解脫此是觀音三昧なり。

當分宴會一切謝絶

三十二應身の働らきは隨處解脫の働らきを云

拇指を藏せよ（惡覺拇指より入る）
（光は五年効果十年）

ふ。自由自在の境致に向つて猛修行せよ。

徒歩主義

我を捨つは執着を捨つるなり。執着は虚飾に初まる。教育の方針虚飾に向つて鐵槌を下せ。當局用意あるや。又多少にても指導的立場にある各自、進んで範を示し虚飾を去れ。

一切事修行の餘暇、妥協するなかれ

明々々後日の確信加はる、相當將來の確信加はる、更に眞勇を作れ

眠について考へよ、忍は苦にあらず、樂境なり、持續せよ

天我に書を與へよ、食を考へよ、靈界に通ずるの途ありや

我清淨病を治せん、諸神諸佛の命を俟つ

新なる行を興へよ、人を猜疑するなかれ

神佛に謝す（自利、利他二百日目。正しき姿勢にて眠れ）―難中難行

第三百三十日附録

學生若し虚飾を去り、公に殉ずるの一念生ずるとき、卒然として目さむるものは孝道なり。忠孝一如しかも今日孝道振はず。故に青年心身日に弱る。孝道明かにして青年意氣振ひ。心身直ちに活潑なり。

天下猛省せよ

青年心身鍛錬法則 第一原則に生きよ、小學生徒より初むべし
肺病精神安定對策 第一、肺病は治る

第二、患者の家にては禁酒、禁煙

第三、夜電燈を薄くし視神經を和げよ

第四、病室に寒暖計を備へよ

第五、音響について隣人相扶けと

黙一日反省……昨日少し宜ろし、尙不足……本日更に緊張。阿ねる心奪ふる心を捨てよ。淵黙は修行の鍵

徒歩して疲勞せざるに達せよ、精神の力のみ(丹田で歩け)

法難除、病難除、觀音行、一步々々

昨日 十句經 三百卷

三萬二千七百卷

七十三

心經 六卷

六五四

一、二枚

呪 一〇八

四九六八

二百十七枚

修行先決、餘事利他、虚飾不許、只佛縁

怒を抑ふる名藥ありや

自分を戒め且つ青年に告ぐ

一日飢ゆるさきあるものは幸福なり、飢いて飽かざるものは明日幸福なり

書狀は名筆を尊ばず、明確なれ

刻々反省せよ、反省より積極の修行なし、反省は日に自由にして且つ日に自在なり

雜誌を戒めよ、青年會各所に敬老會を起せ

病者修養法

第一則 一切を忘れよ

第二則 最上の責任者落ちつけ

第三則 看護者は凡て病者の心持ち

第四則 信念は信仰によれ

第五則 讀經徹底せよ

第六則 責任者は凡て病者之苦樂を共にせよ

第七則 科學を信じ且つ尊重せよ

第八則 病者に自立の確信を與へよ

第九則 病者の前には常に端正

第十則 快復を見れば更に緊張

第十則 病者の夢を和げよ

政界刷新法則

第一則 八百長を廢せよ

第二則 分に應じ身を慎め

第三則 自肅は本部より。雜誌の府にするなかれ

第四則 主力を青年に注げ

第五則 青年に信念を與へよ

第六則 自肅は根幹より初めよ。急がば廻れ

第七則 日英提携對露抑壓、日獨握手對支調整、信念確立對米和樂

附録ノ二

抵抗養生法

「千日の句」

一五日過ぎぬ、緊張に緊張加いつゝ、しかも氣分はいと朗かに

室内にはる、病者順調修行に家庭 食事小供等端正(小供等端正習みなれり)

食事修養談、三男健康大努力、効驗著はる。黙は抵抗養生法極意の一。黙。自己を宣傳せんとするをき黙破る。自己を忘れよ。一家庭に於ても謙讓たれ

八疊間開放、足袋はかす、寝まき薄物

衣服かすり木綿三十年前のものを着る、上乘。カケブトン薄し

家の整理日進む。日に清淨加はる。一點の醜を残すな。清淨の地にして昇天せよ。過去の醜を全部洗へ去れ

汝は五体を有せず。靈のみ。汝に五体の快樂なし。汝は靈の満足のみを有す。汝の境致忘るゝなかれ。

第二百三十一日

昭和十一年七月一日

富山宅 曇(雨)

二百日の後出版の話あり。人聞く君の偉行録某寒村の一小庵住、一雲水の語録底の價值ありや。赤面して曰く古反古。手習草紙に劣ると。さらば屑屋に渡すに若かす。曰く恥をさらすは犠牲行爲。後進青年をして屑屋に渡さしめん。曰く止めよ屑屋も取らず。我發憤次の二百日に向つて邁進。

突如大命を拜す、國策の準備ありや無し、大努力

再び怒るな

一劍飛來

六禁斷嚴重

心自ら八方に配せよ(少し進む苦慮)

選舉苦杯と二人の病苦忘るゝな

祖先と親戚を考へよ

心境微動なし

呼吸を調節せよ

イ、早起早寝に勤めよ(効果上る)

可成早く英語に着手せよ

默の定力發揮せよ

ロ、火に親しむものは弱し

ハ、普通の特業を廢し精神力を薬とす

ニ、起居を端正にせよ且つ悠々應揚たれ

1、言葉を慎み且つ少くし丁重なるは偉人の面目なり

2、一点すきなき人は笑談を言はず且つ大聲笑ふなかれ

3、自分の事は自分で辨ぜよ

4、行終る迄汝雲水一切の尊稱を辭せよ(時を嚴守せよ、能はざる時は約束するなかれ)

節約主義に徹底せよ、徳積まざれば光なし

汽車三等となる、特に衆と共にあれ

甲、亞細亞の光とは何ぞ、我

謙抑人に聞け

乙、黙して一点凝視せよ、光輝かん(徳は守ることを云ふ)

自ら其智を用ひず

丙、一氣に進むさき一步退け判然として八方映せん

垂直にして語れ丹田を以て

孝道を極端に強ゆるは義務心の強制となり良果を得ざるこあるべし。孝道を發揚し、青年兒童發奮する様に教育するを要す。暖かき義務心に目ざましむべし。

自信莫三向レ外覓一應レ物現レ形如三水中月一實は

當分宴會一切謝絶

難行苦行によつて此の境致に達す。とてもく容

拇指を藏せよ

(惡覺拇指より入る)

易の業にあらず、努力々々。

徒歩主義

日英間極東問題にて善所、握手せん。否。極東問題は一部、シンガポールを中心に意見を交換し提携の實を上げべし。外交に一隻眼を有するもの如是底の見識なからんや。識者大いに發憤せよ。一切事修行の餘暇、妥協するなかれ

明々々後日の確信加はる、相當將來の確信加はる、更に眞勇を作れ
 眠について考へよ、忍は苦にあらず、樂境なり、持續せよ
 天我に書を與へよ、食を考へよ、靈界に通するの途ありや
 我清淨病を治せん、諸神諸佛の命を俟つ
 新なる行を與へよ、人を猜疑するなかれ
 神佛に謝す(自利、利他二百日目。正しき姿勢にて眠れ)―難中難行

第三百三十一日附録

今日の外交を論ずるもの具体的ならず、漠然として自主的外交、積極的外交を説き、激化せる現狀に對して簡明なる指針を示す勇氣あるものなし。斷じて行へば鬼神も避く。口頭外交を一掃せよ
 青年心身鍛鍊法則 第一原則に生きよ、小學生徒より初むべし
 孝道を發揚して暖かき義務心に目ざましめよ

肺病精神安定對策

- 第一、肺病は治る
- 第二、患者の家にては禁酒、禁煙
- 第三、夜電燈を薄くし視神經を和げよ
- 第四、病室に寒暖計を備へよ
- 第五、音響について隣人相扶けよ

默一日反省……昨日少し宜ろし、尙大不足……本日更に緊張、緊張。阿ねる心、尊ぶる心を捨てよ。
 淵默は修行の鍵
 徒歩して疲勞せざるに達せよ、精神のみ(丹田で歩け)

法難除、病難除、觀音行、一歩々々進む

昨日 十句經 三百卷

三萬三千卷 七十四

心經 六卷

六六〇 一枚 五枚

呪 一〇八

五〇七六 二百二十三枚

修行先決、餘事利他、虛飾不許、只佛緣

怒を抑ふるの名藥ありや

自分を戒め且つ青年に告ぐ

一日飢ゆるさきあるものは幸福なり、飢いて飽かざるものは明日幸福なり

書狀は名筆を尊ばず、明確なれ

刻々反省せよ反省より積極の修行なし、反省は日に自由にして日に自在なり

雑談を戒めよ、青年會各所に敬老會を起せ

病者修養法

- 第一則 一切を忘れよ
- 第三則 看護者は凡て病者の心持
- 第五則 讀經徹底せよ
- 第七則 科學を信じ且つ尊重せよ
- 第九則 病者の前には常に端正
- 第七則 病者の夢を和けよ

- 第二則 最上の責任者落ちつけ
- 第四則 信念は信仰によれ
- 第六則 責任者は凡て病者之苦樂を共にせよ
- 第八則 病者に自立の確信を與へよ
- 第十則 快復と見れば更に緊張

政界刷新法則

- 第一則 八百長を廢せよ

- 第二則 分に應じ身を慎め

- 第三則 自肅は本部より。雑談の府にすするなかれ 第四則 主力を青年に注け
- 第五則 青年に信念を興へよ 第六則 自肅は根幹より初めよ。急がは廻れ
- 第七則 日英提携對露抑壓、日獨握手對支調整、信念確立對米和樂

附録ノ二

抵抗養生法

「千日の句」

一六日過ぎぬ、なほるの信念なほすなり、くはしき事は人にまかせて
病室にはる。病者顧調修行に家庭、食事小供等端正（小供等端正習慣なる）

食事修養談三男健康大努力効驗著はる

四男今日より登校、宜ろし

黙は抵抗養生法極意の一。黙。自己を宣傳せんとするとき黙破る。自己を忘れよ。……家庭に於ても謙讓なれ

八疊間開放、足袋はかす、寝まき薄物

衣服カスリ木綿三十年前のもの着る、上乘。カケブトン薄し

家の整理日に進む。日に清淨加はる。一點の醜を残すな。清淨の地として昇天せよ。過去の醜を全部洗へ去れ

汝は五体を有せず。靈のみ。汝に五体の快樂なし。汝は靈の満足のみを有す。汝の境致忘るゝなかれ。

第三百二十二日

昭和十一年七月二日

富山宅（豪雨、風）

學業成り紳士となりて老父母に厚く奉仕せよと。之れ孝道。されど我れ兒童、青小年に向つて望む處は。忠孝一如の理なり。大局に殉するの精神に満ち、心身剛健、今日の弊を根底より一掃せんことを期す。

突如大命を拜す國策の準備ありや無し、大努力

再び怒るな

一劍飛來

六禁斷嚴重

心自ら八方に配せよ（少し進む苦慮）

選舉苦杯と二人の病苦忘るゝな

祖先と親戚を考へよ

心境微動なし

呼吸を調節せよ

イ、早起早寢に勤めよ（効果上る）

可成早く英語に着手せよ

ロ、火に親しむものは弱し

黙の定力發揮せよ

ハ、普通の持薬を廢し精神力を棄さす

ニ、起居態度を端正にせよ且つ悠々應揚たれ

一、言葉を慎み且つ少くし丁寧なるは偉人の面目なり

二、一点すぎなき人は笑談を言はず且つ大聲笑ふなかれ

三、自分の事は自分で辨ぜよ

四、行終はる迄汝雲水一切の尊稱を辭せよ（時を嚴守せよ、能はざる時は約束するなかれ）

節約主義に徹底せよ、徳積まざれば光なし

汽車三等となる、特に衆と共にあれ

甲、亞細亞の光とは何ぞ、我
 乙、黙して一点凝視せよ、光輝かん(徳を以て守ることを云ふ) 謙抑人に聞け
 自ら其智を用ひず
 丙、一氣に進むとき一步退け判然として八方映ぜん 垂直にして語れ丹田を以て

親が子を愛し之を養ふ本能なり。子親を慕ふ又本能なり。而かも子は義務教育受學の必要あり。親に仕ふるの隙なし。人類の尊きは孝道にあり。孝の道如何に徹底すべきか。親子の心一如、間然する處もなくんば親満足。親満足する處孝云ふべし。別に孝道あるや識者の努力を俟つ。

欲得三如法一須三是大丈夫兒始得一佛祖何人ぞ、 當分宴會一切謝絶
 我何人その意氣を以て貫くこ、然り一切萬事此の 拇指を藏せよ (惡覺拇指より入る)
 意氣を以て進むべし。 徒歩主義 (光は五年効果十年)

臨濟曰く瑕ある器物には醍醐は盛れず、大器は人惑を受けぬ様にせよと。人發憤すれば老年より初めて尙大成す。大器晩成とは大器は晩年にも尙成るこ解すべき筋あり。況んや青年壯年に於てをや。我性鈍晩年尙如是苦行す。有爲の青年に志を繼がしめん爲なり。青年起て

一切事修行の餘暇、妥協するなかれ
 明々々後日の確信加はる、相當將來の確信加はる、更に眞勇を作れ
 眠について考へよ、忍は苦にあらず、樂境なり、持續せよ
 天我に書を與へよ、食を考へよ、靈界に通ずるの途ありや
 我清淨病覺を治せん、諸神諸佛の命を俟つ
 新なる行を與へよ、人を猜疑するなかれ
 神佛に謝す(自利、利他は二百日目。正しき姿勢にて眠れ) 難中難行

第三百二十二日目附録

親の子を愛するや極端なる本能なり。假令飢いて食を選ばざるが如く。子の良否によつて愛の厚薄なし。寧ろ却て不良兒、醜兒に偏愛あり。故に子順從なれば親満足す。孝は順從の一事に盡くか否な。嚴肅たる形式的義務存す。果して如何
 青年心身鍛鍊法則 第一原則に生きよ、小學生徒より初むべし
 孝道を發揚して暖かき義務心に目ざましめよ

肺病精神安定對策

- 第一、肺病は治る
- 第二、患病の家には禁酒、禁煙
- 第三、夜電燈を薄くし視神經を和げよ
- 第四、病室に寒暖計を備へよ
- 第五、音響について隣人相扶けよ

默一日反省……昨夜少し宜ろし、尙大不足……本日、緊張。阿ねる心、尊ぶる心を捨てよ。淵默は修行の鍵

徒歩して疲勞せざるに達せよ、精神の力のみ(丹田で歩け)
 法難除、病難除、觀音行、一歩々々進む
 昨日 十句經 三百卷 三萬三千三百卷 七十五
 心經 六卷 六六六 一枚 一枚
 呪 一〇八 五一八四 二百二十五枚
 修行先、餘事利他、虚飾不許、只佛緣

怒を抑ふる名薬ありや
 自分を戒め且つ青年に告ぐ
 一日飢ゆるさきあるものは幸福なり、飢いて飽かざるものは明日幸福なり
 書状は名筆を尊ばず、明確なれ
 刻々反省せよ、反省より積極修行なし、反省は日に自由にして日に自在なり
 雑談を戒めよ、青年會各所に敬老會を起せ

病者修養法

- 第一則 一切を忘れよ
- 第二則 最上の責任者落ちつけ
- 第三則 看護者は凡て病者の心持ち
- 第四則 信念は信仰によれ
- 第五則 讀經徹底せよ
- 第六則 責任者は凡て病者之苦樂を共にせよ
- 第七則 科學を信じ且つ尊重せよ
- 第八則 病者に自立の確信を與へよ
- 第九則 病者の前には常に端正
- 第十則 快復を見れば更に緊張
- 第十則 病者の夢を和げよ

政界刷新法則

- 第一則 八百長を廢せよ
- 第二則 分に應じ身を慎め
- 第三則 自肅は本部より。雑談の府とするなかれ
- 第四則 信念は信仰によれ
- 第五則 青年に信念を與へよ
- 第六則 自肅は根幹より初めよ。急がば廻れ
- 第七則 日英提携對露抑壓、日獨握手對支調整、信念確立對米和樂

附録ノ二

抵抗養生法

「千日の句」

十七日過ぎぬ、食事よく嚼みうまく喰べどくはみん事あこをたやさん九八三
 室内に張る、病者願調修行ニ家庭、食事小供等端正（小供等端正、習慣なる）
 食事修養談。三男健康大努力、効驗著はる。

東京の長、次、勉強努力

黙は抵抗養生法極意の一。黙。自己を宣傳せんとするとき黙破る。自己を忘れよ。家庭に於ても謙讓なれ

八疊間開放、足袋はかす、衣服カスリ木綿三十年前のもの上乘、寝まき薄物カケブトン薄し
 全部解放夜寢皮膚平然、少しく痔に影響、但し冷水をかけ平然
 家の整理日に進む、日に清淨加はる、一點の醜を残すな、清淨の地にして昇天せよ、過去の醜を全部洗へ去れ
 汝は五体を有せず、靈のみ、汝に五体の快樂なし、汝は靈の満足のみを享有す。汝の境致忘るゝなかれ

第三十三日

昭和十一年七月三日

富山宅 晴(風)

朝啓示あり、百三十日家庭に没入し、幸福の日は過ぎぬ。亞細亞の榮光に浴すべく更に難苦の坂をよ

ぢよと。難苦の坂の登り口は淵黙裏にのみ見出さる。よし極秘かに極微かに草鞋の紐をしめんとす。諸神諸佛の御手引の儘に

突如大命を拜す國策の準備ありや無し、大努力

再び怒るな

一 劍飛來

六 禁斷嚴重

心自ら八方に配せよ(少し進む苦慮)

選舉苦杯と二人の病苦忘るゝな

祖先と親戚を考へよ

心境微動なし

呼吸を調節せよ

イ、早起早寝に勤めよ(効果上がる)

可成早く英語に着手せよ

ロ、火に親しむものは弱し

黙の定力發揮せよ

ハ、普通の持薬を廢し精神力を棄さず

ニ、起居態度を端正且つ悠々應揚たれ

一、言葉を慎み且つ少くし丁重なるは偉人の面目なり

二、一点すぎなき人は笑談を言はず且つ大聲笑ふなけれ

三、自分の事は自分で辨せよ

四、行終はる迄汝雲水一切の尊稱を辭せよ(時を嚴守せよ、能はざる時は約束するなけれ)

節約主義に徹底せよ、徳積まざれば光なし

汽車三等となる、特に衆と共にあれ

甲、亞細亞の光とは何ぞ、我

謙抑人に聞け

乙、黙して一点凝視せよ光輝かん(徳とは守ることを云ふ)

自ら其を用ひす

丙、一氣に進むとき一步退け判然として八方映ぜん

垂直にして語れ丹田を以て

努力しても努力しても我欠點なほらず、假令、怒りやすき、輕卒の性、言葉の丁重ならざる等只省みて慚愧の外なし。只六禁斷嚴重其他二三のみ。如此して如何んぞ榮光の坂に登るべき。無資格。踵を轉じて歸路につくか。否。諸神諸佛の命の儘。

一 刹那入淨、入穢、入彌勤樓閣、自由自在、泥

當分宴會一切謝絶

水に映じて月汚れず、月影を打つて月破れず、

拇指を藏せよ (惡魔拇指より入る)

月天真にあり此境を言ふ。

徒步主義

縣學務課、教員の健康増進の爲めに努力す。方法如何。第一原則に生き。虚飾を去り。信念に生き

れば。握飯、味噌汁、漬物にて健康無類に達せん。

一切事修行の餘暇、妥協するなけれ

明々々後日の確信加はる、相當將來の確信加はる、更に眞勇を作れ

眠について考へよ、忍は苦にあらず、樂境なり、持續せよ

天我に書を與へよ、食を考へよ、靈界に通ずるの途ありや

我清淨病を治せん、諸神諸佛の命を俟つ

新なる行を與へよ、人を猜疑するなけれ

神佛に謝す(自利、利他二百日目。正しき姿勢にて眠れ)―難中難行

第三百三十三日目附録

病者緊張の解。「午前十時、午後二時より各一時間、食後三十分、黙靜。なれし書し病室に張る。是以上の緊張なし、黙靜の間、念頭一切を忘れよ忘れて、忘れて、忘れ抜け、而して尙忘れよ
青年心身鍛鍊法則 第一原則に生きよ、小學生徒より初むべし

肺病精神安定對策

孝道を發揚して暖かき義務心に目ざめしめよ

第一、肺病は治る

第二、患者の家にては禁酒、禁煙

第三、夜電燈を薄くし視神經を和げよ

第四、病室に寒暖計を備へよ

第五、音響について隣人相扶けよ

黙一日反省……昨日駝目。本朝啓示以來進境を見る。阿ねる心、尊ぶる心を捨てよ。淵黙は修行の鍵

徒歩して疲勞せざるに達せよ、精神の力のみ(丹田で歩け)

法難除、病難除、觀音行、一步々々

昨日 十句經 三百卷 (三萬三千六百卷) 七十六

心經 六卷 (六七二) 一枚 一枚

呪 一〇八 (五二九二) 二百二十七枚

修行先決、餘事利他、虚飾不許、只佛縁

怒を抑ふる名藥ありや

自分を戒め且つ青年に告ぐ

一日飢ゆるときあるものは幸福なり、飢いて飽かざるものは明日幸福なり

書狀は名筆を尊ばず、明確なれ

刻々反省せよ、反省より積極の修行なし、反省は日に自由にして日に自在なり

雑談を空めよ、青年會各所に敬老會を起せ

病者修養法

第一則 一切を忘れよ

第三則 看護者は凡て病者の心持ち

第五則 讀經徹底せよ

第七則 科學を信じ且つ尊重せよ

第九則 病者の前には常に端正

第十則 病者の夢を和げよ

第二則 最上の責任者落ちつけ

第四則 信念は信仰によれ

第六則 責任者は病者之苦樂を共にせよ

第八則 病者に自立の確信を與へよ

第十則 快復と見れば更に緊張

政界刷新法則

第一則 八百長を廢せよ

第三則 自肅は本部より。雑談の府とするなかれ

第五則 青年に信念を與へよ

第七則 日英提携對露抑壓、日獨握手對支調整、信念確立對米和樂

第二則 分に應じ身を慎め

第四則 主力を青年に注け

第六則 自肅は根幹より初めよ。急がば廻れ

附録ノ二

抵抗養生法

「千日の句」

十八日過ぎぬ、美田くは^{九八二}にて鋤くごとく、まさし健康の種育つなり、

室内に張る、病者順調修行ミ家庭、食事小供等端正(習慣となる)

三男健康努力、東京長、次男勉強

本朝啓示より以來家庭は單なる和樂の園にあらず、嚴肅なる道場化せん爲め、心少しく準備進む

黙は抵抗養生法極意の一。黙。自己を宣傳せんとするとき黙破る。自己を忘れよ。家庭に於ても謙讓なれ

八疊間開放、足袋はかず、衣服三十年前の木綿カスリ一枚上乗、寝まき薄物カケアトン薄し昨夜開放して風室に入る、而して皮膚其他平然、益進め

家の整理日に進む、日に清淨加はる、一點の醜を残すな、清淨の地として昇天せよ、過去の醜を全部洗へ去れ

汝は五体を有せず、靈のみ、汝に五体の快樂なし、汝は靈の満足のみを享有す。汝の境致忘るゝなれ。

第三百二十四日

昭和十一年七月四日

富山宅 晴

大聖釋世尊なればこそ家庭を捨て、成道。一子尊者を弟子させらる。我凡夫家庭を捨てず。家庭を眞劍の道場とし茲に新なる難行の坂を登らんとす。罪深き憐れなる我。三日を出でずして魔の障あらん。諸神諸佛の命の儘

突如大命を拜す國策の準備ありや無し、大努力

再び怒るな

一劍飛來

六禁斷嚴重

心自ら八方に配せよ(少し進む苦慮)

選舉苦杯と二人の病苦忘るゝな

祖先と親戚を考へよ

心境激動なし

呼吸を調節せよ

イ、早起早寝に勤めよ(効果上がる)

可成早く英語に着手せよ

黙の定力發揮せよ

ロ、火に親しむ者は弱し

ハ、普通の持薬を廢し精神力を薬とす

ニ、起居態度を端正にせよ且つ悠々應揚たれ

1、言葉を慎み且つ少くし丁寧なるは偉人の面目なり

2、一点すきな人は笑談を言はず且つ大聲笑ふなけれ

3、自分の事は自分で辨せよ

4、行終はる迄汝雲水一切の尊稱を辭せよ(時を嚴守せよ、能はざる時は約束するなけれ)

節約主義に徹底せよ、徳積まざれば光なし

汽車三等となる、特に衆と共にあれ

甲、亞細亞の光とは何ぞ、我れ

謙抑人に聞け

乙、黙して一点凝視せよ光輝かん(徳とは守ることを云ふ)

自ら其智を用ひす

丙、一氣に進むとき一步退け判然として八方映ぜん

垂直にして語れ丹田を以て

空拳にして一點すきな体。心外無法、内亦不可得を推し究むれば其處に至る。不可得に縦横の働らきあり。又何人も打を得ず。只胸中無一物にあらず。無一物即無盡藏。無盡藏即自由自在。刀刺すことを得ず、火焼くことを得ず。

内亦不可得、求ニ什麼物ニ一足るを以て求めざるなり

當分宴會一切謝絶

滿つるを以て求めざるなり。足り、且つ滿つ、之に

拇指を藏せよ(惡覺拇指より入る)

與ふるに自由。即ち盡さず。

徒歩主義

庶政一新とは平地に波瀾を起し非常識を斷行するの意にあらず。廣田氏の使命別にあり、根本的外交方針を一定し、鐵則を下し、日本國民に安心を與へよ、國民安心すれば庶政自ら一新せん。國民安

心すれば腦裏貯蔵一切の資を提供するに吝ならざればなり

一切事修行の餘暇、妥協するなかれ

明々々後日の確信加はる、相當將來の確信加はる、更に眞勇を作れ

眠について考へよ、忍は苦にあらず、樂境なり、持續せよ

天我に書を與へよ、食を考へよ、靈界に通ずるの途ありや

我清淨病を治せん、諸神諸佛の命を俟つ

新なる行を與へよ、人を猜疑するなかれ

神佛に謝す(自利、利他二百日目。正しき姿勢にて眠れ)―難中難行

第三百三十四日目附録

過去心得べからず、現在心得べからず、未來心得べからず、こはあきらめて放任の意味にあらず。語り、食ふ、見る、怒る底のものにあらず。モット、もつと無量、無盡のものがあるとの意味。茲て眞の力量が出来る。得べからずと得たる力が強しとも強し。修養は此の強き力を得るところに意義あり

青年心身鍛錬法則 第一原則に生きよ、小學生徒より初むべし

孝道を發揚して暖かき義務心に目ざめしめよ

肺病精神安定對策

- 第一、肺病は治る
- 第二、患者の家にては禁酒、禁煙
- 第三、夜電燈を薄くし視神經を和けよ
- 第四、病室に寒暖計を備へよ
- 第五、音響につき隣人相扶けよ

默一日反省―昨日駭目。啓示ありし云へ尙駭目。不足。本日曠劍なれ。阿ねる心、尊ぶる心を捨てよ。淵黙は修行の鍵

歩徒して疲勞せざるに達せよ、精神の力のみ(丹田で歩け)

法難除、病難除、觀音行、一歩々々進む

昨日	十句經	三百卷	(三萬三千九百卷)	七十七
	心經	六卷	(六七八)	一枚 二枚
	呪	一〇八	(五四〇〇)	二百二十九枚

修行先決、餘事利他、虚飾不許、只佛縁

怒を抑ふる名藥ありや

自分を戒め且つ青年に告ぐ

一日飢ゆるときあるものは幸福なり、飢いて飽かざるものは明日幸福なり

書狀は名筆を尊ばず、明確なれ

刻々反省せよ、反省より積極の修行なし、反省は日に自由にして日に自在なり

雑談を戒めよ、青年各所に敬老會を起せ

病者修養法

- 第一則 一切を忘れよ
- 第二則 最上の責任者落ちつけ
- 第三則 看護者は凡て病者の心持ち
- 第四則 信念は信仰によれ
- 第五則 讀經徹底せよ
- 第六則 責任者は凡て病者と苦樂を共にせよ
- 第七則 科學を信じ且つ尊重せよ
- 第八則 病者に自立の確信を與へよ
- 第九則 病者の前には常に端正
- 第十則 快復ミ見れば更に緊張

第十一則 病者の夢を和げよ

政界刷新法則

第一則 八百長を廢せよ

第二則 分に應じ身を慎め

第三則 自肅は本部より。雜誌の府とするなかれ

第四則 主力を青年に注げ

第五則 青年に信念を與へよ

第六則 自肅は根幹より初めよ。急がば廻れ

第七則 日英提携對露抑壓、日獨握手對支調整、信念確立對米和樂

附録ノ二

抵抗養生法

千日の句、十九日過ぎぬ

くはひとりせず二人して分たん程にうんご頑張れ

室内に張る、病者順調

修行ニ家庭、食事小供等端正(習慣ニなる)三男健康努力、東京、長、次男勉學。海外旅行、船内食堂外人の行儀端正につき小供等に話しす。

彼等に窮屈な思せずして、眞剣なる道場に導く事、難事。

黙は抵抗養生法極意の一。黙。自己を宣傳するこき黙破る。

自己を忘れよ。家庭に於ても謙讓なれ

八疊間開放、足袋はかず、寢まき薄物

衣服三十年前の木綿カスリ一枚上乘カケブトン薄し(全部解放就寝平然)

家の整理日に進む、日に清淨加はる、一點の醜を残すな。清淨の地こして昇天せよ、過去の醜を全部洗へ去れ

汝は五体を有せず、靈のみ、汝に五体の快樂なし、汝は靈の満足のみを享有す。汝の境致忘るゝなかれ。

第三百二十五日

昭和十一年七月五日

富山宅、曇(冷)

新なる修行の坂によぢんこす。黙の門より入り諸神諸佛の道場を觀んこす。我清淨。今天地に愧ぢず此の門に入るの資格あり。草鞋の緒をしむるにあたつて修行項目を整理せよ。

突如大命を拜す國策の準備ありや無し、大努力

再び怒るな

一 劍飛來

六禁斷嚴重

心自ら八方に配せよ

選舉苦杯ニ二人の病苦忘るゝな

祖先と親戚を考へよ

心境微動なし

呼吸を調節せよ

イ、早起早寢に勤めよ(効果上がる)

可成早く英語に着手せよ

ロ、火に親しむ者は弱し

黙の定力發揮せよ

ハ、暈通の持薬を廢し精神力を薬こす

ニ、起居を端正にせよ且つ悠々應揚たれ

1、言葉な慎み且つ少くし丁重なるは偉人の面目なり

2、一点すぎなき人は笑談を言はず且つ大聲笑ふなかれ

3、自分の事は自分で辨ぜよ

4、行終はる迄汝雲水一切の尊稱を辭せよ(時を嚴守せよ、能はざる時は約束するなかれ)
節約主義に徹底せよ、徳積まざれば光なし

汽車三等となる、特に衆と共にあれ

甲、亞細亞の光は何ぞ、我

謙抑人に聞け

乙、黙して一点凝視せよ光輝かん(徳とは守ることを云ふ)

自ら其智を用ひず

丙、一氣に進むとき一步途け判然として八方に映ぜん

垂直にして語れ丹田を以て

修行項目を整理するは新なる修行に入るの豫備にして且つ過去百三十四日間の修行の再検討となり意義深し。過去百三十四日間は過去十年の修行を基礎せしめるもの故更に意義深し。諸神諸佛の命の儘

獅子一吼野子腦裂、さ平常人無事の境致は如是、猛

當分宴會一切謝絶

修行の眞面目

拇指を藏せよ(惡魔拇指より入る)

徒歩主義

(光は五年効果十年)

庶政一新の根本義を對外關係の整調にをく某政務調査の言やよし。自主積極ミ強がりだけにては國民は安心せず。常識の上に立つて共存共榮の妥當案を確立することにより初めて眞に國家に忠實なるもの三人は信せん

一切事修行の餘暇、妥協するなかれ

明々々後日の確信加はる、相當將來の確信加はる、更に眞勇を作れ

天我に書を與へよ、食を考へよ、靈界に通ずるの途ありや

我清淨病を治せん、諸神諸佛の命を俟つ

新なる行を與へよ、人を猜疑するなかれ

神佛に謝す(自利、利他二百日目。正しき姿勢にて眠れ)―難中難行

第三百三十五日目附録

中等教育程度の青年其他常識あるもの病氣靜養するべき徒らに讀書に耽る。却て健康向上せず。是の時靜座法を實行し。精神を和げ神經を平らかにせば健康進む。靜坐法は毎日午前、午後、各十分宛程より初むべし。急ぐべからず。最初三十分は多し、却て悪るし。最初十分より初めよ。

青年心身鍛鍊法則 第一原則に生きよ、小學生徒より初むべし

孝道を發揚して暖かき義務心に目ざめしめよ

肺病精神安定對策

第一、肺病は治る

第二、患者の家にては禁酒、禁煙

第三、夜電燈を薄くし視神經を和げよ

第四、病室に寒暖計を備へよ

第五、音響につき隣人相扶けよ

默一日反省―昨日少しよろし。啓示を思へ更に奮闘。本日眞劍なれ。阿ねる心、尊ぶる心を捨てよ。淵黙は修行の鍵

徒歩し疲勞せざるに達せよ、精神の力のみ(丹田で歩け)

法難除、病難除、觀音行、一歩々々進む

昨日 十句經 三百卷 (三萬四千二百卷) 七十八

心經 六卷 (六八四) 一枚

呪 一〇八 (五五〇八) 二三(枚)

修行先決、餘事利他、虚飾不許、只佛縁

怒を抑ふる名藥ありや

自分を戒め且つ青年に告ぐ
 一日飢ゆるときあるものは幸福なり、飢いて飽かざるものは明日幸福なり
 書状は名筆を尊ばず、明確なれ
 刻々反省せよ、反省より積極の修行なし、反省は日に自由にして日に自在なり
 雑談を戒めよ、青年會各所に敬老會を起せ

病者修養法

- 第一則 一切を忘れよ
 - 第二則 最上の責任者落ちつけ
 - 第三則 看護者は凡て病者の心持ち
 - 第四則 信念は信仰によれ
 - 第五則 讀經徹底せよ
 - 第六則 責任者は凡て病者之苦樂を共にせよ
 - 第七則 科學を信じ且つ尊重せよ
 - 第八則 病者に自立の確信を與へよ
 - 第九則 病者の前には常に端正
 - 第十則 快復を見れば更に緊張
 - 第十一則 病者の夢を和げよ
- 政界刷新法則
- 第一則 八百長を廢せよ
 - 第二則 分に應じ身を慎め
 - 第三則 自肅は本部より。雜誌の府にするなかれ
 - 第四則 主力を青年に注げ
 - 第五則 青年に信念を與へよ
 - 第六則 自肅は根幹より初めよ。急がば廻れ
 - 第七則 日英提携對露抑壓、日獨握手對支調整、信念確立對米和樂

附録ノ二

抵抗養生法

千日の句

二十日過ぎぬ、忘れて寝たる朝心地、よくはれ渡る空のこころけん

病室に張る、病者順調

修行に家庭、食事小供等端正(習慣になる)三男健康努力

三男靜坐法 朝夕十分を教ふ

黙は抵抗養生法極意の一。黙。自己を宣傳せんとするをき黙破る。

自己を忘れよ。家庭に於ても謙讓なれ

八疊間開放、足袋はかず、寝まき薄物

和服三十年前の木綿カスリ、上乘。カケブトン薄し(全部解放平然)

家の整理日に進む、日に清淨加はる。一點の醜を残すな。清淨の地にして昇天せよ、過去の醜を洗へ

去れ

汝は五体を有せず、靈のみ、汝に五体の快樂なし、汝は靈の満足のみを享有す。汝の境致忘るゝな

れ

第二百二十六日

昭和十一年七月六日 富山宅、曇、冷(夜雨)

昨日常男之元歸省。我れ八日上京を考ふ。昨日女中誤つて熱湯を轉覆し、家庭唯一の中心たる三女の
 足にかけ三女臥す。女中も臥す。今朝四女又風邪にて臥す。全家族全故障。此の間我は平然善處。靜
 かに水車の轉するが如し。

突如大命を拜す國策の準備ありや無し、大努力

再び怒るな

一 劍飛來

六 禁斷嚴重

心自ら八方に配せよ

選舉苦杯と二人の病苦忘るゝな

祖先と親戚を考へよ

心境微動なし

呼吸を調節せよ

イ、早寝早起に勤めよ(効果上がる)

可成早く書英語に着手せよ

ロ、火に親しむ者は弱し

黙の定力發揮せよ

ハ、普通の持薬を廢し精神力をとす

ニ、起居を端正にせよ且つ悠々應揚たれ

一、言葉を慎み且つ少くし丁寧なるは偉人の面目なり

二、一点すきな人は笑談を言はず且つ大聲笑ふなかれ

三、自分の事は自分で辨ぜよ

四、行終はる迄汝雲水一切の尊稱を辭せよ(時を嚴守せよ、能はざる時は約束するなかれ)

節約主義に徹底せよ、徳積まざれば光なし

汽車三等となる、特に衆と共にあれ

甲、亞細亞の光とは何ぞ、我

謙抑人に聞け

乙、黙して一点凝視せよ光輝かん(徳とは守ることを云ふ)

自ら其智を用ひず

丙、一氣に進むさき一步退け判然として八方映ぜん

垂直にして語れ丹田を以て

全家族の故障は豫定の如く魔障。我冷鐵の如し。微塵の微動なし。大修行の前の魔障としては餘り些事。大聖世尊成道に際してすら一億の魔軍顯はる。罪業殊に何人よりも深き我れの如き凡夫に於て當然なり。幸に我健なるを天地に謝する外なし。

平常心是道—なんともない心、如何なる場合にもなんともない心になるは重大事。心々不異名三之活祖一。

當分宴會一切謝絶
拇指を藏せよ(惡覺拇指より入る)
徒歩主義

人あり曰く。市博覽會終了。市選舉過る。對策如何。國家重大の秋自治の健全最も大切。愛市本位小策を弄せず。邪念なく。公平無私。以て邁進あるのみ。

一切事修行の餘暇、妥協するなかれ

明々々後日の確信加はる、相當將來の確信加はる、更に眞勇を作れ

眠について考へよ、忍は苦にあらず、樂境なり、持續せよ

天我に書を與へよ、食を考へよ、靈界に通ずるの途ありや

我清淨病を治せん、諸神諸佛の命を俟つ

新なる行を與へよ、人を猜疑するなかれ

神佛に謝す(自利、利他二百日目。正しき姿勢にて眠れ)—難中難行

第三百三十六日目附録

清空一點の曇りなき氣分。是人々の本性。之を徹見すれば。如何なる場合にも平常心。容易の修行にあらず。然ども何人も其方に向つて進むべし。路は靜坐法にあり。靜坐法は精神安定に効あり。病の爲に宜ろし。但し急ぐ可らず。朝夕十分宛より初めよ

青年心身鍛鍊法則 第一原則に生きよ、小學生徒より初むべし

肺病精神安定對策 第一、肺病は治る

第二、患者の家にては禁酒、禁煙

- 第三、夜電燈を薄くし視神経を和げよ
 - 第四、病室に寒暖計を備へよ
 - 第五、音響につき隣人相扶けよ
- 黙一日反省―昨日少しよろし。公平無私―啓示を思へ更に奮闘。本日真剣なれ阿ねる心、尊ぶる心を捨つべし。淵黙は修行の鍵。

徒歩して疲勞せざるに達せよ、精神の力のみ(丹田で歩け)
 法難除、病難除、觀音行、一歩々々進む

昨日 十句經 三百卷 (三萬四千五百卷) 七十九
 心經 六卷 (六九〇) 一枚
 呪 一〇八 (五六一六) 二二二

修行先決、餘事利他、虚飾不許、只佛縁

怒を抑ふる名藥なきや

自分を戒め且つ青年に告ぐ

一日飢ゆるときあるものは幸福なり、飢いて飽かざるものは明日幸福なり

書狀は名筆を尊ばず、明確なれ

刻々反省せよ、反省より積極の修行なし、反省は日に自由にして且つ自在せり

雑談を戒めよ、青年會各所に敬老會を起せ

病者修養法

- 第一則 一切を忘れよ
- 第二則 最上の責任者落ちつけ
- 第三則 看護者は凡て病者の心持
- 第四則 信念は信仰によれ

- 第五則 讀經徹底せよ
- 第六則 責任者は凡て病者と苦樂を共にせよ
- 第七則 科學を信じ且つ尊重せよ
- 第八則 病者に自立の確信を與へよ
- 第九則 病者の前には常に端正
- 第十則 快復ミ見れば更に緊張
- 第十則 病者の夢を和げよ

政界刷新法則

- 第一則 八百長を廢せよ
- 第二則 分に應じ身を慎め
- 第三則 自肅は本部より。雑談の府とするなかれ
- 第四則 主力を青年に注け
- 第五則 青年に信念を與へよ
- 第六則 自肅は根幹より初めよ。急がば廻れ
- 第七則 日英提携對露抑壓、日獨握手對支調整、信念確立對米和樂

附録ノ二

抵抗養生法

千日の句
 二十一日過ぎぬ苦九七九なく欲なく邪念なし天にまかせて日こそたてなん
 病室にはる、病者順調
 修行と家庭―「君子」火傷の爲め混亂食事修養談出來ず
 食事小供等端正(習慣となる)三男靜坐法を初む
 黙は抵抗養生法極意の一。黙。自己を宣傳せんとするとき默破る。自己を忘れよ。家庭に於ても謙讓なれ。

八疊間開放、足袋はかず、寝まき薄物
和服三十年前の木綿カスリ上乘。カケブトン薄し。全部解放平然
家庭の故障、心境に一點の微動なく、淡々處理

家の整理日に進む。日に清淨加はる。一點の醜を残すな。清淨の地こして昇天せよ。過去の醜を全部
洗へ去れ

汝は五体を有せず、靈のみ、汝に五体の快樂なし、汝は靈の満足のみを享有す。汝の境致忘るゝなか
れ

第三百三十七日

昭和十一年七月七日

富山宅 晴(冷)

全家族病床。我れ一人偉行録を草し冷水あびる數十杯。我體質素弱。三十數年前尾崎愕堂先生前夫人
逝去通夜の席、決議して曰く最先に去るものは我也。却て我残り他去る多。我此の頃食を制すること
嚴重。間食絶對なき故。健なる乎。人曰く胃元來小にして、はいらざる爲ならんと。容らざるを以て
容れず故に漸く持す。

突如大命を拜す、國策の準備ありや無し、大努力

再び怒るな

一劍飛來

六禁斷嚴重

心自ら八方に配せよ

選舉苦杯と二人の病苦忘るゝな

祖先と親戚を考へよ

心境微動なし

呼吸を調節せよ

イ、早起早寝に勤めよ(効果上がる)

可成早く英語に着手せよ

黙の定力發揮せよ

- ロ、火に親しむものは弱し
- ハ、普通の特藥を廢し精神力を築こす
- ニ、起居態度を端正にせよ且つ悠々應揚たれ
- 一、言葉を慎み且つ少くし丁重なるは偉人の面目なり
- 二、一点すぎなき人は笑談を言はず且つ大聲笑ふなけれ
- 三、自分の事は自分で辨ぜよ
- 四、行終はる迄汝雲水一切の尊稱を辭せよ(時は嚴守せよ、能はざる時は約束するなけれ)

節約主義に徹底せよ、徳積まされば光なし

汽車三等となる、特に衆と共にあれ

甲、亞細亞の光とは何ぞ、我

謙抑人に聞け

乙、黙して一点凝視せよ光輝かん(徳さは守ることを云ふ)

自ら其智を用ひす

丙、一氣に進むまき一步途げ判然として八方映ぜん

垂直にして語れ丹田を以て

三女君子胃を害し今朝臥す。四女も臥す。三男靜養。四男藥を呑む。病妻順調なれども固より絶對安
靜。病魔我修行に一撃を與へんこするなり。亞細亞の榮光の難坂の入口の魔障。されど我草鞋の紐を
ゆるめず。次に來るものは何。我に用意あり。黙の定力。

若有し求皆苦。不し如し無事。此の無事は只の

當分宴會一切謝絶

無事にあらず鍛練の上の無事。

拇指を藏せよ(惡覺拇指より入る)

徒歩主義

(光は五年効果十年)

人曰く。大富山市建設主義は君の提唱、而して即今以て如何と。然り對外關係案件山の如し大多忙の
富山市なり。積極建設を忘るべからず。然ども驕つて市民全体の幸福、安寧を思へば。生活安定即心

身の安定なり。今や市民全体は反省修養。堅磐の上に立たざるべからず。之を愛市本意と言ふ。愛市本位は全市民人格主義を云ふなり。

一切事修行の餘暇、妥協するなかれ

明々後日の確信加はる、相當將來の確信加はる、更に眞勇を作れ

眠について考へよ、忍は苦にあらず、樂境なり、持續せよ

天我に書を興へよ、食を考へよ、靈界に通ずるの途ありや

我清淨病を治せん、諸神諸佛の命を俟つ

新なる行を興へよ、人を猜疑するなかれ

神佛に謝す(自利、利他二百日目。正しき姿勢にてれ)―難中難行

第三百三十七日目附録

職業を休み、學校を休み、營業を休み、散歩底の病氣靜養者の行動はだらしく日を過す傾向あり。不可。正しき靜養にあらざれば精神の安定と健康の快復を得ず。正しき靜養は靜坐を以て最も宜しとす。靜坐は複式呼吸等の人工的を言ふにあらず。端然に靜坐するに初まるなり。最初朝夕十分。自然のまゝの端坐を云ふ

青年心身鍛鍊法則 第一原則に生きよ、小學生徒より初むべし

孝道を發揚して、暖かき義務心に目ざめしめよ

肺病精神安定對策

第一、肺病は治る

第二、患者の家にては禁酒、禁煙

第三、夜を電燈を薄くし視神經を和げよ

第四、病室に寒暖計を備へよ

第五、音響につき隣人相扶けよ

默一日反省……昨日は駢目。公平無私なりき。……啓示を思へ更に奮闘。本日眞劍なれ。阿ねる心尊ぶる心を捨つべし。淵黙は修行の鍵

徒歩して疲勞せざるに達せよ、精神の力のみ(丹田で歩け)

法難除、病難除、觀音行、一歩々々進む

昨日 十句經 三百卷 (三萬四千八百卷) 八十

心經 六卷 (六九六) 一枚 五枚

呪 一〇八 (五七二四) 二三七

修行先決、餘事利他、虛飾不許、只佛緣

怒を抑ふる名藥ありや

自分を戒め且つ青年に告ぐ

一日飢ゆるときあるものは幸福なり、飢いて飽かざるものは明日幸福なり

書狀は名筆を尊ばず、明確なれ

刻々反省せよ、反省より積極の修行なし、反省は日に自由にして日に自在なり

雜談を戒めよ、青年會各所に敬老會を起せ

病者修養法

第一則 一切を忘れよ

第二則 最上の責任者落ちつけ

第三則 看護者は凡て病者の心持ち

第四則 信念は信仰によれ

第五則 讀經徹底せよ

第六則 責任者は病者と苦樂を共にせよ

第七則 科學を信じ且つ尊重せよ
 第九則 病者の前には常に端正
 第十則 病者の夢を和げよ

第八則 病者に自立の確信を與へよ
 第十則 快復と見れば更に緊張

政界刷新法則

第一則 八百長を廢せよ
 第二則 分に應じ身を慎め
 第三則 自肅は本部より。雑談の府とするなけれ
 第四則 主力を青年に注げ
 第五則 青年に信念を與へよ
 第六則 自肅は根幹より初めよ。急がば廻れ
 第七則 日英提携對露抑壓、日獨握手對支調整、信念確立對米和樂

附録ノ二

抵抗養生法

「千日の句」

二十二日過ぎぬせくなはやるな、どつしりミ岩をも通す信念に立て

病室にはる、病者願調

修行ご家庭。靜坐法につき話す。食事小供端正、習慣となる

全家族病氣、我態度のみ全部明朗。我只謙遜以て明朗

三男靜坐を初む

默は抵抗養生法極意の一。默。自己を宣傳吹聴せんごするごとき默破る。自己を忘れよ。家庭に於て謙讓なれ

八覺間開放、足袋はかず、寢まき薄物（全部解放平然）

和服三十年前の木綿カスリ上乘。カケブトン薄し

家の整理日に進む。日に清淨加はる。一點の醜を残すな。清淨の地として昇天せよ。過去の醜を全部洗へ去れ。

汝は五体を有せず、靈のみ、汝に五体の快樂なし。汝は靈の満足のみ享有す。汝の境致忘るゝなけれ。

第三百二十八日

昭和十一年七月八日

富山宅 曇（冷）

本日出發の爲め三等寢台求めあり。故障の爲一日延期。小故障を却て喜ぶ。小障大障介意なし。亞細亞榮光の難路こそ慄然たれ。默の定力のみ難路を發見す。百三十八日極度の謹慎。尙「默」を得ず。諸神諸佛の御加護をまつ。

突如大命を拜す、國策の準備ありや無し、大努力

再び怒るな

一劍飛來

六禁斷嚴重

心自ら八方に配せよ

選舉苦杯ご二人の病苦忘るゝな

祖先ご親戚を考へよ

心境微動なし

呼吸を調節せよ

イ、早起早寢に勤めよ

可成早く英語に着手せよ

ロ、火に親しむものは弱し

默の定力發揮せよ

ハ、普通の持薬を廢し精神力を薬さす

ニ、起居態度を端正且つ悠々應揚たれ

- 1、言葉を慎み且つ少くし丁重なるは偉人の面目なり
- 2、一点すぎなき人は笑談を言はず且つ大聲笑ふなかれ
- 3、自分の事は自分にて辨ぜよ
- 4、行終るまで汝雲水一切の尊稱を辭せよ（時を嚴守せよ、能はざる時は約束するなかれ）
節約主義に徹底せよ、徳つまざれば光なし

汽車三等となる、特に衆と共にあれ

甲、亞細亞の光さは何ぞ、我

謙抑人に聞け

乙、黙して一点凝視せよ光輝かん（徳さは守ることを云ふ）

自ら其智を用ひず

丙、一氣に進むとき一步退け判然として八方映ぜん

垂直にして語れ丹田を以て

全國的小學教員の体格問題。青年、少年、幼年の体格問題。前途に關する一種の不安。一夜全市暗黒航空防禦演習。之亦一種の不安。……中小商工業者の生活不安。……凡て之等を一掃し、内容の充實を圖るべし。愛市本位、全市民人格主義の活躍を要する所なり。

有身非三覺体一無相乃眞形。一臨濟釋世尊を 當分宴會一切謝絶

引合に出しすぎる。後世の誤解を招く、向 拇指を藏せよ（惡覺拇指より入る）

後教を爲すもの他に途あり。

（光は五年効果十年）

徒歩主義

數年前若き人は左翼的愛讀者なりき。今や青年多く反動的愛讀者。凡て歸趣に迷ふ。茲に於て國体明徴論起る。國体明徴は天地の眞理に則し中道なればなり。愛市本位、全市民人格主義の先覺者たるべき人。一切の不安を一掃し。剛健精神の發揚に努力せよ。

一切事修行の餘暇、妥協するなかれ

明々々後日の確信加はる、相當將來の確信加はる、更に眞勇を作れ

眠について考へよ、忍は苦にあらず、樂境なり、持續せよ

天我に書を興へよ、食を考へよ、靈界に通ずるの途ありや

我清淨病寃を治せん、諸神諸佛の命を俟つ

新なる行を考へ、人を猜疑するなかれ

神佛に謝す（自利、利他は二百日目。正しき姿にて眠れ）一難中難行

第三百三十八日目附録

弘法大師六十二才入滅以前、二年四ヶ月穀類を斷ち。三ヶ月以前殆ど一切を斷ち。精神のみにて生き。死後四十九日生けるが如し。修行の極致此に至る當然なり。釋世尊入滅五分前迄最後の説法あり。安祥入涅槃。然るに臨濟録の譯者宗活氏はあゝ苦しやと胸なでながらくたばつたと。宗活氏は文章よく、言論善し只修行を解せず、如是不謹慎の句あり。我天下の爲めに誤を正しをく
青年心身鍛鍊法則 第一原則に生き小學生徒より初むべし

孝道を發揚して、暖かき義務心に目ざめしめよ

肺病精神安定對策

第一、肺病は治る

第二、患者の家にては禁酒、禁煙

第三、夜電燈を薄くし視神經を和けよ

第四、病室に寒暖計を備へよ

第五、音響につき隣人相扶けよ

默一日反省。昨日も駝目。私心なかりき。……啓示を思へ更に奮闘。本日眞劍なれ。阿ねる心尊ぶる

心を捨つべし。淵黙は修行の鍵

徒歩して疲勞せざるに達せよ、精神の力のみ（丹田で歩け）
法難除、病難除、觀音行、一步々々

昨日 十句經 三百卷

三萬五千百卷

八十一

心經 六卷

七〇二

一枚 五枚

呪 一〇八

五八三二

二四三

修行先決、餘事利他、虛飾不許、只佛緣

怒を抑ゆる名藥ありや

自分を戒め且つ青年に告ぐ

一日飢ゆるさきあるものは幸福なり、飢いて飽かざるものは明日幸福なり

書狀は名筆を尊ばず、明確なれ

刻々反省せよ、反省より積極の修行なし、反省は日に自由にして且つ日に自在なり

雑談を戒めよ 青年會各所に敬老會を起せ

病者修養法

- 第一則 一切を忘れよ
- 第二則 最上の責任者落ちつけ
- 第三則 看護者は凡て病者の心持ち
- 第四則 信念は信仰によれ
- 第五則 讀經徹底せよ
- 第六則 責任者は凡て病者と苦樂を共にせよ
- 第七則 科學を信じ且つ尊重せよ
- 第八則 病者に自立の確信を與へよ
- 第九則 病者の前には常に端正
- 第十則 快復と見れば更に緊張
- 第十則 病者の夢を和けよ

政界刷新法則

- 第一則 八百長を廢せよ
- 第二則 分に應じ身を慎め
- 第三則 自肅は本部より。雑談の府とするなかれ
- 第四則 主力を青年に注け
- 第五則 青年に信念を與へよ
- 第六則 自肅は根幹より初めよ。急がば廻れ
- 第七則 日英提携對露抑壓、日獨握手對支調整、信念確立對米和樂

附録ノ二

抵抗養生法

「千日の句」

二十三日過ぎぬ、聞くな、なんでも知らずに通せ一年たてば皆んな無駄事

病者又歌あり忍ぶだけ忍んで見よやうこのほかにむくゆるすべも知らぬ此の身は
ごく既にのべの送りを受くる身のみやこのほりを送るしあはせ

病者順調

修行と家庭、靜坐法につき話す

食事小供端正（習慣となる）

八疊間開放、足袋はかす、寝まき薄物 （全部解放平然）

和服三十年前の木綿かすり上乘、カケブトン薄

家の整理日に進む。日に清淨加はる。一點の醜を残すな。清淨の地として昇天せよ。過去の醜を全部洗へ去れ

汝は五体を有せず、靈のみ、汝に五体の快樂なし。汝は靈の満足のみを享有す。汝の境致忘るゝなれ。

第三百二十九日

昭和十一年七月九日

富山宅 猛雨

日々修行の項目此の如く多數なるは。我重々の逆境の爲め。修行挫折すべきを恐れ支柱とせるなり。幸なるかな百二十九日俯仰天地に愧ぢず。今や第二の難坂をよぢんとするに當り甲冑重すぎ且つ無用なり。選舉苦杯の四字を削除せん。無用なるを以てなり。

突如大命を拜す、國策の準備ありや無し、大努力

再び怒るな

六禁斷嚴重

二人の病苦忘るゝな

心境微動なし

イ、早起早寝に勤めよ（効果上がる）

ロ、火に親しむものは弱し

ハ、普通の持薬を廢し精神力を薬とす

ニ、起居態度を端正にせよ且つ悠々應揚たれ

一、言葉を慎み且つ少くし丁寧なるは偉人の面目なり

二、一点すぎなき人は笑談を言はず且つ大聲笑ふ勿れ

三、自分の事は自分で辨ぜよ

四、行終はる迄汝雲水一切の尊稱を辭せよ（時を嚴守せよ、能はざる時は約束するなかれ）

節約主義に徹底せよ、徳積まざれば光なし

汽車三等となる、特に衆と共にあれ

甲、亞細亞の光さは何ぞ、我

乙、黙して一点凝視せよ光輝かん（徳さは守ることを云ふ）

丙、一氣に進むとき一步退け判烈として八方映せん

選舉の苦杯を嘗めたる日を想起するに。當時一點の心的微動なく只何の使命ぞと考へしのみ。爾來即今依然として動搖なし。又向後修業途上苦杯を想起し、自らを鞭撻する底の支柱無用。一路第二の難坂に向つて邁進

適然獨脫不與物拘一天地ひつくりかへつて

一点の疑なし。

當分宴會一切謝絶
拇指を藏せよ（惡覺拇指より入る）
徒歩主義（光は五年効果十年）

民衆眞言講話終る。大谷光瑞師著見眞大師を讀初む。海外旅行に關係せる本箱中より之を取出す。如何にして此の書手に入りしや記憶なし。

如何なる難事も努力に依て克服し得。この信念に生きよ。之れ全市民人格主義の端的なり。近時富山賣藥振はず。業者希くは靜かに佛前に燈明を上げ。風雨をつき、山川を突破し、鹿兒島、青森を往來せる二百年前の祖先を想起せよ。自ら頭上落下を覺えん人格主義の三十棒

一切事修行の餘暇、妥協するなかれ

明々々後日の確信加はる、相當將來の確信加はる、更に眞勇を作れ

眠について考へよ、忍は苦にあらず、樂境なり、持續せよ

天我に書を興へよ、食を考へよ、靈界に通ずるの道ありや
 我清淨病を治せん、諸神諸佛の命を俟つ
 新なる行を興へよ、人を猜疑するなかれ
 神佛に謝す(自利、利他は二百日目。正しき姿勢にて眠れ)―難中難行

第三百二十九日附録

靜坐法は端然と坐するのみを云ふ。復式呼吸其他の工作を用えず。端然と坐するは安坐の形式にて右足を下に左足を上に重ねるのみ。出來得べくんば鼻と臍と相均一線の處にをき、右掌の上に左拳をのせ、拇指相對し接す。凡てに無理せず、一切力まず、呼吸を荒ぶる所なく、靜かに朝夕十分坐し三日目より二分宛増せ

青年心身鍛鍊法則 第一原則に生き、小學生徒より初むべし

孝道を發揚して暖かき義務心に目ざめしめよ

肺病精神安定對策

第一、肺病は治る

第二、患者の家にては禁酒、禁煙

第三、夜電燈を薄くし祖神經を和げよ

第四、病室に寒暖計を備へよ

第五、音響につき隣人相扶けよ

默一日反省。昨日より、進む。私心なし。一啓示を思へ更に奮闘。本日眞劍なれ阿ねる心、尊ぶるを捨てよ。淵默は修行の鍵

徒歩して疲勞せざるに達せよ、精神の力のみ(丹田で歩け)

法難除、病難除、觀音行、一步々々

昨日 十句經 三百卷

三萬五千四百卷

八十二

心經 六卷

七〇八

一枚 一枚

呪 一〇八

五九四〇

二百四十五

修行先決、餘事利他、虛飾不許、只佛緣

怒を抑ゆる名藥ありや

自分を戒め且つ青年に告ぐ

一日飢ゆるときあるものは幸福なり、飢いて飽かざるものは明日幸確なり

書狀は名筆を尊ばず、明確なれ

刻々反省せよ、反省より積極の修行なし、反省は日に自由にして且つ日に自在なり

雜談を戒めよ、青年會各所に敬老會を起せ

病者修養法

第一則 一切を忘れよ

第二則 最上の責任者落ちつけ

第三則 看護者は凡て病者の心持ち

第四則 信念は信仰によれ

第五則 讀經徹底せよ

第六則 責任者は凡て病者と苦樂を共にせよ

第七則 科學を信じ且つ尊重せよ

第八則 病者に自立の確信を興へよ

第九則 病者の前には常に端正

第十則 快復を見れば更に緊張

第十則 病者の夢を和げよ

政界刷新法則

第一則 八百長を廢せよ

第二則 分に應じ身を慎め

- 第三則 自肅は本部より。雑談の府にするなかれ 第四則 主力を青年に注げ
- 第五則 青年に信念を與へよ 第六則 自肅は根幹より初めよ。急がば廻れ
- 第七則 日英提携對露抑壓、日獨握手對支調整、信念確立對米和樂

附録ノ二

抵抗養生法

「千日の句」

二十四日過ぎぬよく南むの二字味はへば自信快癒の外に意義なし
病者順調

修行に家庭 静坐法につき話す

食事小供等端正、……食事は静坐法について専ら集注

八疊間解放、足袋はかず、寝まき薄物（全部解放）

和服三十年以前の木綿かすり上乘、カケブトン薄し

家の整理日に進む。日に清淨加はる。一點の醜を残すな。清淨の地として昇天せよ。過去の醜を全部洗へ去れ。

汝は五体を有せず。靈のみ。汝に五体の快樂なし。汝は靈の満足のみ享有す。汝の境致忘るゝなかれ。

第四百十日

昭和十一年七月十日

富山宅 雨

一昨夕揮毫の筆を投じたる時町内第六區の青年四君神社の問題につき來訪。揮毫を配ち尙引續き青年

諸君に送ることす。我揮毫拙劣常に慚愧流汗。只町風發揚のヒントを得ん爲めなり。家庭より隣人に。

突如大命を拜す國策の準備ありや無し、大努力

再び怒るな

一奴飛來

六禁斷嚴重

心自ら八方に配せよ

二人の病苦忘るゝな

祖先と親戚を考へよ

心境微動なし

呼吸を調節せよ

イ、早寝早起に勤めよ（効果上る）

可成早く英語に着手せよ

ロ、火に親しむものは弱し

黙の定力發揮せよ

ハ、普通の持薬を廢し精神力を薬とす

- ニ、起居態度を端正にせよ且つ悠々應揚たれ
- 一、言葉を慎み且つ少くし丁重なるは偉人の面目なり
- 二、一点すぎなき人は笑談を言はず且つ大聲笑ふなかれ
- 三、自分の事は自分にて辨ぜよ
- 四、行終はる迄汝雲水一切の尊稱を辭せよ（時を嚴守せよ、能はざる時は約束をするなかれ）

節約主義に徹底せよ、徳積まされは光なし

汽車三等となる、特に衆と共にあれ

甲、亞細亞の光とは何ぞ、我

謙抑人に聞け

乙、黙して一点凝視せよ光輝かん（徳さは守ることを云ふ）

自ら其智を用ひず

丙、一氣に進むとき一步退け判然として八方映ぜん

垂直にして語れ丹田を以て

三塗地獄頓に現するも一念心の怖れなし。此の境致得易し、我之を會す。一擊地獄を滅却底の手腕に至つては我修行千里萬里の隔りあり。更に修行、力を作れ……地獄之れ幻化に觀すれば地獄滅す。如何觀。畢境力。

乾坤倒覆、我更不疑—無垢清淨の修行進めば我更不疑—努力

當分宴會一切謝絶
拇指を藏せよ(惡覺拇指より入る)
光は五年効果十年)
徒歩主義

町に町風起り、市に市風起らんか。革新の氣滿ち信念溢れ、難事自ら解決せん。青年曉に立つて鐘をつき、神社と佛閣を中心に町風と市風の發揚に努力せよ

一切事修行の餘暇、妥協するなかれ

明々々後日の確信加はる、相當將來の確信加はる、更に眞勇を作れ

眠について考へよ、忍は苦にあらず、樂境なり、持續せよ

天我に書を與へよ、食を考へよ、靈界に通ずる途ありや

我清淨病を治せん、諸神諸佛の命を俟つ

新なる行を與へよ、人を猜疑するなかれ

神佛に謝す(自利、利他二百日目。正しき姿勢にて眠れ)―難中難行

第四百十日目附録

病は身体の調和を得ざるより發す。故に人若し病めば調和を快復するに努力すべし。正しければ調和を得。端然と靜坐するもの正し。端坐するとき右に少し傾けば地軸共に傾く。左に少し傾むけば地軸左に傾むく。天地と一枚の氣分之より正しきものなし。
青年心身鍛鍊法則 第一原則に生き、小學生徒より初むべし

孝道を發揚して暖かき義務心に目ざめしめよ

肺病精神安定對策

第一、肺病は治る

第二、患者の家にては禁酒、禁煙

第三、夜電燈を薄くし視神經を和げよ

第四、病室に寒暖計を備へよ

第五、音響につき隣人相扶けよ

默一日反省。昨日よりやゝ進む。私心なし。一啓示を思へ更に奮闘。本日眞劍なれ阿ねる心奪ぶる心を捨てよ。淵默は修行の鍵

徒歩して疲勞せざるに達せよ、精神の力のみ(丹田で歩け)

法難除、病難除、觀音行、一歩々々

昨日 十句經 三百卷 (三萬五千七百卷) 八十三
心經 六卷 (七一四) 一枚
呪 一〇八 (六〇四八) 二百四十五

修行先決、餘事利他、虚飾不許、只佛縁

怒を抑ゆる名藥ありや

自分を戒め且つ青年に告ぐ

一日飢ゆるさきあるものは幸福なり、飢いて飽かざるものは明日幸福なり

書狀は名筆を尊ばず、明確なれ

刻々反省せよ、反省より積極の修行なし、反省は日に自由にして且つ日に自在なり

雑談を戒めよ、青年會各所に敬老會を起せ

病者修養法

- 第一則 一切を忘れよ
- 第三則 看護者は凡て病者の心持ち
- 第五則 讀經徹底せよ
- 第七則 科學を信じ且つ尊重せよ
- 第九則 病者の前には常に端正
- 第十一則 病者の夢を和げよ

- 第二則 最上の責任者落ちつけ
- 第四則 信念は信仰によれ
- 第六則 責任者は病者之苦樂を共にせよ
- 第八則 病者に自立の確信を與へよ
- 第十則 快復と見れば更に緊張

政界刷新法則

- 第一則 八百長を廢せよ
- 第三則 自肅は本部より。雜談の府とするなかれ
- 第五則 青年に信念を與へよ
- 第七則 日英提携對露抑壓、日獨握手對支調整、信念確立對米和樂
- 第二則 分に應じて身を慎め
- 第四則 主力を青年に注け
- 第六則 自肅は根幹より初めよ。急がば廻れ

附録ノ二

抵抗養生法

千日の句

二十五日過ぎぬ、かくなごやかな心地すも神と佛の加護にそありける

病者順調

修行と家庭、靜坐法につき話す

食事小供等端正

八疊間開放、足袋はかず、寢まき薄物
和服三十年前の木綿かすり、上乘、カケブトン薄

梅雨一點の故障なきは養生の
爲めなり

(全部解放)

家の整理日に進む。日に清淨加はる。一點の醜を残すな。清淨の地として昇天せよ。過去の醜を全然洗へ去れ
汝は五体を有せず、靈のみ、汝に五体の快樂なし、汝は靈の満足のみを享有す、汝の境致忘るゝなかれ、

第四百四十一日

昭和十一年七月十一日 東京 晴、暑

亞細亞の光は何ぞ我。我は日本人。日本の魂は亞細亞の光。憐むべし我は餘りに罪障深くして本質を曇らす事絶大。曇を掃へ日本魂の本質に徹底すべく難路をよぢんこす。凡て日本の青年よ。等しく共に輝く亞細亞の光。奮へ。

突如大命を拜す國策の準備ありや無し、大努力

再び怒るな

一劍飛來

六禁斷嚴重

心自ら八方に配せよ

二人の病苦忘るゝな

祖先と親戚を考へよ

心境微動なし

呼吸を調節せよ

イ、早寢早起に勤めよ(効果上る)

可成早く英語に着手せよ

ロ、火に親しむ者は弱し

默の定力發揮せよ

ハ、普通の持藥を廢し精神力を藥とす

- ニ、起居態度を端正にせよ且つ悠々應揚たれ
- 1、言葉を慎み且つ少くし丁重なるは偉人の面目なり
- 2、一点すぎなき人は笑談を言はず且つ大聲笑ふなかれ
- 3、自分の事は自分で辨ぜよ
- 4、行終はる迄汝雲水一切の尊稱を辭せよ（時を嚴守せよ、能はざる時は約束するなかれ）
節約主義に徹底せよ、徳積まざれば光なし

汽車三等なる、特に衆と共にあれ

甲、亞細亞の光とは何ぞ、我

謙抑人に聞け

乙、黙して一点凝視せよ光輝かん（徳とは守ることを云ふ）

自ら其智を用ひず

丙、一氣に進むとき一步退け、判然として八方映ぜん

垂直にして語れ丹田を以て

本朝東京着。此の修行に入る前常に列車は高級寢台。必ず寢衣を着換ふ。着のみ着の儘寢るにあらざれば非常時局來らんとし報國の資格なし。昨夜列車に於て豫定の如く寢むる。満足。天下の青年此の項を見て恐らく噴飯。弱き我に取つては兎に角努力。只習慣恐るべきを知れ。

体究練磨一朝自省。百練千練初めて至る。努力々々

當分宴會一切謝絶
拇指を藏せよ（惡覺拇指より入る）
徒歩主義（光は五年効果十年）

六十數日振りにて上京三四氏に聞く。一切は不安定。凡ては其の日暮らしと。信念なき爲めなり。一切の隋氣を破却し。信念に生きよ。日本本來の面目に生きよ、

一切事修行の餘暇、妥協するなかれ

明々々後日の確信加はる、相當將來の確信加はる、更に眞勇を作れ

眠について考へよ、忍は苦にあらず、樂境なり、持續せよ
天我に書を與へよ、食を考へよ、靈界に通ずるの途あるや

我清淨病を治せん、諸神諸佛の命を俟つ

新なる行を與へよ、人を猜疑するなかれ

神佛に謝す（自利、利他二百日目。正しき姿勢にて眠れ）―難中難行

第四百十一日目附録

法難、病難は人生の最逆境。逆境裏にあつて靜かに考ふるべき心配の塊、何れにあるや考ふるに、胸にあり。靜坐により其の塊を段々小さくすることを得。而して小さき其塊を漸次臍下に落すことを得。此の時胸中明朗を覺ゆ。靜坐の効大なり。逆境の人試みよ。

青年心身鍛鍊法則 第一原則に生き、小學生徒より初むべし

孝道を發揚して暖かき義務心に目ざめしめよ

肺病精神安定對策

第一、肺病は治る

第二、患者の家にては禁酒禁煙

第三、夜電燈を薄くし視神經を和げよ

第四、病室に寒暖計を備へよ

第五、音響につき隣人相扶けよ

默一日反省。昨日よりやゝ進む。私心なし。―啓示を思へ更に奮闘。（眞劍）阿ねる心、尊ぶる心を捨てよ―淵默は修行の鍵

徒歩して疲勞せざるに達せよ、精神の力のみ（丹田で歩け）

法難除、病難除、觀音行、一步々々

昨日 十句經 三百卷 (三萬六千卷) 八十四
心經 六卷 (七二〇) 一枚 二枚
呪 一〇八 (六一五六) 二百四十八枚

修行先決。餘時利他。虚飾不許。只佛縁

怒を抑ゆる名藥ありや

自分を戒め且つ青年に告ぐ

一日飢ゆるときあるものは幸福なり、飢いて飽かざるものは明日幸福なり

書狀は名筆を尊はす、明確なれ

刻々反省せよ、反省より積極の修行なし、反省は日に自由にして且つ日に自在なり

雑談を戒めよ、青年會各所に敬老會を起せ

病者 修養法

- 第一則 一切を忘れよ
- 第二則 最上の責任者落ちつけ
- 第三則 看護者は凡て病者の心持ち
- 第四則 信念は信仰によれ
- 第五則 讀經徹底せよ
- 第六則 責任者は凡て病者之苦樂を共にせよ
- 第七則 科學を信じ且つ尊重せよ
- 第八則 病者に自立の確信を與へよ
- 第九則 病者の前では常に端正
- 第十則 快復と見れば更に緊張
- 第十一則 病者の病を和けよ
- 政界刷新法則
- 第一則 八百長を廢せよ
- 第二則 分に應じ身を慎め

- 第三則 自肅は本部より。雑談の府こするなかれ
- 第四則 主力を青年に注げ
- 第五則 青年に信念を與へよ
- 第六則 自肅は根幹より初めよ。急がば廻れ
- 第七則 日英提携對露抑壓、日獨握手對支調整、信念確立對米和樂

附録ノ二

抵抗養生法

千日の句

二十六日過ぎぬ、わるく^{九七四}なし早起き出よと、云ふを抑へてしばし安靜

東京より郵送。患者順調の電報にて愈々安心

修養と家庭―東京にても一大修養道場

東京にても開放座敷。列車三等凡てよろし

東京多忙、整理進まず

汝は五体を有せず、靈のみ、汝に五体の快樂なし、汝は靈の満足のみ享有す、汝の境致忘るなかれ

順に定力進むを知る、斷じて屈せず

第四百二十二日

昭和十一年七月十二日 東京 曇

最も尊敬する某氏に會ふ。血色上乘なり。資力豊富美食の爲めか。然らず朝、米飯一碗、味噌汁、漬物。晝ソバ一杯。夜生ラッキョに味噌を付け其他一菜、漬物のみ。我驚歎す。某氏曰く之れ素食にあらず最上の食と。然り。

突如大命を拜す國策の準備ありや無し、大努力

再び怒るな

六禁断嚴重

二人の病苦忘るゝな

心境微動なし

イ、早起早寝に勤めよ

ロ、火に親しむものは弱し

ハ、普通の持薬を廢し精神力を薬さす

ニ、起居態度を端正にせよ且つ怒々應揚たれ

一、言葉を慎み且つ少くし丁重なるは偉人の面目なり

二、一点すぎなき人は笑談を言はず且つ大聲笑ふなかれ

三、自分の事は自分にて辨ぜよ

四、行成る迄汝雲水一切の尊稱を辭せよ(時を嚴守せよ、能はざる時は約束するなかれ)

節約主義に徹底せよ、徳積まざれば光なし

汽車三等となる、特に衆と共にあれ

甲、亞細亞の光とは何ぞ、我

乙、黙して一点凝視せよ光輝かん(徳とは守ることを云ふ)

丙、一氣に進むとさき一步退け判然として八方映ぜん

支那の苦力。晝キウリ二本にて能力大に上る。獨人之を研究し、キウリは血を清淨にすこ、キウリの

効を某氏説く。歐洲戦争に於て軍艦に「レモン」欠乏し軍人の腦力欠乏を發見せり。レモン一キレ又

二キレは大効あり。又某艦隊司令長官の息腦患、カボチャを常食として優等生となる、カボチャは腦

に宜ろし。某氏健康食物につき談盡くる處を知らず、我尊敬の念愈々加はる

眼裏出来眼裏打—山僧無一法與人—我亦此の境致に

入る。努力々々

當分宴會一切謝絶
拇指を藏せよ(惡覺拇指より入る)
徒歩主義

某氏又下ヂウ汁、シジミ汁、トマト、セロリー等を激賞す。心身健なるもの初めて力あり。身健は第一原則に生きるもの達す。味覺の煩悶に捕はるゝもの心機一轉せよ。人生の墮落端を之に發す。

一切事修行餘暇、妥協するなかれ

明々々後日の確信加はる、相當將來の確信加はる、更に眞勇を作れ

眠について考へよ、忍は苦にあらず、樂境なり、持續せよ

天我に書を與へよ、食を考へよ、靈界に通ずるの途なきや

我清淨病を治せん、諸神諸佛の命を俟つ

新なる行を與へよ、人を猜疑するなかれ

神佛に謝す(自利、利他二百日目。正しき姿勢にて眠れ)—難中難行

第四百四十二日目附録

釋宗活氏の講演の中。射術極意の中「不瞬の法」なるものあり。如何なるもの來るも瞬きせざる修行の後ち「更に三年針程のもの棒の如く見ゆるの修行」を試み一匹の虱が大車輪の如く見え、一羽の鳥山の如く見ゆるに至り。虱を射て誤たす。此の修行實に「心自ら八方配」の極意に適中す(視針如棒術)として我更に努力せん

青年心身鍛鍊法則 第一原則に生き、小學生徒より初むべし

孝道を發揚して暖かき義務心に目ざめしめよ
肺病精神安定對策 第一、肺病は治る

第二、患者の家にては禁酒、禁煙

第三、夜電燈を薄くし視神經を和けよ

第四、病室に寒暖計を備へよ

第五、音響につき隣人相扶けよ

默一日反省。昨日尙不足。私心なし。定力顯はる。一啓示を思へ更に奮闘。眞劍阿ねる心、尊ぶる心を捨てよ一淵黙は修行の鍵

徒歩して疲勞せざるに達せよ、精神の力のみ(丹田で歩け)

法難除、病難除、觀音行、一步々々

昨日 十句經 三百卷 (三萬六千三百卷) 八十五

昨夜東京 心經 六卷 (七二六) 一枚

にて讀經 呪 一〇八 (六二六四) 二百四十九

修行先決、餘事利他、虚飾不許、只佛縁怒を抑ゆる名業ありや

自分を戒め且つ青年に告ぐ

一日飢ゆるときあるものは幸福なり、飢いて飽かざるものは明日幸福なり

書狀は名筆を尊ばず、明確なれ

刻々反省せよ、反省より積極の修行なし、反省は日に自由にして且つ日に自在なり

雑談を戒めよ、青年會各所に敬老會を起せ

病者修養法

第一則 一切を忘れよ

第三則 看護者は凡て病者の心持ち

第五則 讀經徹底せよ

第七則 科學を信じ且つ尊重せよ

第九則 病者の前には常に端正

第十一則 病者の夢を和げよ

第二則 最上の責任者落ちつけ

第四則 信念は信仰によれ

第六則 責任者は病者之苦樂を共にせよ

第八則 病者に自立の確信を與へよ

第十則 快復を見れば更に緊張

政界刷新法則

第一則 八百長を廢せよ

第三則 自肅は本部より。雑談の府とするなかれ

第五則 青年に信念を與へよ

第七則 日英提携對露抑壓、日獨握手對支調整、信念確立對米和樂

第二則 分に應じ身を慎め

第四則 主力を青年に注け

第六則 自肅は根幹より初めよ。急がば廻れ

附録ノ二

抵抗養生法

千日の句

二十七日過ぎぬ、よくなみに乗る水夫のごと冷然として体温器見よ
東京より郵送。

修養ミ家庭、東京にても道場として戦ふ

昨夜開放就寢 列車三等宜ろし

東京整理進まず、少し初む
汝は五体を有せず、靈のみ、汝に五体の快樂なし、汝は靈の満足のみ享有す、汝の境致忘るゝなかれ
定力進むを知る。逢羅漢^ニ殺羅漢^ニ眼裏出來眼裏打^ニ。一切は鏡に寫つて跡を止めざるが如し、淡々なり、又恬たり

第四百四十三日

昭和十一年七月十三日 東京 梅雨重し

我毎朝臨濟録を讀む。物と拘はらず、透脱自在の境致。人の言句に捕はれず別に天地あり。我之を實行す。更に一段向上定力の發揮。眼裏に出て來れば眼裏に打す底を欲す。諸神諸佛の御加護を待つ。

突如大命を拜す國策の準備ありや無し、大努力

再び怒るな

一 劍飛來

六 禁斷嚴重

心自ら八方に配せよ

二人の病苦忘るゝな

視針如棒一考慮

心境微動なし

祖先と親戚を考へよ

イ、早寢早起に勤めよ

呼吸を調節せよ

ロ、火に親しむものは弱し

可成早く英語に着手せよ

ハ、普通の持薬を廢し精神力を棄さず

默の定力發揮せよ

ニ、起居態度を端正にせよ且つ悠々應揚たれ

一、言葉を慎み且つ少くし丁寧なるは偉人の面目なり

二、一点すぎなき人は笑談を言はず且つ大聲笑ふなかれ

三、自分の事は自分にて辨せよ

4、行終るまで汝雲水一切の尊稱を辭せよ(時を嚴守せよ、能はざる時は約束するなかれ)

節約主義に徹底せよ、徳積まざれば光なし

汽車三等となる、特に衆と共にあれ

甲、亞細亞の光とは何ぞ、我

謙抑人に聞け

乙、黙して一点凝視せよ光輝かん(徳さは守ることを云ふ)

自ら其智を用ひず

丙、一氣に進むとさき一步退け判然として八方映ぜん

垂直にして語れ丹田を以て

人材主義教育の語顯はれんミす。劃一的教育の欠陥に對して人材の必要を痛感せる爲ならん。されど忘るゝなかれ人格主義。人格主義の中に人材主義、劃一主義凡て包含せらるゝなり。捕はるゝなかれ人格主義にて徹底すべし

着衣喫飯無事過し時一要下出三界一什麼處去と一此の

當分宴會一切謝絶

境界にあつてしかも緊張一点すぎなきを云ふ。

拇指を藏せよ(惡魔拇指より入る)
徒歩主義(光は五年効果十年)

國際協調主義なる文句顯はる。積極的自主外交と言ふも同。何となれば之を具體的にせざれば何の異るところなく。夏暑き主義冬寒き主義と言ふが如し。具体案は何ぞ我常に力説せる外に道なし。きぬ着せず端的に道へ國民の前に。識者よ大膽に所信を告白せよ。

一切事修行餘暇、妥協するなかれ

明々々後日の確信加はる、相當將來の確信加はる、更に眞勇を作れ

眠について考へよ、忍は苦にあらず、樂境なり、持續せよ

天我に書を與へよ、食を考へよ、靈界に通ずるの途なきや

我清淨病を治せん、諸神諸佛の命を俟つ

新なる行を興へよ、人を猜疑するなかれ
神佛に謝す(自利、判他二百日目。正しき姿勢にて眠れ)―難中行難

第四百十三日目附録

煩悶心配の種は脳にあり。例示法難、未決の人、獄中にあつて保釋を待つまき初め胸にあり。夫を臍下にをろす。下ろせば又直ちに上がり胸に満つ。屢々下げて後ち漸く心静まる。次に腦を考ふ。後頭部、セメントにて固めし如く堅なるを知る柔軟性なし。静坐の力によつて漸次堅を解き和らげば終に頭部冷却を覺え静寂の境現前す。静坐の効なり

青年心身鍛鍊法則 第一原則に生き小學生徒より初むべし

孝道を發揚して暖かき義務心に目ざめしめよ

肺病精神安定對策

第一、肺病は治る

第二、患者の家にては禁酒、禁煙

第三、病室に寒暖計を備へよ

第五、音響につき隣人相扶けよ

黙―一日反省。昨日よりやゝ進む。私心なし。啓示を思へ更に奮闘、眞劍。阿ねる心、尊ぶる心を捨てよ―淵黙は修行の鍵

徒歩して疲勞せざるに達せよ、精神の力のみ(丹田で歩け)

法難除、病難除、觀音行、一步々々

(東京にて讀誦)
昨日 十句經 三百卷 (三萬六千六百卷) 八十六
心經 六卷 (七三二) 一枚 五枚 五枚
呪 一〇八 (六三七二) 二百六十枚

修行先決、餘事利他、虚飾不許、只佛縁
怒を抑ふる名藥ありや

自分を戒しめ且つ青年に告ぐ

一日飢ゆるさきあるものは幸福なり、飢いて飽かざるものは明日幸福なり

書狀は名筆を尊ばず、明確なれ

刻々反省せよ、反省より積極の修行なし、反省は日に自由にして且つ日に自由なり

雑談を戒めよ、青年會各所に敬老會を起せ

病者修養法

第一則 一切を忘れよ

第二則 最上の責任者落ちつけ

第三則 看護者は凡て病者の心持ち

第四則 信念は信仰によれ

第五則 讀經徹底せよ

第六則 責任者は凡て病者と苦樂を共にせよ

第七則 科學を信じ且つ尊重せよ

第八則 病者に自立の確信を興へよ

第九則 病者の前には常に端正

第十則 狹復ミ見れば更に緊張

第十一則 病者の夢を和げよ

政界刷新法則

第一則 八百長を廢せよ

第二則 分に應じ身を慎め

第三則 自肅は本部より。雑談の府ミするなかれ

第四則 主力を青年に注げ

第五則 青年に信念を興へよ

第六則 自肅は根幹より初めよ。急がば廻れ

第七則 日英提携對露抑壓。日獨握手對支調整。信念確立對米和樂

附録ノ二

抵抗養生法

千日の句

二十八日過ぎぬ、かたくなに思ルいわづらうな、空氣、安靜、よく嘯めばよし
東京にて認めをく

修養と家庭、東京亦道場、清淨化、眞劍化

昨夜開放就寢 東京少しく整理す

汝は五体を有せず、靈のみ、汝に五体の快樂なし、汝は靈の満足のみ享有す、汝の境致忘るゝなかれ
定力進み。人の言に神經を勞せず。超然として過ぐ。淡然として送る。

第四百四十四日

昭和十一年七月十四日

東京 晴

得意の絶頂に達せるものは不慮の災難病死苦あり。中途にあるものは之を望んで煩悶焦慮す。主人今
牢獄方三尺の中に呻吟し、其家庭高樓に暮すも淋しき事死滅の如し。寧ろ門前疊十枚に住む平和の家
庭に劣るこゝ万々。順逆の二境は外觀の決する處にあらず。却て主觀による。若し夫れ二境の外に超
然たる私の如きは眞乎の順境者にあらずして何ぞ

突如大命を拜す國策の準備ありや無し、大努力

再び怒るな

一級飛來

六禁斷嚴重

心自ら八方に配せよ

二人の病苦忘るゝな

(視針如棒一考慮)

心境微動なし

祖先と親戚を考へよ

イ、早起早寢に勤めよ

呼吸を調節せよ

ロ、火に親しむものは弱し

可成早く英語に着手せよ

ハ、普通の特薬を廢し精神力を棄さす

黙の定力發揮せよ

ニ、起居態度を端正にせよ且つ悠々應揚たれ

一、言葉を慎み且つ少くし丁寧なるは偉人の面目なり

二、一点すぎなき人は笑談を言はず且つ大聲笑ふなかれ

三、自分の事は自分で辨ぜよ

四、行終はる迄汝雲水一切の尊稱を辭せよ(時を嚴守せよ、能はざるときは時を約束するなかれ)

節約主義に徹底せよ、徳積まざれば光なし

汽車三等となる、特に衆と共にあれ

甲、亞細亞の光とは何ぞ、我

謙抑人に聞け

乙、黙して一点凝視せよ光輝かん(徳とは守るゝことを云ふ)

自ら其智を用ひす

丙、一氣に進むとき一歩退け判然として八方映ぜん

垂直にして語れ丹田を以て

我偉行録修行に入れるとき、初、身体諸所小故障ありき。修行によつて漸次克服せり。故に初めは其
の一日生存の確信ありて、明日健康の確信なかりき。漸次進み。明々後日及將來相當の確信ある程
健康進めり。亞細亞榮光の難行、不惜身命。夕に死して可なり。否既に死せり。何をか求めん、再後
此の句を捨つ。一切は天に托して難行の坂を上る。

貪、嘔、癡、屋裏の家具。家具なり

當分宴會一切謝絶

捨つるに及ばず。只用ひざるのみ。至言々々

拇指を藏せよ(惡覺拇指より入る)
徒歩主義

人曰く庶政一新空念佛。人心不安去らず。帝國現状徒らに奇抜を好む時にあらず。國民凡て信念に生き確乎として大地を踏んで立て。心神確立すれば汚濁去る。血清れば色鮮かなり。一新は輪血にあらず、自ら日に新なるを言ふ。識者迷ふなかれ

一切事修行の餘暇、妥協するなかれ

眠について考へよ、忍は苦にあらず、樂境なり、持續せよ

天我に書を與へよ、食を考へよ、靈界に通ずるの途ありや

我清淨病を治せん、諸神諸佛の命を俟つ

新なる行を與へよ、人を猜疑するなかれ

神佛に謝す(自利、利他は二百日目。正しき姿勢にて眠れ)―難中難行

第四百四十四日附録

東京に出づるも修行を中心に勤めて煩雜をさく。尙來客多く、修行は停頓せんぞす。偉行録今日に至る。多く郷里にありて外出せず、門を閉ざして面會せざりしによる。世の所謂逆境は我修行繼續の因縁。謹んで逆境に謝す。今夕都門を去つて郷里に向ふ。

修行繼續の念愈々猛烈。一切放修行集注。

青年心身鍛鍊法則 第一原則に生き、小學生徒より初むべし

孝道を發揚し暖かき義務心に目ざめよ

肺病精神安定對策

第一、肺病は治る

第二、患者の家にては禁酒、禁煙

第三、夜電燈を薄くし視神經を和げよ

第四、病室に寒暖計を備へよ

第五、音響について隣人相扶けよ

黙。―一日反省。昨日少し進む。私心なし。啓示を思へ更に奮闘。眞劍阿ねる心、尊ぶる心を捨てよ、―淵黙は修行の鍵

徒歩して疲勞せざるに達せよ、精神の力のみ(丹田で歩け)

法難除、病難除、觀音行、一歩々々

昨日 十句經 三百卷 (三萬六千九百卷) 八十七

心經 六卷 (七三八) 一枚

呪 一〇八 (六四八〇) 二百六十一

修行先決、餘時利他、虚飾不許、只佛縁

怒を抑ゆる名藥ありや

自分を戒め且つ青年に告ぐ

一日飢ゆるときあるものは幸福なり、飢いて飽かざるものは明日幸福なり

書狀は名筆を尊ばず、明確なれ

刻々反省せよ、反省より積極の修行なし、反省は日に自由にして且つ自在なり

雜談を戒めよ、青年會各所に敬老會を起せ

病者 修養法

第一則 一切を忘れよ

第三則 看護者は凡て病者の心持ち

第五則 讀經徹底せよ

第二則 最上の責任者落ちつけ

第四則 信念は信仰によれ

第六則 責任者は病者ニ苦樂を共にせよ

第七則 科學を信じ且つ尊重せよ
 第九則 病者の前には常に端正
 第十一則 病者の夢を和げよ

第八則 病者に自立の確信を與へよ
 第十則 快復を見れば更に緊張

政界刷新法則

第一則 八百長を廢せよ
 第二則 分に應じ身を慎め
 第三則 自肅は本部より。雜誌の府とするなかれ
 第四則 主力を青年に注げ
 第五則 青年に信念を與へよ
 第六則 自肅は根幹より初めよ。急がば廻れ
 第七則 日英提携對露抑壓、日獨握手對支調整、信念確立對米和樂

附録ノ二

抵抗養生法

千日の句

二十九日過ぎぬ、よくな^{九七一}ひみぢやと言はば言へ生れかはつて生きやう百年
 東京にて認めをく
 修養と家庭、東京亦道場、清淨、眞劍
 昨夜開放就寢 東京書小整理
 汝は五体なし、靈のみ、汝に五体の快樂なし、汝は靈の満足のみ享有す、汝の境致忘るゝなかれ
 定力進むを覺ゆ。吞舟、吞海、意に介せず。超然、淡然。

第四百四十五日

昭和十一年七月十五日

富山

曇、冷

長男連れ歸國。病室に家族一同集まる。病者順調元氣よろし。凡て満足と氣溢る。諸神諸佛の御力。只有りがたし々々。三等寢台車洋服の儼寢、ズボン釣の爲め肩凝る。木刀振千回、水かぶる六十杯即時治す。凡て適合す

突如大命を拜す國策の準備ありや無し、大努力

再び怒るな

一奴飛來

六斷禁嚴重

心自ら八方に配せよ

二人の病苦忘るゝな

(視針如棒―考慮)

心境微動なし

祖先と親戚を考へよ

イ、早起早寢に勤めよ

呼吸を調節せよ

ロ、火に親しむ者は弱し

可成早く英語に着手せよ

ハ、普通の持薬を廢し精神力を棄さす

黙の定力發揮せよ

ニ、起居態度を端正にせよ且つ悠々應揚たれ

一、言葉を慎み且つ少くし丁寧なるは偉人の面目なり

二、一点すぎなき人は笑談を言はず且つ大聲笑ふ勿れ

三、自分の事は自分で辨ぜよ

四、行終はる迄汝雲水一切の尊稱を辭せよ(時を嚴守せよ、能はざる時は約束するなかれ)

節約主義に徹底せよ、徳積まざれば光なし

汽車三等となる、特に衆と共にあれ

甲、亞細亞の光とは何ぞ、我

謙抑人に聞け

乙、黙して一点凝視せよ光輝かん(徳さは守ることを云ふ)

自ら其智を用ひす

丙、一氣に進むとき一步退け、判然として八方映ぜん

垂直にして語れ丹田を以て

悟り得ば神通自在。肉身を換へずして自由に身を現する観音の働きなる。清淨身界。尙身光自照せんと臨濟道破す。輝くとは何ぞ、眞に輝くなり。肉眼によつて輝くを看得るなり。練磨の力のみ。人は瓦にあらず金剛石なり。磨け、磨け、輝かん

法喜禪悦シ身光自照ラ一形容にあらず。現實なり。

當分宴會一切謝絶
拇指を藏せよ(惡覺拇指より入る)
徒歩主義(光は五年効果十年)

軍部提唱の國策、新聞紙上に顯はる。生活安定の内に身体健康あり。よし。然ども若し夫れ心身健全を主張し。心の練磨は健康に大影響あることを確言せん乎。錦上花なり。軍部反省更に一步進めよ。

一切事修行の餘暇、妥協するなかれ

眠について考へよ、忍は苦にあらず、樂境なり、持續せよ

天我に書を與へよ、食を考へよ、靈界に通するの途ありや

我清淨病を治せん、諸神諸佛の命を俟つ

新なる行を與へよ、人を猜疑するなかれ

神佛に謝す(自利、利他は二百日目。正しき姿勢にて眠れ)

第四百四十五日目附録

靜坐初め朝夕十分。三日に二分づゝ加へ。約一ヶ月にして三十分に到る。三十分に於て進むことを止めよ。三十分靜坐を繰り返へすこゝ二ヶ月又は三ヶ月。眞乎に趣味加はり体力之に協ふべきに於て之を増加せよ。三十分靜座のとき、座ブトンの丸きものを作り座ブトンの上に更に重ね、尻にしけ。力を要せずして、臍下張り、鼻梁、臍と相對せん。
青年心身鍛鍊法則 第一原則に生きよ、小學生徒より初むべし

孝道を發揚し、暖かき義務心に目ざめよ

肺病精神安定對策

第一、肺病は治る

第二、患者の家にては禁酒、禁煙

第三、夜電燈を薄くし視神經を和けよ

第四、病室に寒暖計を備へよ

第五、音響について隣人相扶けよ

默一一日反省……昨日尙不足。私心なし。啓示を思へ更に奮闘。

阿ねる心、尊ぶる心を捨てよ一淵默は修行の鍵

徒歩して疲勞せざるに達せよ、精神の力のみ

法難除、病難除、觀音行、一步々々

昨日 十句經 三百卷 (三万七千二百卷) 八十八

(東京半) 心經 六卷 (七四四) 一

(列車中半) 呪 一〇八 (六五八八) 二百六十二

修行先決、餘事利他、虚飾不許、只佛縁

怒を抑ふる名藥ありや

自分を戒しめ且つ青年に告ぐ

一日飢みるときあるものは幸福なり、飢いて飽かざるものは明日幸福なり

書狀は名筆を尊ばず、明確なれ

刻々反省せよ、反省より積極の修行なし、反省は日に自由にして且つ自在なり

雑談を戒めよ、青年會各所に敬老會を起せ

病者修養法

- 第一則 一切を忘れよ
- 第二則 最上の責任者落ちつけ
- 第三則 看護者は凡て病者の心持ち
- 第四則 信念は信仰によれ
- 第五則 讀經徹底せよ
- 第六則 責任者は病者と苦樂を共にせよ
- 第七則 科學を信じ且つ尊重せよ
- 第八則 病者に自立の確信を與へよ
- 第九則 病者の前には常に端正
- 第十則 快復を見れば更に緊張
- 第十則 病者の夢を和げよ

政界刷新法則

- 第一則 八百長を廢せよ
- 第二則 分に應じ身を慎め
- 第三則 自肅は本部より。雜談の府にするなかれ
- 第四則 主力を青年に注げ
- 第五則 青年に信念を與へよ
- 第六則 自肅は根幹より初めよ。急がば廻れ
- 第七則 日英提携對露抑壓、日獨握手對支調整、信念確立對米和樂

附録ノ二

抵抗養生法

千日の句

三十日過ぎぬ、病苦ルセなれる程油斷あり學手投足愈々戒心
病室にはる。病者順調、但し戒心

修養と家庭、全家族富山に集まる、清淨、眞劍 全家族凡て上乘

昨夜列車、寢、起きて疲れず、三等寢台、洋服の儘にて能く適合す。更に一步進めて寢台に分れよ
汝は五体なし、靈のみ、汝に五体の快樂なし、汝は靈の満足のみ享有す、汝の境致忘るなかれ
定力進む。更に一段の勇を鼓して定力を練り振へ。超然淡然。
整理少し進む

第四百四十六日

昭和十一年七月十六日 富山 晴、暑

梅雨去り。本格夏到る。病者に取つて大難關。健者尙暑氣を歎す。されど砂漠熱帶地は別。温帯日本
に於て暑は只氣分のみ。心機一轉涼風腋下に湧く。病者の前で暑しき云ふなかれ。病者又暑を忘れん

再び怒るな 一劍飛來
六禁斷嚴重 心自ら八方に配せよ

二人の病苦忘るゝな 視針如棒一考慮

心境微動なし 祖先と親戚を考へよ

イ、早起早寢に勤めよ 呼吸を調節せよ

ロ、火に親しむものは弱し 可成早く英語に着手せよ

ハ、普通の持藥を廢し精神力を藥とす 默の定力發揮せよ

ニ、起居態度を端正にせよ且つ悠々應揚たれ

一、言葉慎み且つ少くし丁寧なるは偉人の面目なり

二、一点すぎなき人は笑談を言はず且つ大聲笑ふなかれ

三、自分の事は自分にて辨ぜよ